秋　田　市

秋田臨空港新都市開発関係
埋蔵文化財発掘調査報告書

下堤G遺跡
野畑遺跡
湯ノ沢B遺跡

1983. 3　　秋田市教育委員会

序

秋田臨空港新都市開発事業に係る御所野台地部の埋蔵文化財につきましては、昭和56年度から対処し、本年度もまた五ケ所の遺跡発掘調査を実施いたしました。今回の調査においても先土器時代から平安時代の人々の生活跡を確認し、多くの貴重な遺物が出土しました。

調査の実施にあたっては県、関係機関の指導援助をはじめ、地元関係者、土地所有者等多くの方々の積極的なご協力をいただき深く感謝申しあげる次第です。

本報告書が文化財保護のため、さらには研究資料として広く活用されれば幸甚に存じます。

昭和58年３月

秋田市教育委員会

教育長　高　泉　宏　作

例　　言

1．本報告書は、秋田市四ツ小屋小阿地字下堤（下堤Ｇ遺跡）、上北手御所野字野畑（野畑遺跡）、四ツ小屋末戸松本字湯ノ沢（湯ノ沢Ｂ遺跡）に所在する各遺跡の発掘調査報告書である。

2．本報告は、調査員、石郷岡誠一、高橋忠彦、調査補佐員、安田忠市、鈴木　功の協力を得て菅原俊行が編集したものである。

3．石質の鑑定は、秋田県立博物館の渡辺　晟氏によるものである。

4．本報告書の執筆は、下堤Ｇ遺跡ー安田忠市、野畑遺跡ー石郷岡誠一、湯ノ沢Ｂ遺跡ー高橋忠彦が担当し、菅原が訂正、加筆した。下堤Ｇ遺跡（先土器時代）と前記以外は菅原俊行が担当した。

5．発掘調査、整理作業については下記の各氏より指導、助言を賜った。

菊地強一、工藤雅樹、小林達雄、富樫泰時、藤沼邦彦

6．整理作業は下記の人々の協力を得た。

相場　修、五十嵐芳郎、石川恵美子、伊藤茂子、大友幸子、佐々木清子、鈴木徳行、三浦千枝子、三浦洋子、渡部キヨ

7．発掘調査による出土遺物、実測図、写真、その他の記録は秋田市教育委員会が保管する。

目　　次

序
例言
調査に至るまでの経過…… 1
調査体制…… 1
調査の方法と経過…… 2
遺跡の位置と地形・地質…… 8
下堤G遺跡…… 11
遺跡の概観…… 14
遺構と遺物…… 14
まとめ…… 40
野畑遺跡…… 51
遺跡の概観…… 54
遺構と遺物…… 54
まとめ…… 71
湯ノ沢B遺跡…… 75
遺跡の概観…… 79
遺構と遺物…… 79
まとめ…… 131
下堤G遺跡（先土器時代）発掘調査概報 …… 137
遺跡の概観…… 138
層位…… 138
出土遺物…… 139
遺構…… 156
まとめ…… 160

秋田市
遺跡の位置
1000m
0
1000
2000

御所野台地南より秋田市街地を臨む

下堤G遺跡（北→）

野畑遺跡（南→）

湯ノ沢Ｂ遺跡（東→）

調 査 の 概 要

調査に至るまでの経過

秋田市南東部地域は、昭和56年６月の秋田空港の開港、東北横断自動車道秋田線秋田インターチェンジ開設予定等、空陸両面の交通の要衝に位置する所である。このような状況の中で南東部地域における御所野地区については特に広大な台地であることから、いち速く開発可能性等についての各調査が実施され、県市総合計画においても産業、住宅団地が一体となった総合的ニュータウン―臨空港新都市として具体的に位置づけられた。

昭和56年度には開発計画地域内の西部工業団地造成に先だち、下堤Ｄ遺跡の発掘調査を行なっている。昭和55年に御所野台地全体の分布調査を実施し、約30カ所の遺物散布地を確認していたが、昭和57年度は今後の開発計画に対処するため分布調査を基に遺跡の範囲確認調査を実施することにし、その結果、台地上に24カ所の遺跡を確認したのである。（第３図、御所野台地部範囲確認遺跡一覧表）

この結果に基づき協議を重ね、引き続き年度別に計画的な発掘調査をすることになり、昭和57年度は下堤Ｇ遺跡、野畑遺跡、湯ノ沢Ｂ遺跡、坂ノ上Ｃ、Ｄ遺跡を調査したのである。

調査体制

調査期間　昭和57年５月６日～７月14日（範囲確認調査）
　　昭和57年８月２日～12月15日（発掘調査及び伐採作業）

調査主体者　（財団法人）秋田県土地開発公社

調査担当者　秋田市・秋田市教育委員会

調　査　員　菅原俊行、石郷岡誠一（秋田市教育委員会社会教育課）
　　高橋忠彦、小林　克（秋田県埋蔵文化財センター）

調査補佐員　安田忠市（秋田考古学協会会員）、鈴木　功

調査協力員　五十嵐芳郎（秋田考古学協会会員）、武藤康弘（国学院大学）、本間　宏（明治大学）、石川恵美子（筑波大学）、塚田　誠、鈴木　浩（秋田大学）、相場　修（明治大学）、田代博秀（国学院大学）

調査作業員　鈴木銀一、鈴木長治、鈴木茂治、鈴木徳行、三浦竹治、三浦　馨、三浦吉司、三浦吉男、三浦正二、秋本与次郎、秋本佐市、岩崎岩五郎、水野金光、三浦三治、鈴木力雄、加賀谷新之助、渡部太郎、堀井鉄五郎、鈴木銀三郎、高橋貞義、渡部吉春、加賀谷金一郎、尾形市雄、安藤金四郎、後藤善一郎、渡部金次郎、佐々木定吉、渡辺圭太郎、堀野兼雄、渡辺太市、児玉太郎、斎藤孝文、島崎康樹、加藤熊雄、鈴木慶子、伊藤茂子、伊藤ヒメ子、三浦タキ、三浦千枝子、三浦トミエ、三浦初枝、堀井ヤス、橋本栄子、佐々木フミ、大友幸子、加藤満子、熊谷文子、相場ミツエ、堀

井キヨエ、鈴木ウメノ、鈴木トミ、工藤キクエ、堀井征子、三浦シゲ、宮田トキ子、三浦ナツ、鈴木ツヤ、高島綾子、佐々木縫子、渡部キネ子、佐々木清子、渡部キヨ、嵯峨信枝、堀井シゲ、稲垣テル子、尾形ミツエ、杉沢チエ子、鈴木貞子、杉沢フミ、佐々木シマ、渡辺ミネ、渡部セツ、佐々木ヨシ、渡部アイ子、高橋ヨシ子、堀野京子、矢倉アキ、渡辺ミサ、加賀谷ヒデ

事　務　員　佐藤誠子、三浦洋子

調査の方法と経過

調査区は各遺跡ごとに原点を任意に決め、東西南北（磁北）に基準線を作り、大グリッド（40m×40m）、その中に小グリッド（4m×4m）を設定し、東西（X軸）に数字、南北（Y軸）にアルファベットを配し、その組み合せを作り、遺跡番号、大グリッド番号、小グリッドの順に呼称することとした。

発掘調査は下提G遺跡（8/9～19/23）、野畑遺跡（8/9～9/6）、湯ノ沢B遺跡（9/6～11/30）、坂ノ上C、D遺跡（9/8～11/15）の工程で行なったが、各遺跡とも山林原野であり、伐採作業から始めなければならずバックホーを使っても、表土剝ぎは木根のため、かなり苦労した。下堤G遺跡、野畑遺跡、湯ノ沢B遺跡は図らずも縄文時代前期末～中期初頭、中期末葉の同時期の集落であったが、坂ノ上C、D遺跡については範囲確認調査の際、広範囲に遺物が出土し、期待された遺跡であったが発掘の結果遺物は包含層に散在するが両遺跡に遺構は確認できなかったもので出土した遺物（第1図、第2図）を簡単に記述するにとどめる。今回の調査は範囲確認も含めて天候に恵まれたので、来年度発掘調査予定地の伐採も一部実施した。

坂ノ上C・D遺跡出土遺物

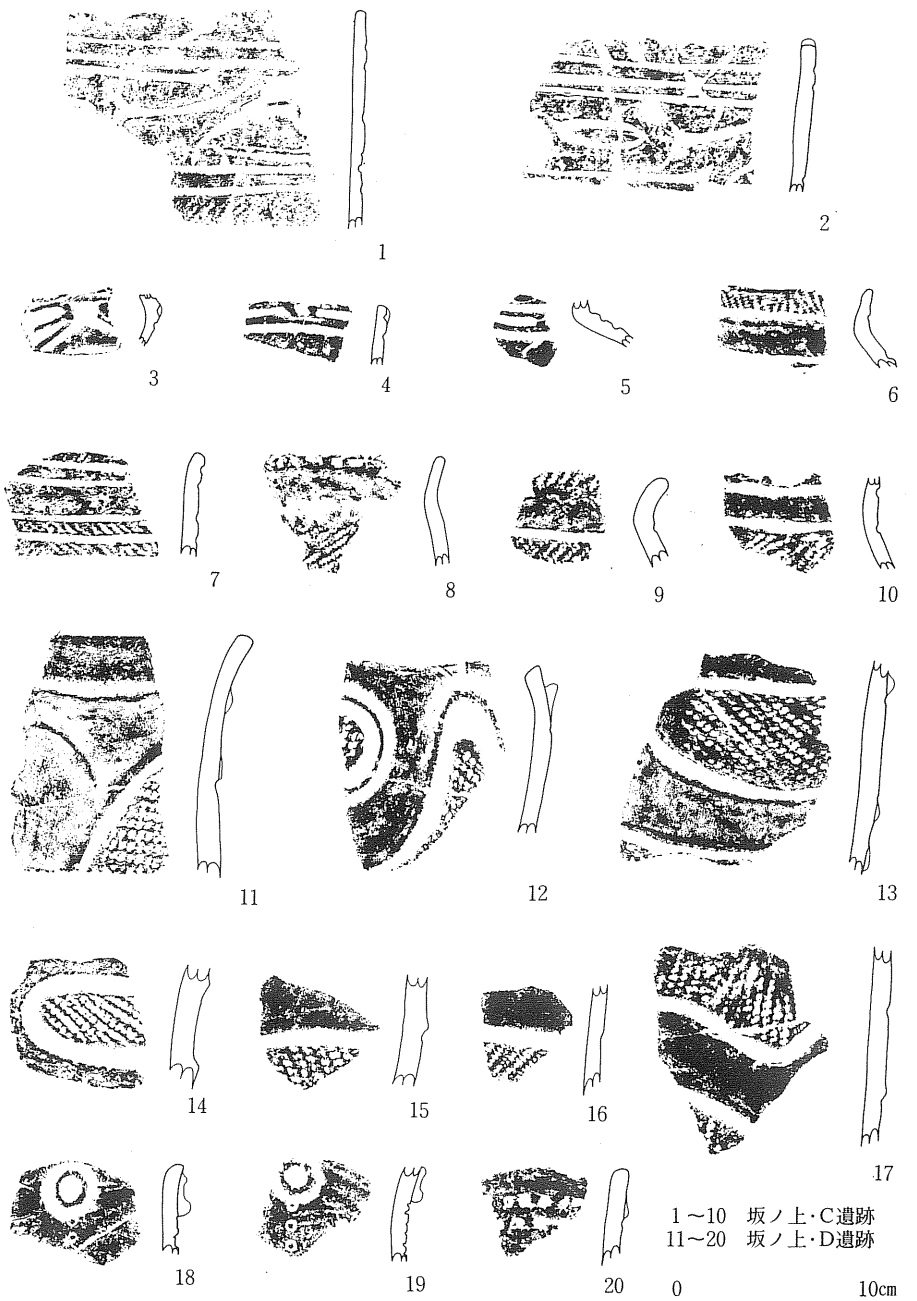
土器（第1図1～20、第2図21）

1～10・21は坂ノ上C遺跡出土で、主に沈線で文様を施すものである。1・2は変形波状口縁をなす深鉢形土器である。口縁部は沈線による平行・楕円形・孤状などの文様を施す。3～5は工字文・変形工字文で、3・4には2個1対の瘤が付く。6～10は平行沈線文の施されるもので、沈線間を磨消すものとそうでないもの、口縁部が外反するものとしないものがある。21は平縁口線の鉢形土器で、口縁部内外面に1条の沈線が巡り、地文はLR単節縄文（横位回転）である。全体に良く磨かれている。以上、縄文時代晩期から弥生時代にかけての土器と考えられる。11～20は坂ノ上D遺跡出土で、曲線的な磨消帯が施されるものである。磨消帯は周辺より盛り上がるもの、隆起線と沈線で区画されるものが多い。18・19はボタン状の貼り付けが施され、その下に刺突が垂下する。20は隆帯の上・下に列点文が巡る。以上、縄文時代中期未葉の大木10式土器と考えられる。

土製品（第2図22）　土器片を加工して作った円盤状土製品で、坂ノ上D遺跡出土である。

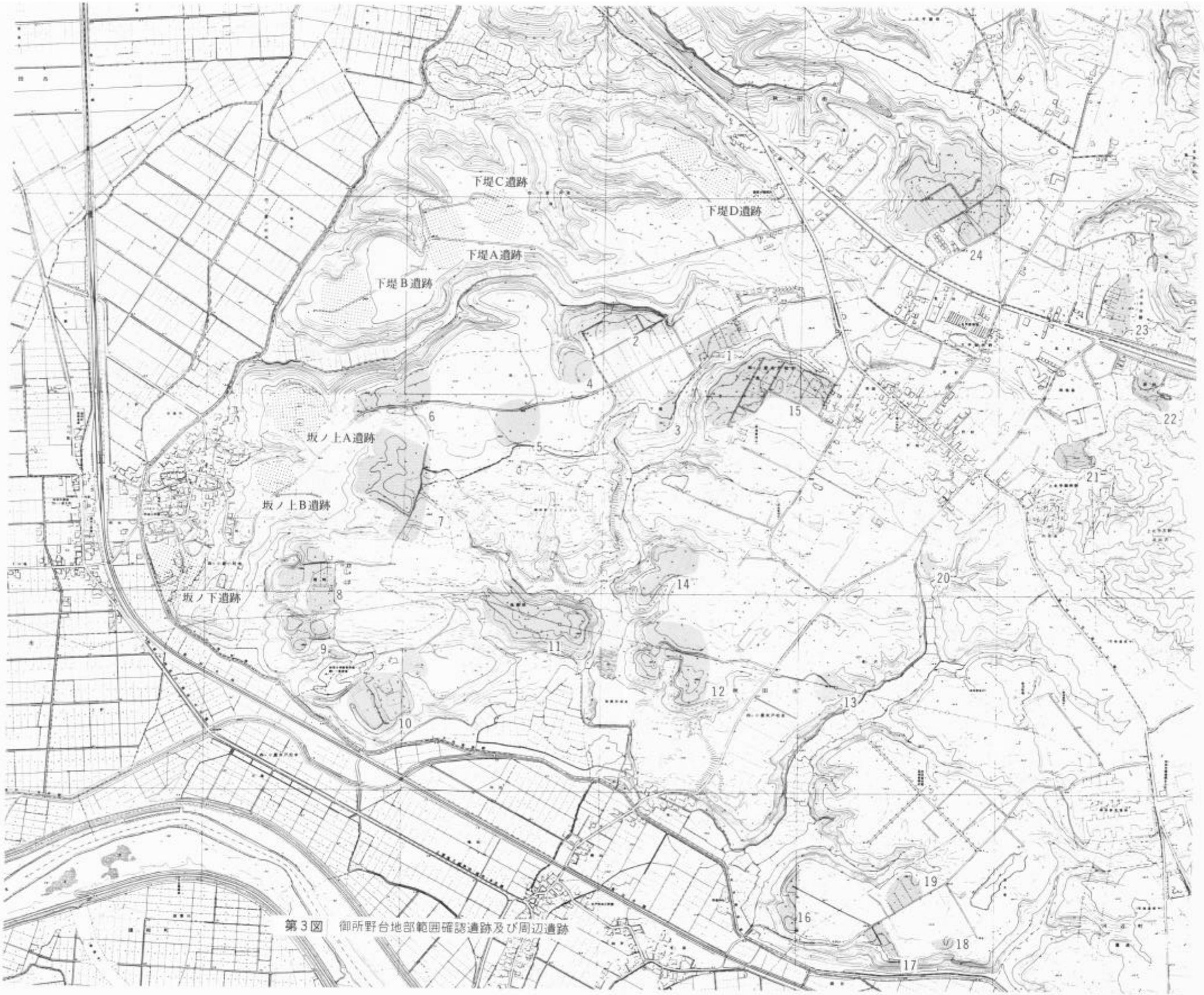
石器（第2図23～34）　24～27・29～32は坂ノ上C遺跡出土、23・28・33・34は坂ノ上D遺跡出土である。**石鏃**（第2図23）無茎鏃で、硬質頁岩製である。　**石匙**（第2図24）横形石匙で、ツマ

ミ部と刃部の一部を欠く。硬質頁岩製である。　**ヘラ状石器**（第２図25）両面加工で、撥形をなす。硬質頁製である。　**磨製石斧**（第２図26～28）完形品ではなく、28は擦痕が著しい。凝灰岩製である。　**石錘**（第２図29）両端を打ち欠いたものである。凝灰岩製である。　**磨石**（第２図30～33）安山岩製で磨滅が著しい。　**石皿状石器**（第２図34）扁平なもので良く磨滅し、中央部が凹む安山岩製である。



第１図　坂の上Ｃ・Ｄ遺跡出土遺物

第２図　坂ノ上C・D遺跡出土遺物



第3図　御所野台地部範囲確認遺跡及び周辺遺跡

御所野台地部　範囲確認遺跡一覧表					
遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	面積㎡	現状
1	下堤E	秋田市四ツ小屋小阿地字下堤	縄文	5,625	畑
2	下堤F	〃　〃	〃	14,375	〃
3	下堤G	〃　〃	先土器・縄文(中)	5,000	山林原野
4	坂ノ上C	〃　四ツ小屋小阿地字坂ノ上	縄文	6,000	〃
5	坂ノ上D	〃　〃	〃	14,060	〃
6	坂ノ上E	〃　〃	〃	15,000	〃
7	坂ノ上F	〃　〃	〃	37,810	〃
8	狸崎A	〃　四ツ小屋小阿地字狸崎	縄文(晩)	13,750	畑・山林原野
9	狸崎B	〃　〃	縄文	11,250	原野
10	地蔵田A	〃　四ツ小屋末戸松本字地蔵田	先土器・縄文・平安	30,000	畑
11	地蔵田B	〃　〃	縄文(中晩)・弥生	25,000	山林原野
12	湯ノ沢A	〃　四ツ小屋末戸松本字湯ノ沢	縄文	21,555	〃
13	湯ノ沢B	〃　〃	縄文(前・中)	5,000	〃
14	湯ノ沢C	〃　〃	縄文(中晩)・弥生	11,565	〃
15	湯ノ沢D	〃　〃	縄文(中)	35,000	畑
16	湯ノ沢E	〃　〃	縄文	7,500	〃
17	湯ノ沢F	〃　〃	縄文・土師須恵	5,310	〃
18	湯ノ沢G	〃　〃	縄文(後)	1,300	原野
19	湯ノ沢H	〃　〃	縄文	5,940	畑
20	野畑	〃　上北手御所野字野畑	縄文(中)	1,875	山林
21	野形	〃　上北手御所野字野形	土師・須恵	5,940	山林原野
22	深田沢	〃　上北手古野字深田沢	縄文・平安	6,875	畑
23	台	〃　上北手古野字台	〃	8,440	〃
24	地方	〃　上北手猿田字堤ノ沢	縄文(晩)	54,670	畑・原野

遺跡の位置と地形・地質

秋田市街から国道13号線を南下し、仁井田、横山を過ぎ坂を登ると標高約40ｍ前後の広大な台地が開ける。これは奥羽本線四ツ小屋駅方面からもよく見える平坦な台地であり、臨空港新都市開発計画地域である。

下堤Ｇ遺跡

前述の坂を登ると三叉路があり、旧道に入り約450ｍほど行くと西側に羽後銀行の野球場がある。そこを西へ約500ｍ、畑の中を進み南に張り出した舌状台地が下堤Ｇ遺跡である。

野畑遺跡・湯ノ沢Ｂ遺跡

三叉路から旧道に入り約1km進み、御所野地区の南端部を西側に約200ｍ行った南に張り出した舌状台地が野畑遺跡である。さらに約500ｍ行き、東に約150ｍの南面した台地が湯ノ沢Ｂ遺跡である。

確認された24カ所の遺跡の存在する地形は大別して和田丘陵と末戸台台地に分けられる。和田丘陵は平坦面をあまり持たない。しかし、定高性を持った標高60～150ｍのかなり開析を受けた老年期地形を示し、地質は第３系鮮新統に属する青色砂質シルト岩（笹岡層）と青灰色塊状泥岩（天徳寺層）、それに中新統に属する暗灰色泥岩（船川層）などからなっている。末戸台台地は標高25～50ｍ強でその表面は大変平坦である。この台地は和田丘陵と接して数段の段丘を識別できる。これらは内藤[1]の区分からすると、上位から標高45～50ｍ強の椿台段丘、標高40ｍ強の上野台段丘Ⅰ、標高35ｍ強の上野台段丘Ⅱ、標高25ｍ強の宝竜崎段丘の４段に分けられる。（第４図）

椿台段丘

岩見川右岸末戸台台地では45～50ｍ強の標高をもつ、いわゆる椿台面をその堆積面とする椿台層が厚い礫（最大径10cm前後）、砂、粘土の互層で構成されている。ただ基底高度はわからない。岩相は最上部に１～２ｍの褐色の粘土質火山灰層があり、次に礫・砂・粘土の互層で、砂礫の部分でしばしばクロス・ラミナ（斜交葉理）がみられ、砂土あるいはシルトは水平な細かい層理をなすことが多い。層厚をみると、礫層はうすく、砂・粘土層が厚い。その下部は第３系の泥岩（船川層）や砂質シルト（笹岡層）となっている。

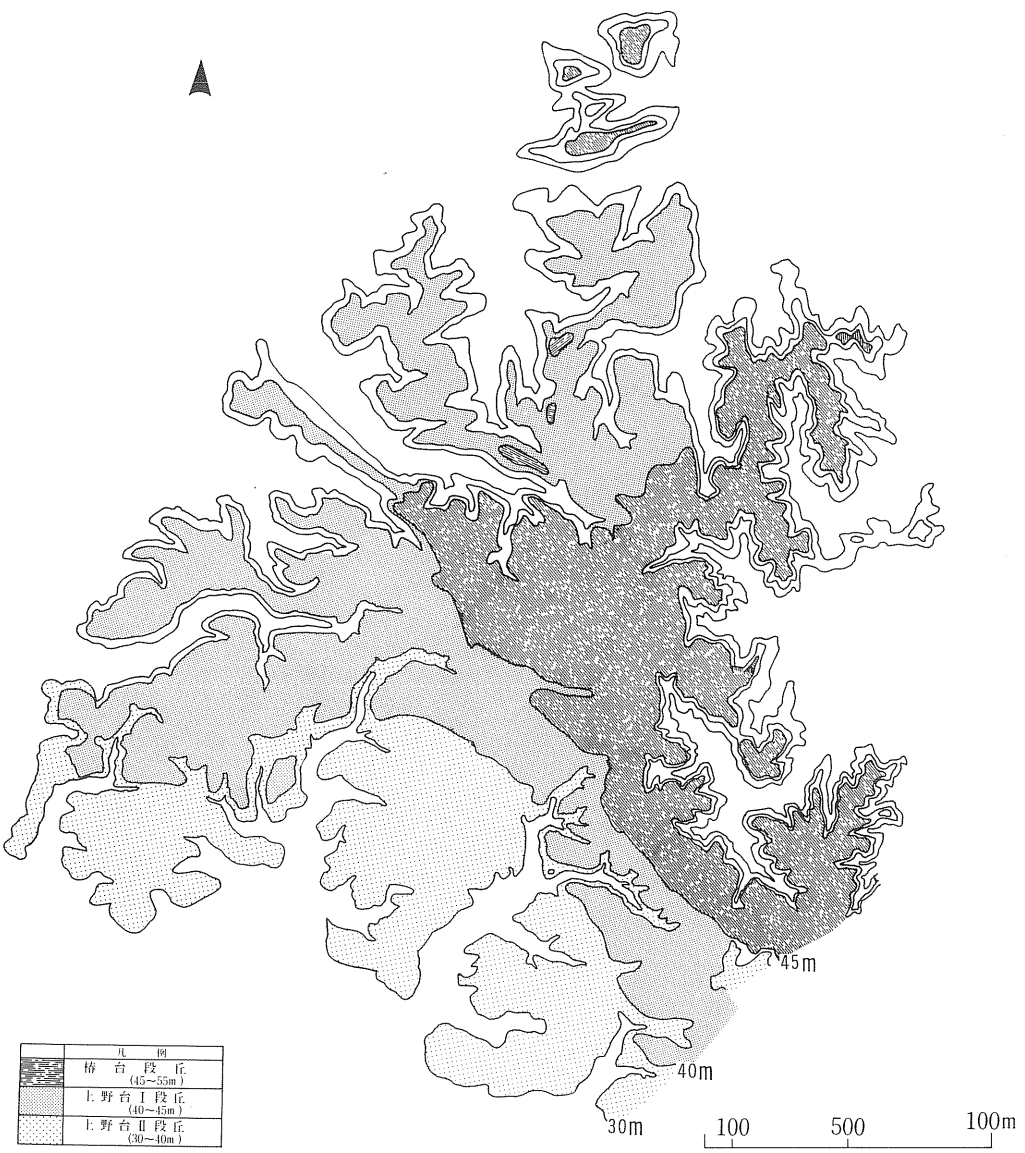
上野台段丘Ⅰ

末戸台台地で椿台段丘の南側に標高40ｍ強でついている段丘が上野台段丘Ⅰと呼ばれている。表層の１～２ｍの粘土質火山灰層を除くと、段丘堆積物は最大径20～30cmの礫を含む礫層であり、厚さは５ｍ程度でその下部は第３系となっている。下堤Ｇ遺跡はこの上野台段丘Ⅰに位置する。

上野台段丘Ⅱ

末戸台台地では上野台段丘Ⅰとの比高が５ｍ強である。段丘堆積物の岩相は上野台段丘Ⅰとほぼ同様で、層厚は５ｍ前後である。内藤によれば厚い礫層の下部は椿台層に当るとしている。野畑遺跡、湯ノ沢Ｂ遺跡はこの上野台段丘Ⅱに位置する。段丘堆積物の特徴は上野台Ⅰ・Ⅱ面では最大径30cm前後の亜円礫を主体とするほぼ一様な礫層をもち、河川堆積物で厚さも加味すると岩見川など

による河成の浸食段丘面と考えられる。椿台、上野台Ⅰ・Ⅱ面の各面をおおっている層厚１～２ｍのシルト分を含んだ粘土質火山灰層は、男鹿半島の寒風山が起源と一応考えられている。[2] この粘土質火山灰層の表層細粒物質の風化状態をみていくと、椿台、上野台Ⅰ・Ⅱ面では黒色土の下の細粒物質のうち、上部50～100cmが明褐色を呈し、下部は灰色で境は漸移する。また、土壌断面を見ると椿台、上野台Ⅰ・Ⅱ面をおおう土壌は、いわゆる高岡２統に属していると考えられ、比較的大きい円礫を混入していて、黒色土層を厚く堆積させている。この層中には火山ガラスを混入しており、火山灰が関係しているものと推定される。



第４図　段　　丘

参　考　文　献

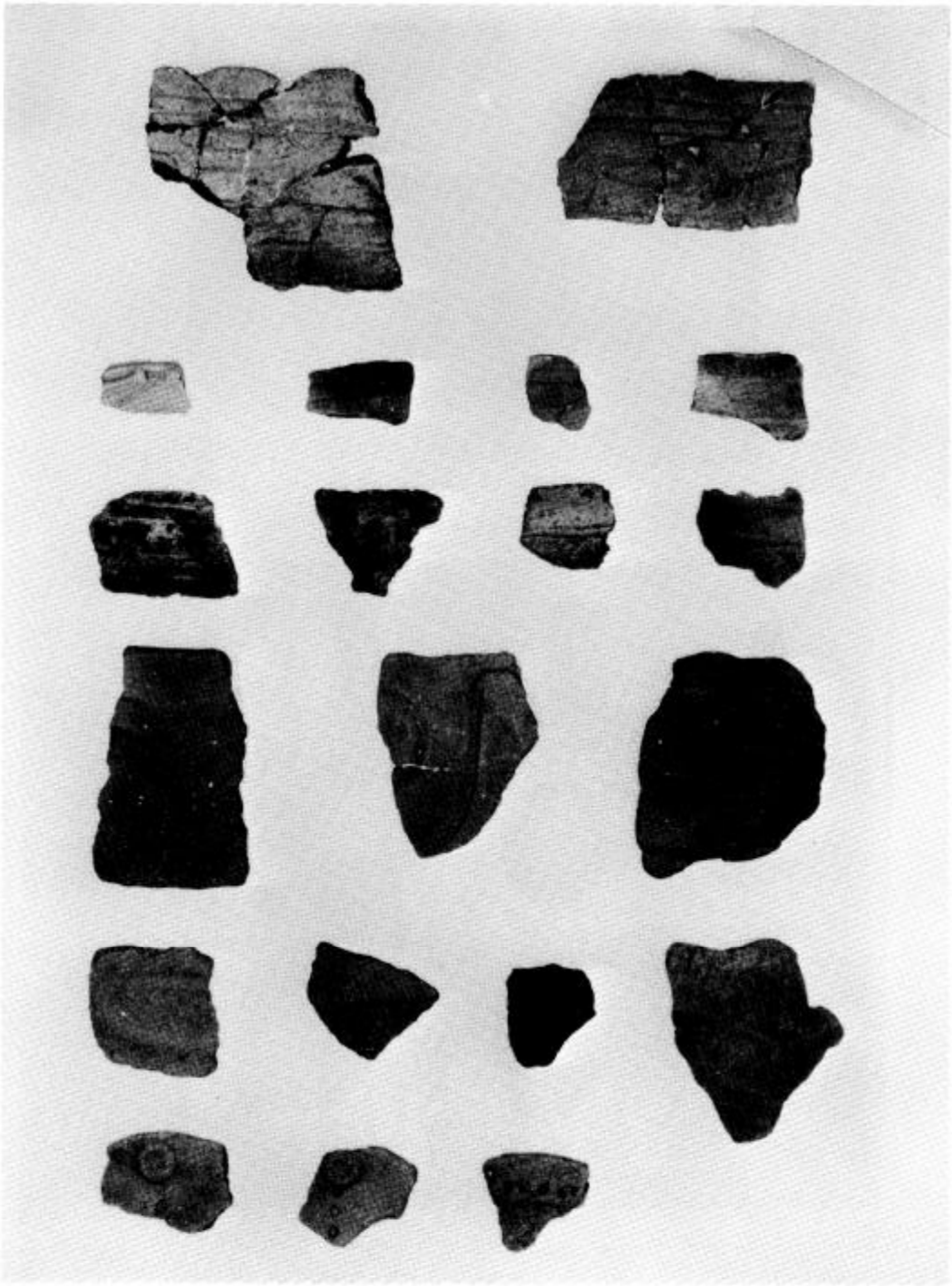
1)　内藤博夫　「秋田県岩見川流域およびその周辺の段丘について」
第４紀研究第４巻第１号　1965年

2)　経済企画庁土地分類企画調査「秋田」1966年

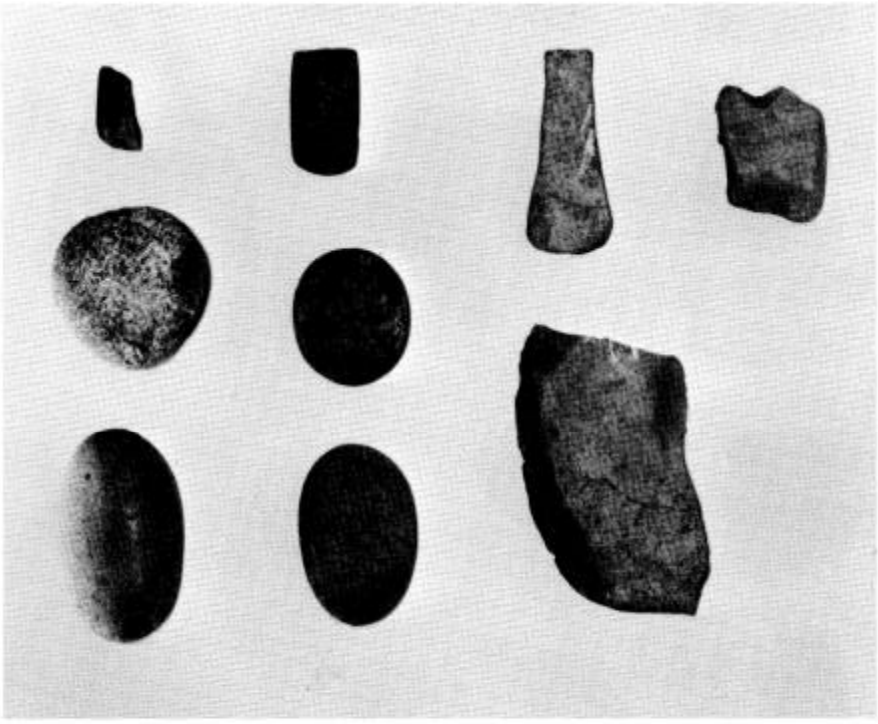
秋田県教育委員会「八郎潟の研究」1965年

村山　馨　「火山活動と地形」大明堂

林　　宏　「秋田県男鹿半島一の目潟周辺の火山拠出物について」地質学雑誌第61巻第717号
1955年

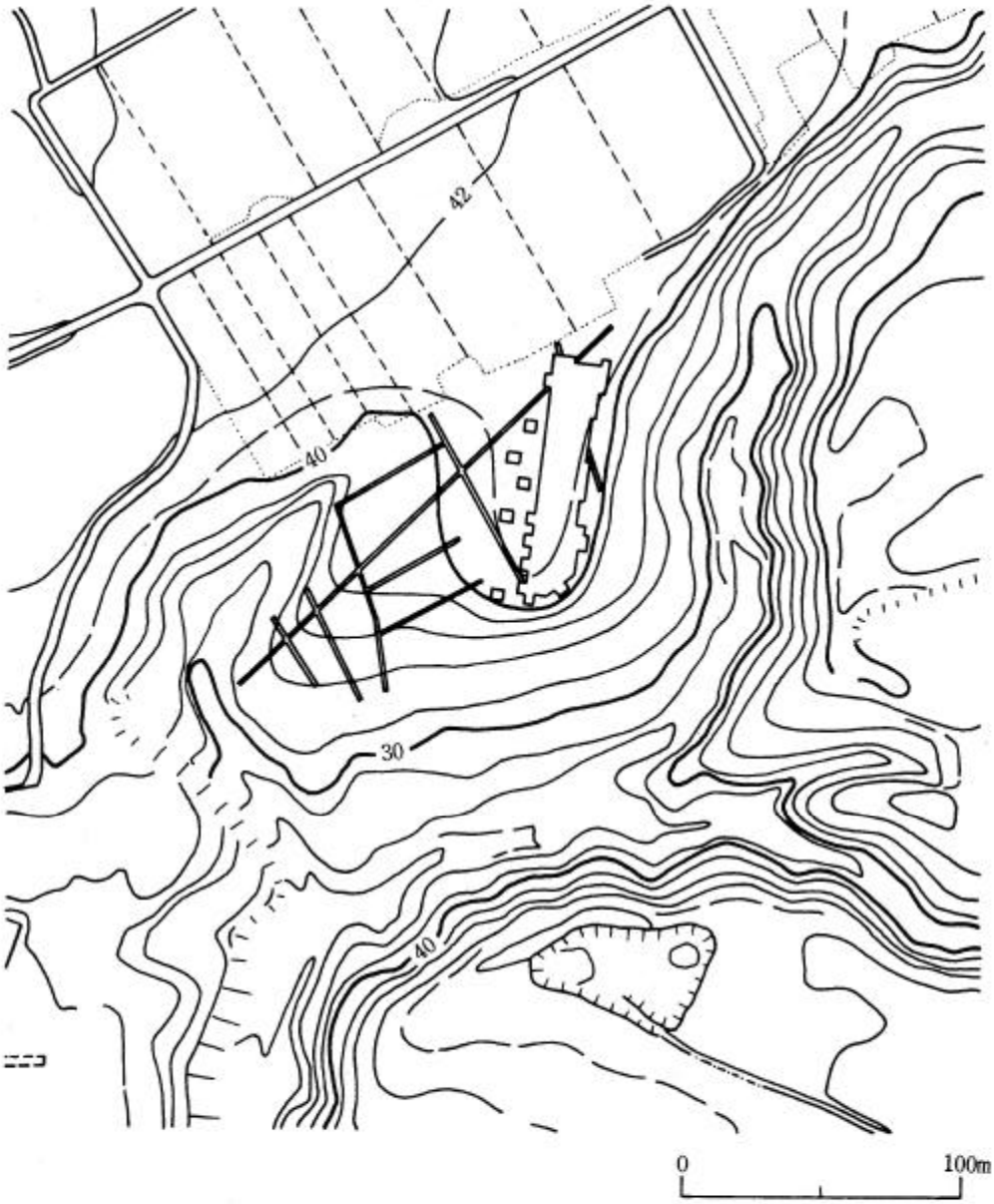


坂ノ上C・D遺跡出土土器

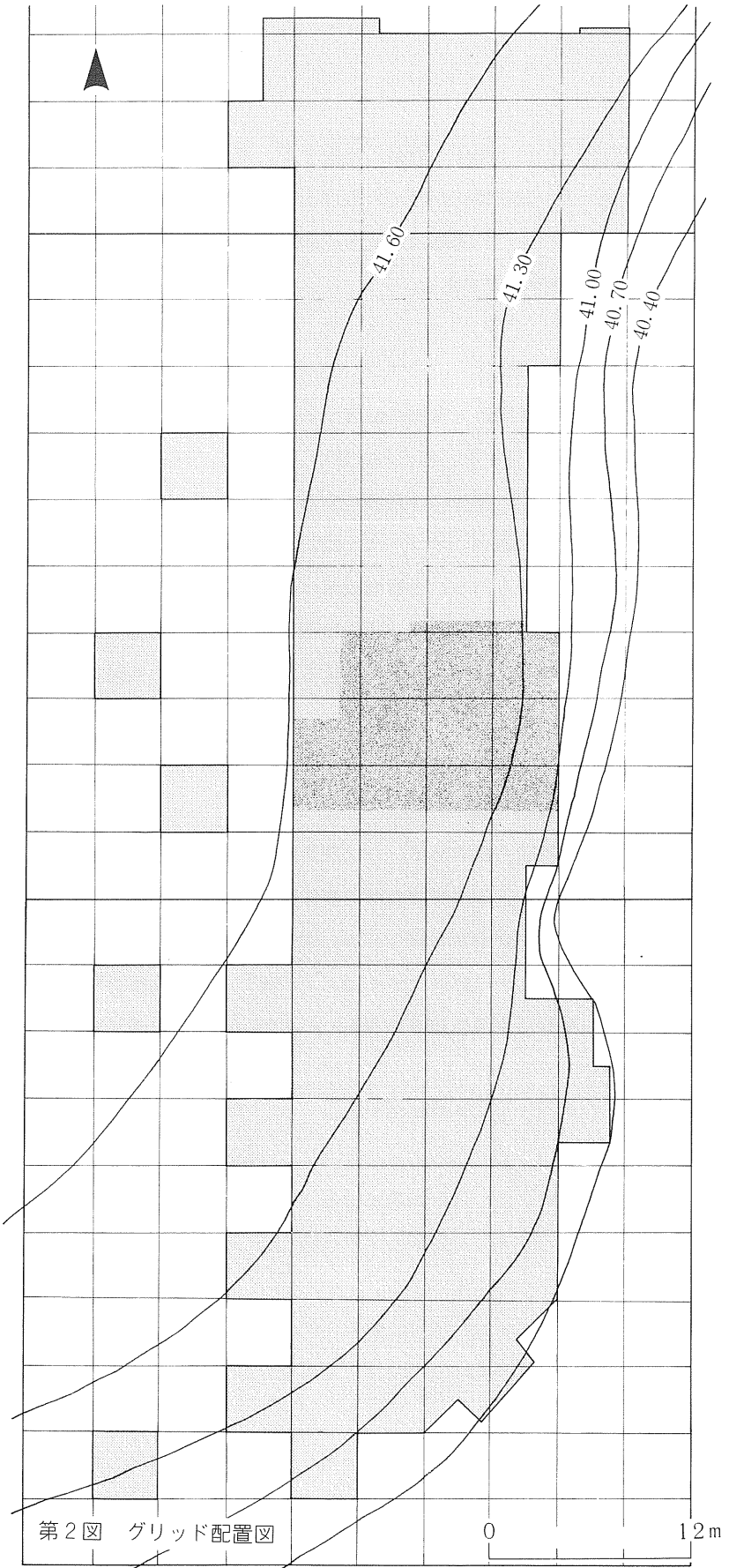


坂ノ上C・D遺跡出土土器・石器

下堤Ｇ遺跡



第１図　遺跡周辺の地形



第２図　グリッド配置図

遺跡の概観

南に張り出した舌状台地（約10,000㎡）の東に位置する。遺跡は先土器時代との複合であり、住居跡は縄文時代前期末葉から中期初頭にかけてのものが１軒、中期末葉のものが５軒検出された。縄文時代前期（末）から中期（末）の遺跡は、北西約800ｍに下堤Ａ、Ｂ遺跡、北東約600ｍに下堤Ｄ遺跡、西約900ｍに坂ノ上Ａ遺跡などがある。

遺構と遺物

１号住居跡（第３図）

調査区南側の縁辺部で、２号住居跡の東側に位置する。

プランは径4.3ｍのほぼ円形を呈する。埋土の状態は、黒色土、黒褐色土の堆積で炭化物が混入する。確認面からの深さは25㎝程で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。しかし、地形が東側の沢へ向って緩く傾斜する為に、東側の壁高は低い。ピットは比較的浅く桂穴ははっきりしない。

炉は、土器埋設部と堀り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器胴部を倒立させて埋設してある。埋設土器と周辺の土はかなり焼けている。堀り込みは楕円形で鍋底状を呈し、焼土、炭化物が入る。また、東側に一段浅く溝状の堀り込みがあり壁に接する。これらは炉の長軸線上にある。

床はほぼ平坦である。

出土遺物

土器（第４図１～３、第16図13～25）

１・３は埋土出土、２は炉埋設土器である。２は深鉢形土器の上、下部を欠く胴部で、ＲＬ単節斜縄文（縦位回転）の施文である。３は平縁口縁の深鉢形土器で底部を欠く。口縁部は無文帯で、胴部には沈線で区画された波状の磨消帯が施される。磨消帯の３つの波の頂部には、沈線で区画され下からの刺突が施され、他の１つの波は大きく頸部まで延びる。地文はＬＲ単節斜縄文（縦位回転）である。他は曲線的な磨消縄文帯の施されるものが主で、列点文を施すものもある。

土製品（第21図１～３）

全て埋土からの出土で、３点とも四角形を呈する。

石器（第22図１～３）

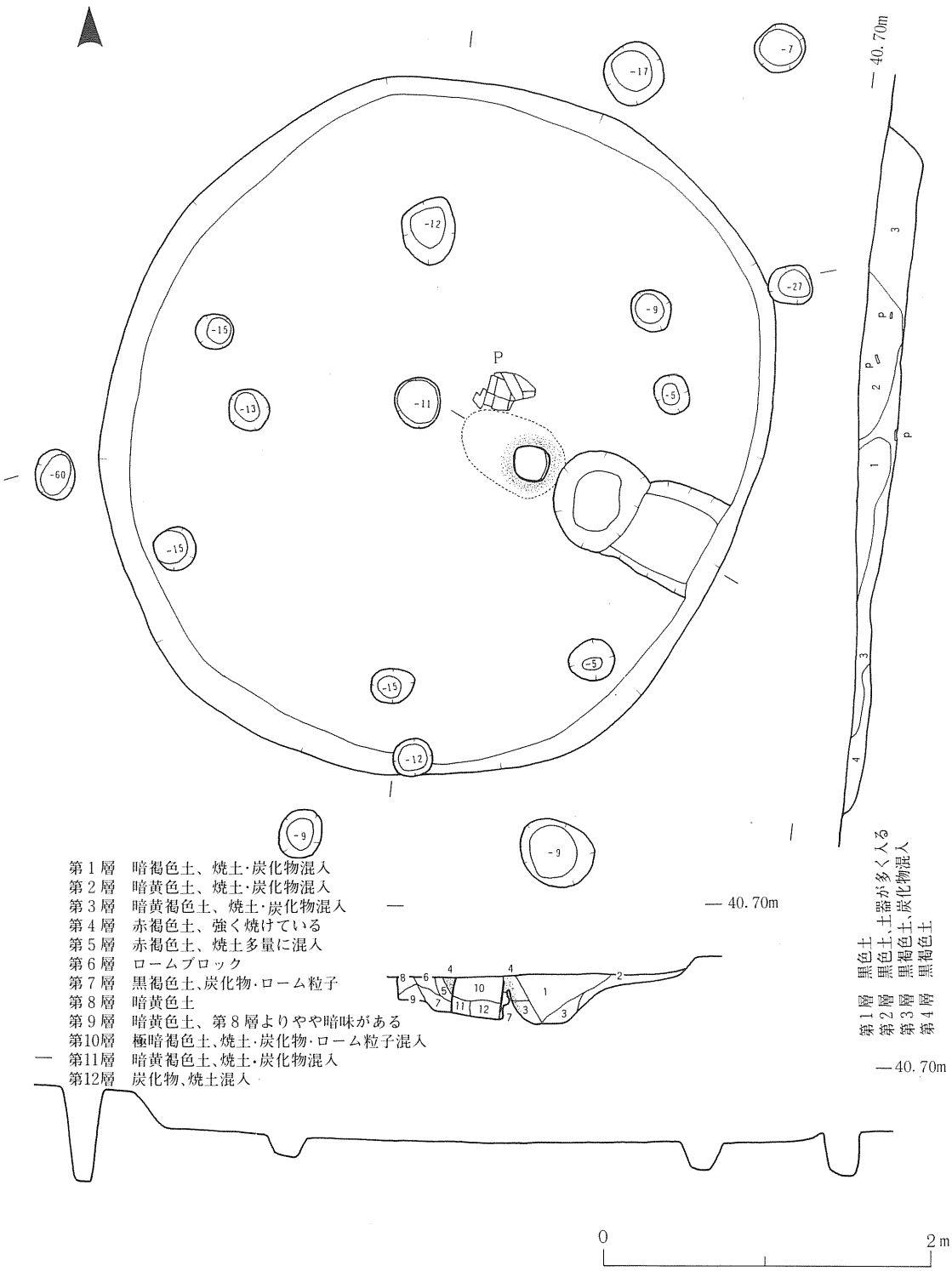
１・２は石鏃、３は打製石斧、他に剝片が数点出土している。

２号住居跡（第５図）

調査区の南側、１号住居跡の西側に位置する。

プランは径３ｍのほぼ円形を呈する。埋土状態は、ブロック状の明褐色土が混入する褐色土である。確認面からの深さは15㎝程で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは浅い堀り方のものが数個検出された。

炉は土器埋設炉であるが、堀り方を立ち割った結果、埋設土器の北側が大きく堀り込まれ、またその北側に一段浅い堀り込みが確認された。しかし、平面及び土層断面では明確に観察できなかっ


40.70m
第1層　黒色土
第2層　黒色土、土器が多く入る
第3層　黒褐色土、炭化物混入
第4層　黒褐色土
第1層　暗褐色土、焼土・炭化物混入
第2層　暗黄色土、焼土・炭化物混入
第3層　暗黄褐色土、焼土・炭化物混入
第4層　赤褐色土、強く焼けている
第5層　赤褐色土、焼土多量に混入
第6層　ロームブロック
第7層　黒褐色土、炭化物・ローム粒子
第8層　暗黄色土
第9層　暗黄色土、第8層よりやや暗味がある
第10層　極暗褐色土、焼土・炭化物・ローム粒子混入
第11層　暗黄褐色土、焼土・炭化物混入
第12層　炭化物、焼土混入
40.70m
0
2m

第3図　1号住居跡

た。埋設土器は深鉢形土器の口縁部及び底部を欠き、南側にやや傾けて埋設してある。中には炭化物が多量に入り、底面には口縁部破片が数点みられた。また、埋設土器及び周辺の土は良く焼けていた。

床面はほぼ平坦である。

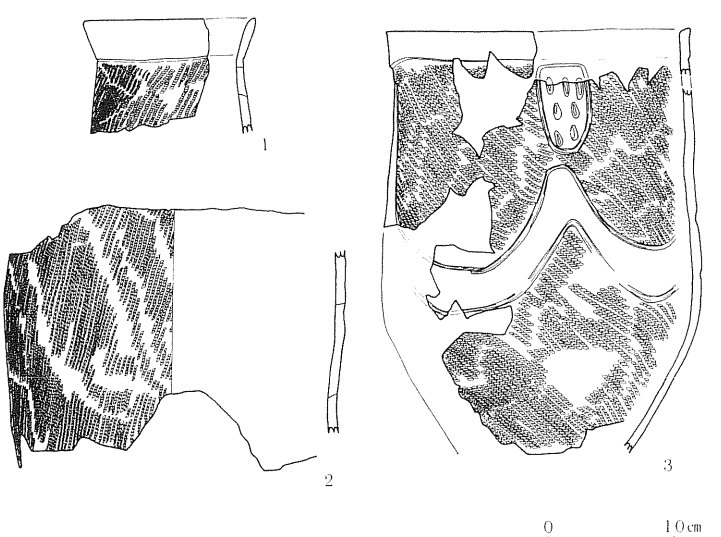
出土遺物

土器（第７図４、第17図26～34）

４は炉埋設土器で、口縁部が外反する深鉢形土器である。口縁部は無文帯で、内面に三日月状の貼り付け文がみられる。胴部は沈線で区画された磨消帯が頸部より垂下し、中程で横走し再び垂下して底部に至る。三単位構成の磨消帯で、中程の接する部分に断面が三角形をなす細長い粘土を貼り付けている。地文はＬＲ単節斜縄文（縦位回転）である。他は山形口縁で曲線的磨消帯を作るものや、口縁部に貼り付け文の施されるものがある。

土製品（第21図４）　埋土出土の三角形土製品である。

石器（第22図４、第27図22）　４は石鏃、他に剝片が数点出土している。

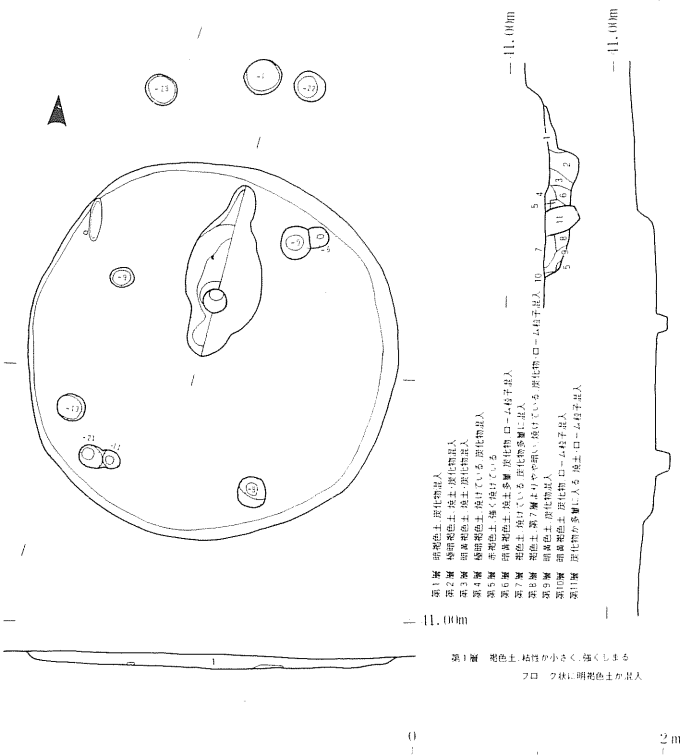


第４図　１号住居跡出土遺物

３号住居跡（第６図）

調査区のほぼ中央東側に位置する。

プランは径3.1ｍの楕円形を呈する。埋土の状態は、黒色土、黒褐色土の堆積である。確認面からの深さは20cm程で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは浅く柱穴ははっきりしない。



第５図　２号住居跡

炉は、土器埋設部と堀り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器の上部及び底部を欠いて埋設し、土器と周辺の土は良く焼けている。また炉は作り替えており、埋設土器の南側に古い埋設土器と考えられる破片がみられ、周辺の土が焼けた痕跡を確認した。堀り込みは楕円形で鍋底状を呈し、埋土には焼土、炭化物及び土器片が数点入っていた。この堀り込みの北側に一段浅い溝状の堀り込みがあり壁に接する。

床面はほぼ平坦である。

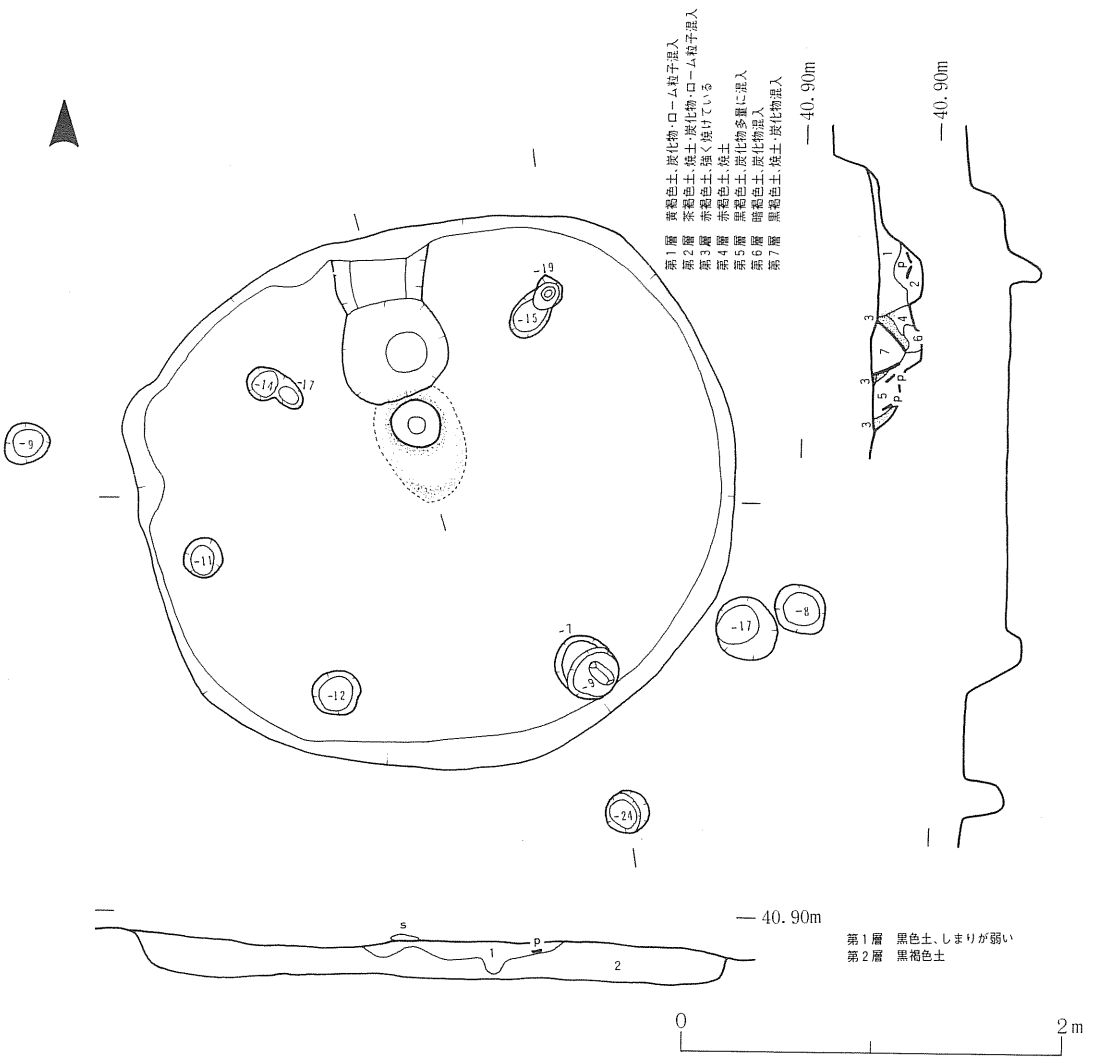
出土遺物

土器（第７図５・６、第18図35～38）

５は炉埋設土器、６は炉堀り込みからの出土である。５は胴上部及び底部を欠く深鉢形土器である。沈線で区画した曲線的な磨消帯が施される。地文はＲＬ単節斜縄文（縦位回転）である。６は平縁口縁の深鉢形土器である。口縁部は無文帯で、地文はＬＲ単節斜縄文（縦位回転）である。他は口縁部無文帯や胴部に曲線的な磨消帯を作るもの、地文に撚糸文を施すものである。

石器

埋土から剝片が２点出土している。



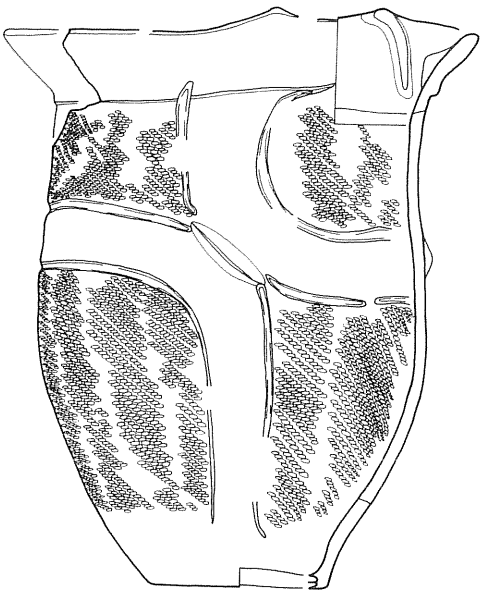
第6図　3号住居跡

4号住居跡（第8図）

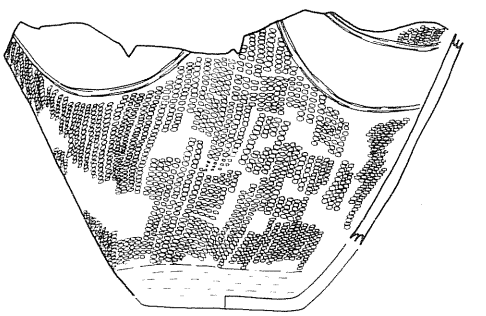
調査区のほぼ中央部で検出し、遺跡範囲確認調査トレンチで一部確認されていた住居跡である。

プランは長軸6.5m、短軸5.3mの楕円形を呈する。埋土の状態は、黒色土、赤褐色土（焼土）、褐色土・明褐色土が主に堆積する。確認面からの深さは45cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは深い堀り方のもの6個と浅い堀り方のもの数個が検出された。柱穴は深い堀り方の4個または5個と考えられる。

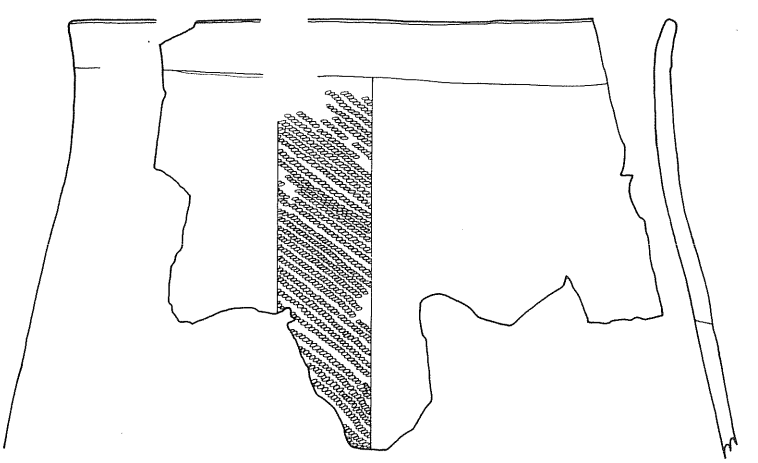
炉は、住居跡中央部に土器埋設炉と、中央部南東側に土器埋設部と堀り込みを検出した。これらは、一直線上には並ばない。中央部の土器埋設炉の土器は、口唇部と底部を欠いた深鉢形土器である。埋設土器及び周辺の土がかなり焼け、土器の中に礫が一個入っていた。南東側の土器埋設部の土器は、深鉢形土器の胴部のみで、北側にやや傾けて埋設してある。埋設土器及び周辺の土はかな



4



5



6

4　2号住居跡
5·6　3号住居跡

0　10cm

第7図　2・3号住居跡出土遺物

り焼け、中には炭化物が多量に入っていた。また、炉は作り替えられており、埋設土器の北側に堀り方とかなり焼けた痕跡を確認した。堀り込みは楕円形で鍋底状を呈し、埋土下部には焼土が多量に、また深鉢形土器の底部と礫が入っていた。

床面はほぼ平坦である。

出土遺物

土器（第９図７～10、第17図39～49、第18図50～72）

７は住居跡中央部の炉埋設土器、10は南東側の炉埋設土器、９は堀り込み、８は埋土からの出土である。７は口唇部と底部を欠く深鉢形土器である。口縁部に撚糸圧痕文を並行及び>状に施し、頸部には単軸絡条体圧痕文が施される。また８字状に粘土を貼り付け、胴部地文と同一の縄文が施される。胴部はＬＲ単節斜縄文（縦位回転）で、内面はヘラ状工具により良く研磨されている。８は口縁部がすぼむ器形で、無文帯が広く沈線が巡る。地文はＲＬ単節斜縄文（縦位回転）である。９は撚糸文の施される深鉢形土器である。９は平縁口縁で胴部に膨りがあり、胴下部を欠く深鉢形土器である。口縁部は無文帯で、胴部は沈線により区画されたＪ字状及び波状の磨消帯が連絡している。磨消帯は周辺より盛り上がり、棒またはヘラ状工具で良く研磨されている。五単位構成で、頸部と胴部には沈線で区画された中に刺突が施される。地文はＬＲ単節斜縄文（縦位回転）である。他は曲線的な磨消帯及び口縁部無文帯のものや、半截竹管状工具内面による半隆起線文を施すもの、撚糸文を施すものなどが出土している。

石器（第22図５～９）

５・６が石匙、７が槍先状石器、８がヘラ状石器、９が磨製石斧で、他に剥片が多数出土している。

５号住居跡（第10図）

調査区北側で検出した。２号土坑及び３号土坑と重複し、２号土坑に切られているが、３号土坑との関係は不明である。

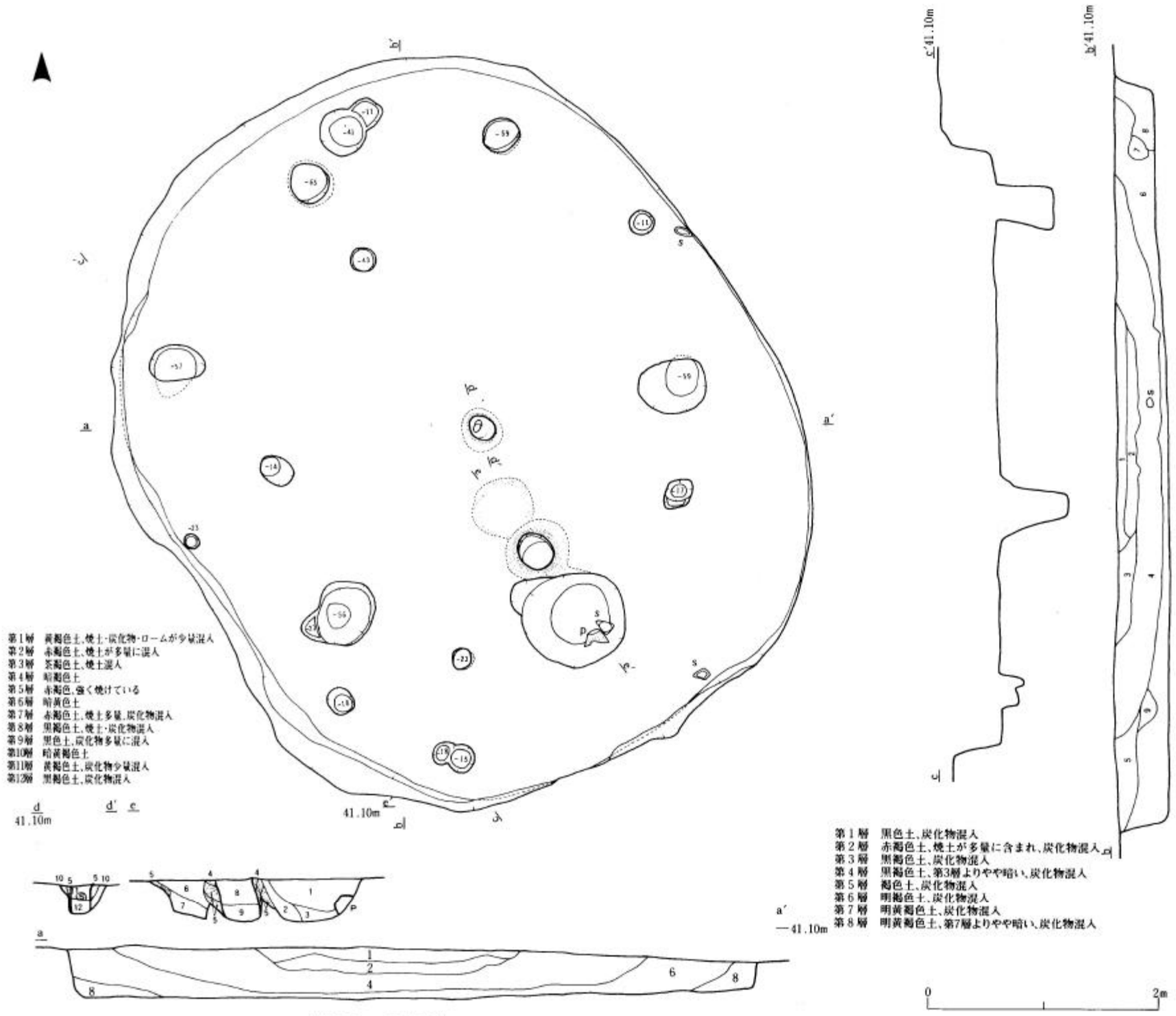
プランは推定長軸5.0ｍ、短軸3.5ｍの長楕円形を呈する。東側に浅い溝状の堀り込みが検出された。埋土の状態は、ロームブロックの混入する暗褐色土、暗黄色土が主に堆積する。確認面からの深さは10cm程で、壁はゆるく立ち上がり、確認できなかった部分もある。ピットは不規則な状態で検出された。炉は地床炉で、南側に構築されている。

床はほぼ平坦である。

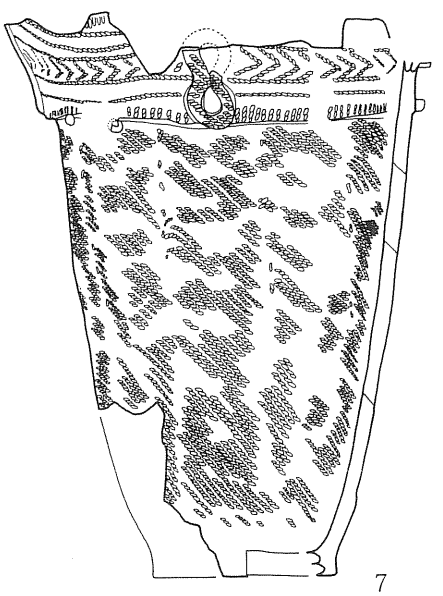
出土遺物

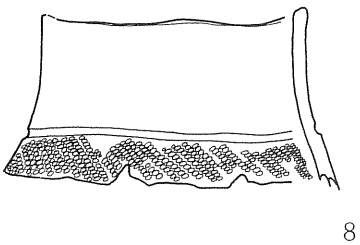
土器（第12図11、第18図73～75、第19図76～99）

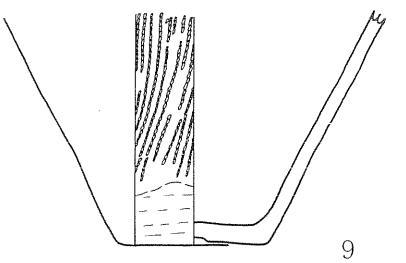
11は埋土出土である。頸部が外反して口縁部が内湾し、胴部がやや膨らむ鉢形土器である。山形

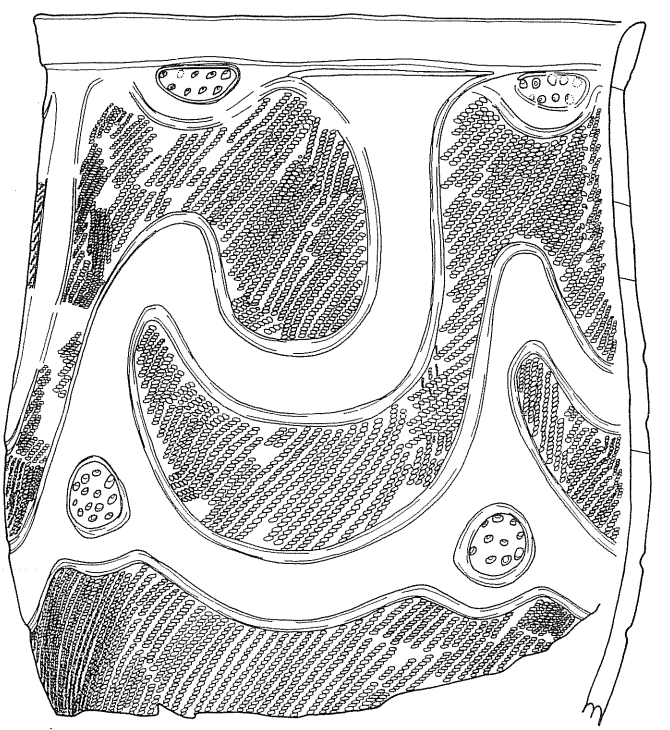

第1層　黄褐色土、焼土・炭化物・ロームが少量混入
第2層　赤褐色土、焼土が多量に混入
第3層　茶褐色土、焼土混入
第4層　暗褐色土
第5層　赤褐色、強く焼けている
第6層　暗黄色土
第7層　赤褐色土、焼土多量、炭化物混入
第8層　黒褐色土、焼土・炭化物混入
第9層　黒色土、炭化物多量に混入
第10層　暗黄褐色土
第11層　黄褐色土、炭化物少量混入
第12層　黒褐色土、炭化物混入
41.10m
第1層　黒色土、炭化物混入
第2層　赤褐色土、焼土が多量に含まれ、炭化物混入
第3層　黒褐色土、炭化物混入
第4層　黒褐色土、第3層よりやや暗い、炭化物混入
第5層　褐色土、炭化物混入
第6層　明褐色土、炭化物混入
第7層　明黄褐色土、炭化物混入
第8層　明黄褐色土、第7層よりやや暗い、炭化物混入
0
2m

第8図　4号住居跡









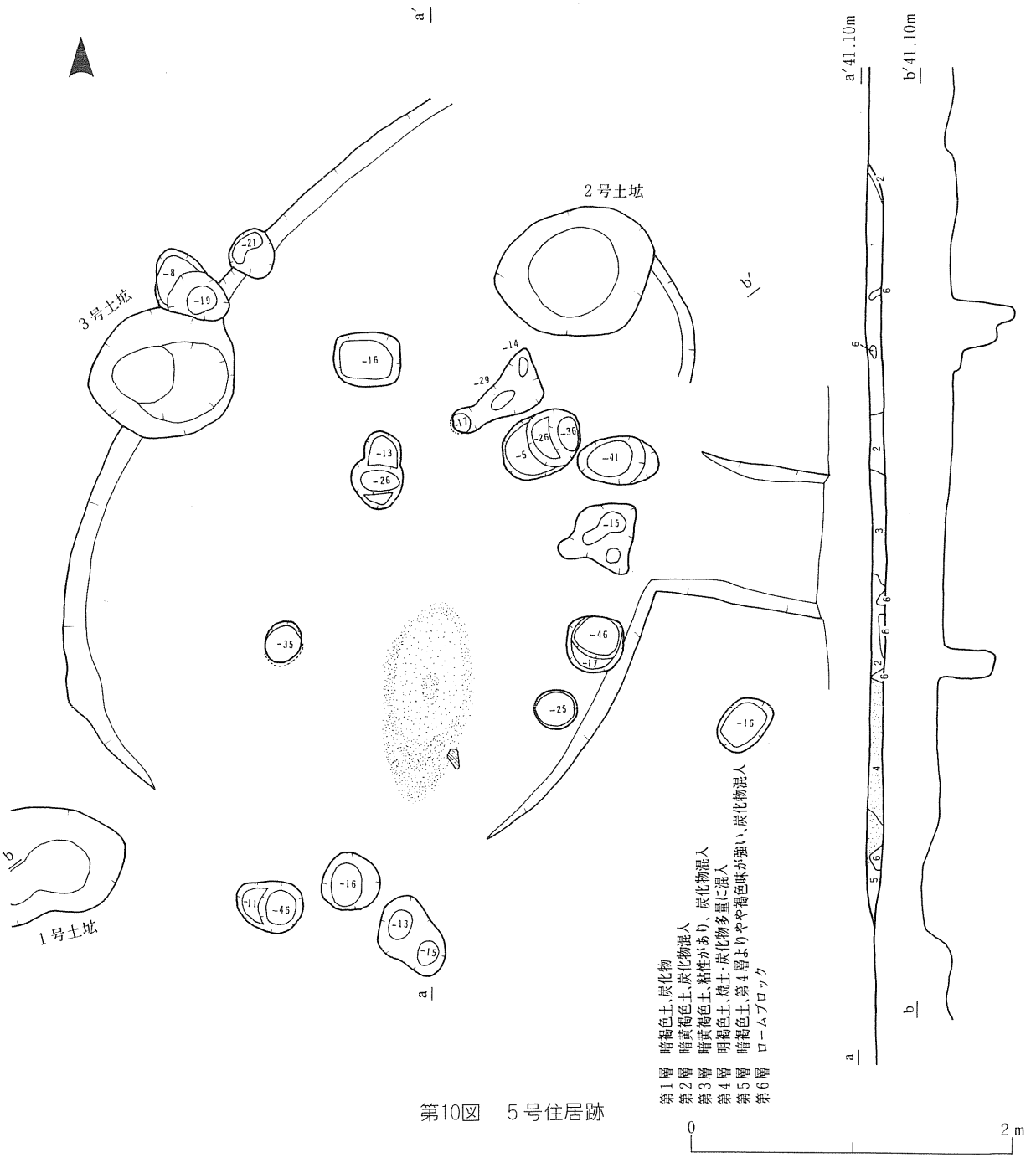
0　10cm

第９図　４号住居跡出土遺物

口縁で、頂部より隆帯が垂下し強く押し付けた撚糸圧痕文が施される。口唇部にも刻目状に施文される。地文はＬＲ単節斜縄文（縦位回転）で、全体に磨滅が著しい。他は半截竹管状工具内面による半隆起線文、口縁部文様帯に粘土紐を貼り付けて撚糸圧痕文を施すものが出土している。

土製品（第21図５）　埋土出土で獣面を表わす。

石器（第22図10～15）　10～12は石鏃、13は掻器、14は槍先状石器、15は異形石器である。



第10図　５号住居跡

6号住居跡（第11図）

調査区南側、4号土坑の南側に位置する。

プランは径3.0mの楕円形を呈する。埋土の状態は、ローム粒子の混入する暗褐色土、黄褐色土が主に堆積する。確認面からの深さは15cm程で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは壁際に4カ所検出され、主柱穴と考えられる。

炉は、土器埋設部と堀り込みからなる。土器埋設部の土器は、深鉢形土器の胴部を利用し倒立させ西側にやや傾けて埋設してある。埋設土器及び周辺の土はかなり焼けている。堀り込みは楕円形で鍋底状を呈する。坑口部に3個の礫が据えられていた。また、炉の周辺や埋土から礫が出土している。

床面はほぼ平坦である。

出土遺物

土器（第12図12、第20図100～102）

12は炉埋設土器で、深鉢形土器の胴部である。沈線で区画された横S字状またはJ字状の磨消帯が施される。磨消帯は周辺より盛り上がり、ヘラ状工具で良く研磨されている。地文はLR単節縄文（縦位回転）である。他は曲線的な磨消縄文帯を施すものである。

石器（第24図22）　22は床面出土の磨石で、両面が磨滅している。

土　坑

1号土坑（第13図）

調査区北側で、5号住居跡の南西側に位置する、深さ20cmで楕円形を呈する。出土遺物はない。

2号土坑（第13図）

調査区北側で、5号住居跡を切っている。長軸1m、短軸0.8m、深さ40cmで楕円形を呈する。埋土上部に扁平な石が確認され、暗褐色土、黄褐色土、黒褐色土が堆積している。石器と多量の剝片・砕片が出土し、石器製作後、一括投棄されたものと考えられる。

出土遺物

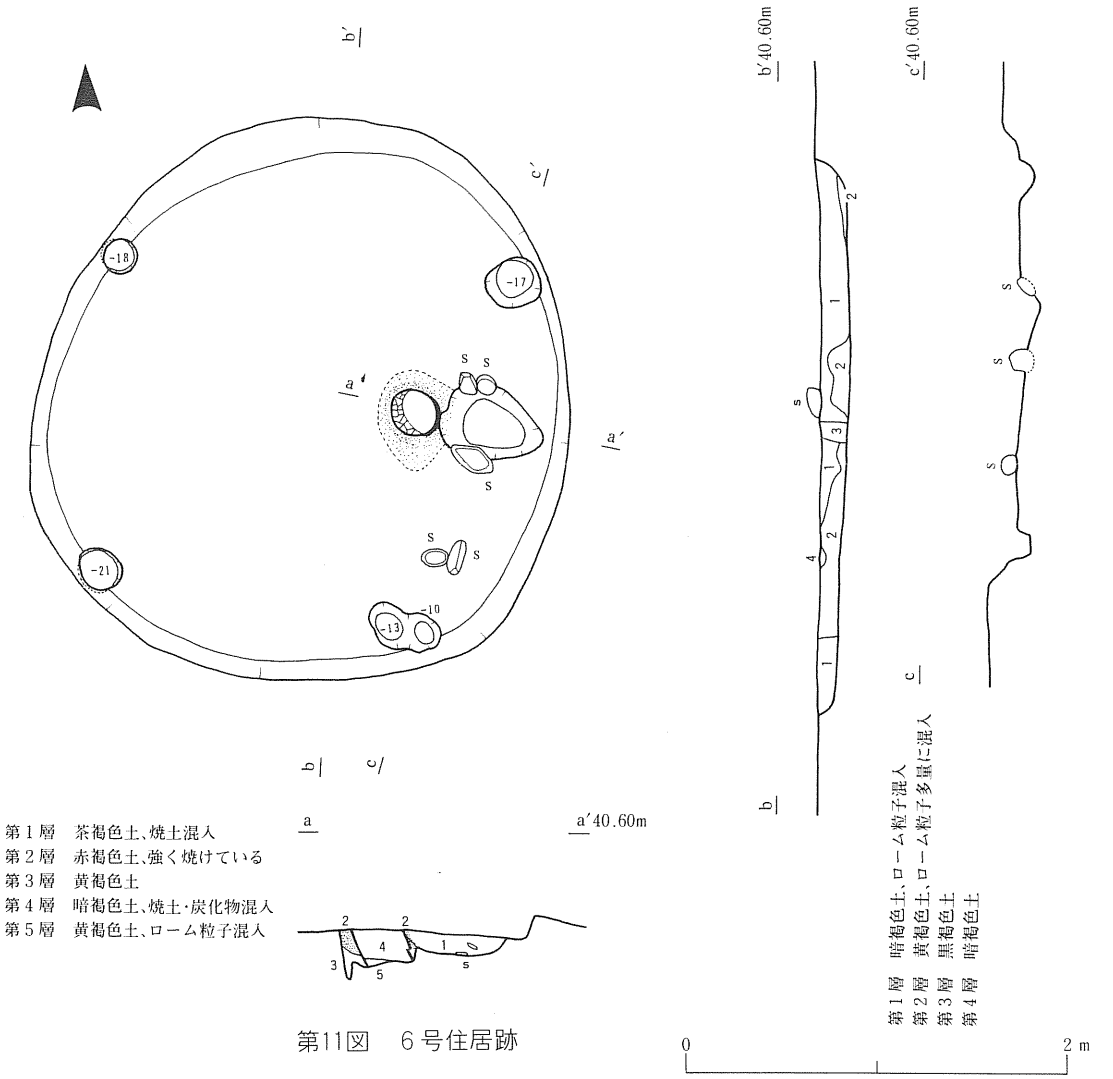
石器（第23図16～21）　16～20は石鏃、21は石錐である。

3号土坑（第13図）

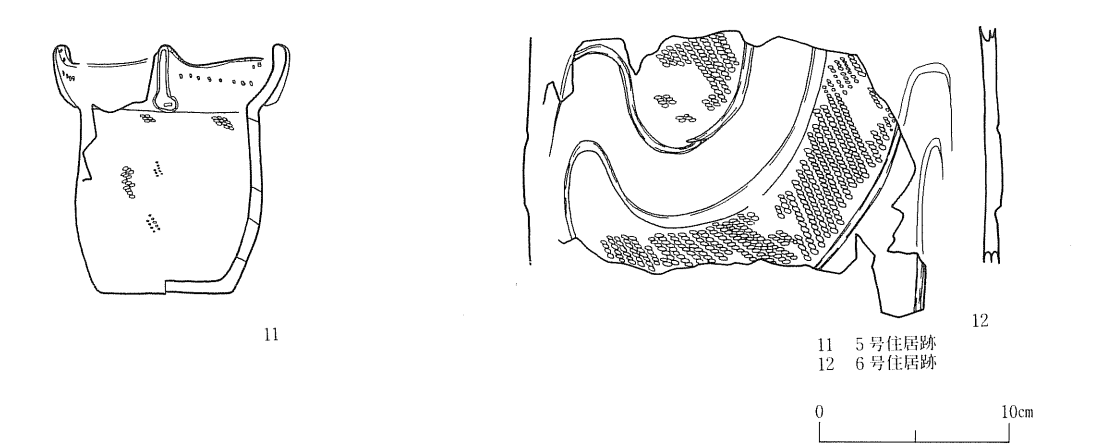
調査区北側で、5号住居跡の西壁に重複して検出されたが、新旧関係については不明である。径80cm、深さ20cmで楕円形を呈する。出土遺物はない。

4号土坑（第13図）

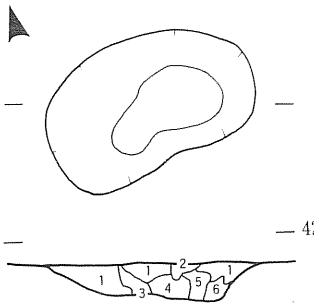
調査区中央部で検出された袋状の土坑である。坑口部径2.2m・坑底部径2.7m・深さ1.6mでほぼ円形を呈し、礫層を堀り込んでいる。埋土下部には崩落土が多量に堆積しており、坑口部及び頸部が狭くなる。いわゆるフラスコ状をなしていたと推定される。西側は風倒木により攪乱を受けている。底面はほぼ平坦である。



第11図　6号住居跡

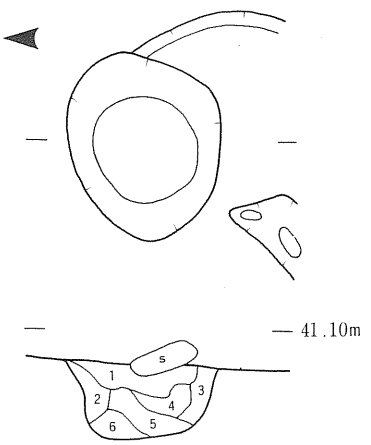


第12図　5・6号住居跡出土遺物



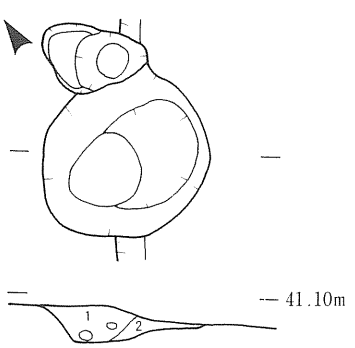
1号土坑

第1層　暗褐色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、第1層より黄色味がある、炭化物混入
第3層　暗褐色土、炭化物混入
第4層　暗褐色土、やや粘性がある、炭化物混入
第5層　暗褐色土、やや硬い、炭化物混入
第6層　暗褐色土、炭化物混入



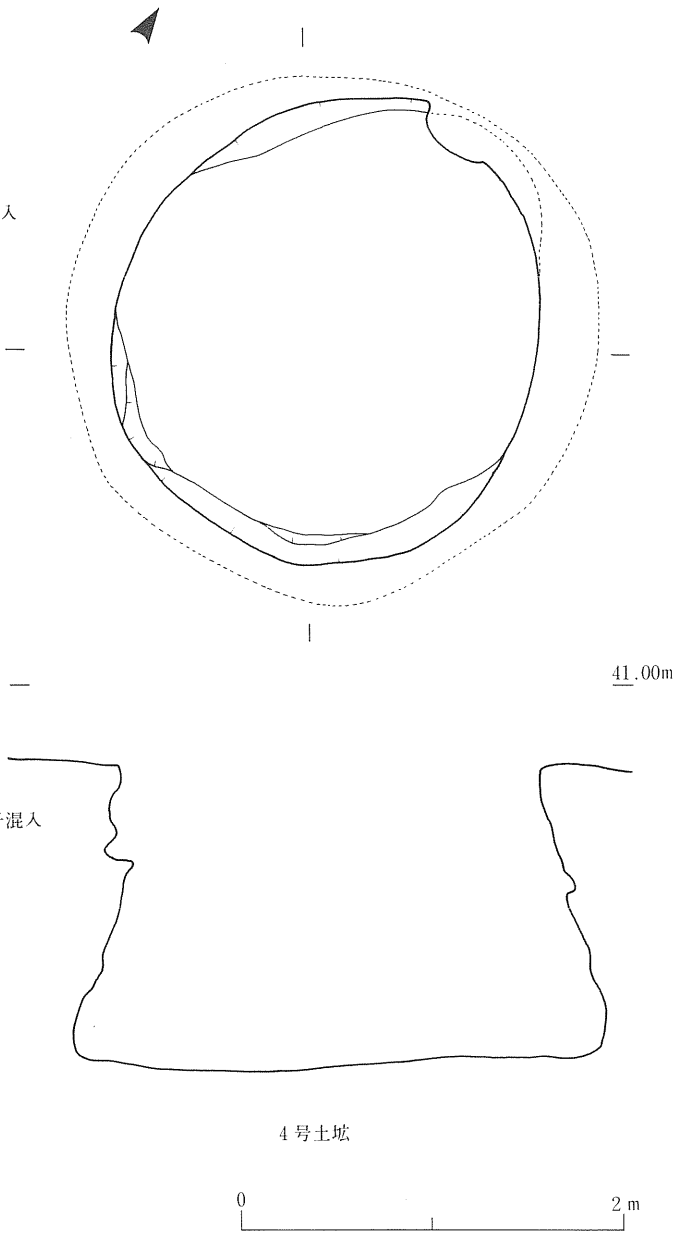
2号土坑

第1層　暗褐色土、硬くしまる、炭化物、ローム粒子混入
第2層　黄褐色土、ロームブロック混入
第3層　暗黄褐色土、炭化物混入
第4層　暗褐色土、ボソボソ、炭化物混入
第5層　黒褐色土、ボソボソ、炭化物混入
第6層　暗褐色土、ボソボソ、炭化物混入



3号土坑

第1層　黒褐色土、しまっている、ロームブロック混入
第2層　暗褐色土、ボソボソ



4号土坑

第13図　土坑

出土遺物

土器（20図103～110）

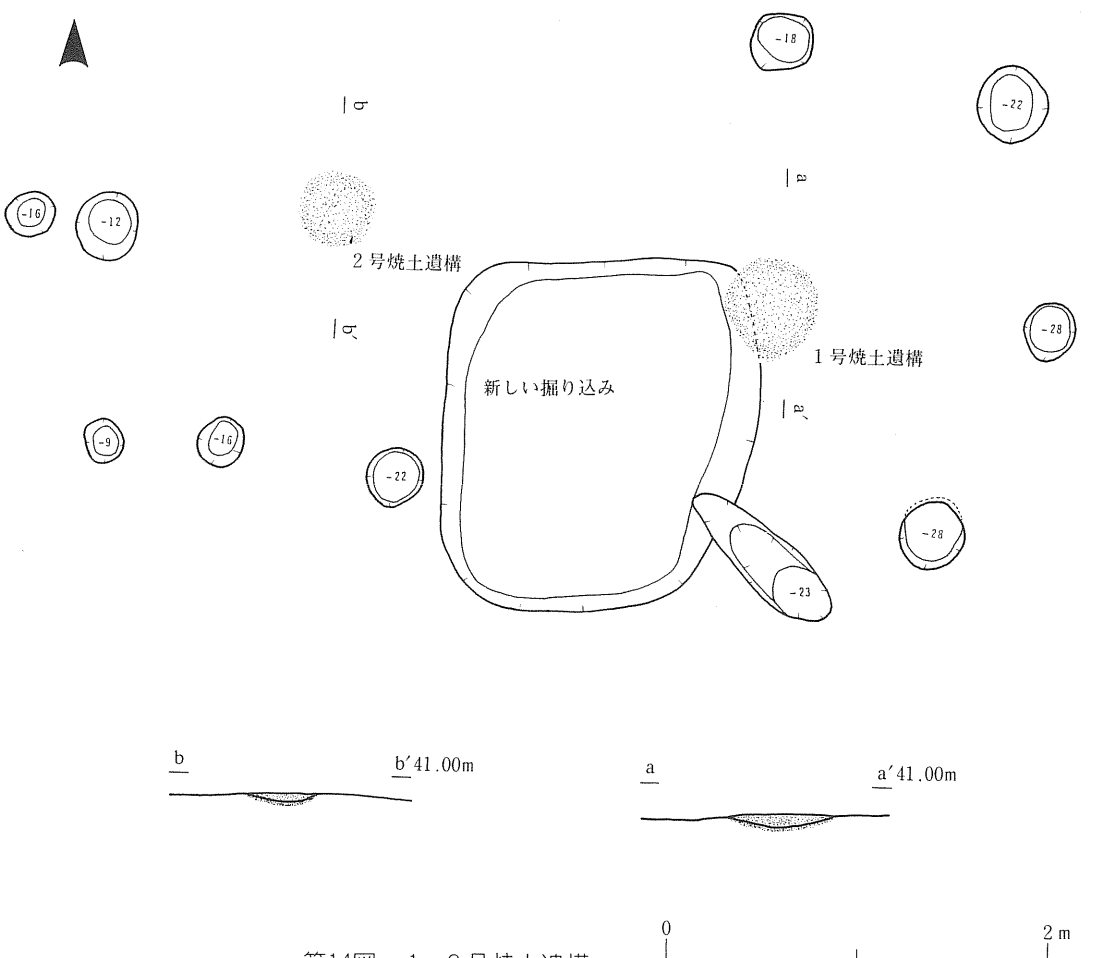
口縁部無文帯や、撚糸文、櫛目文の施されるものが出土している。

焼土遺構（第14図）

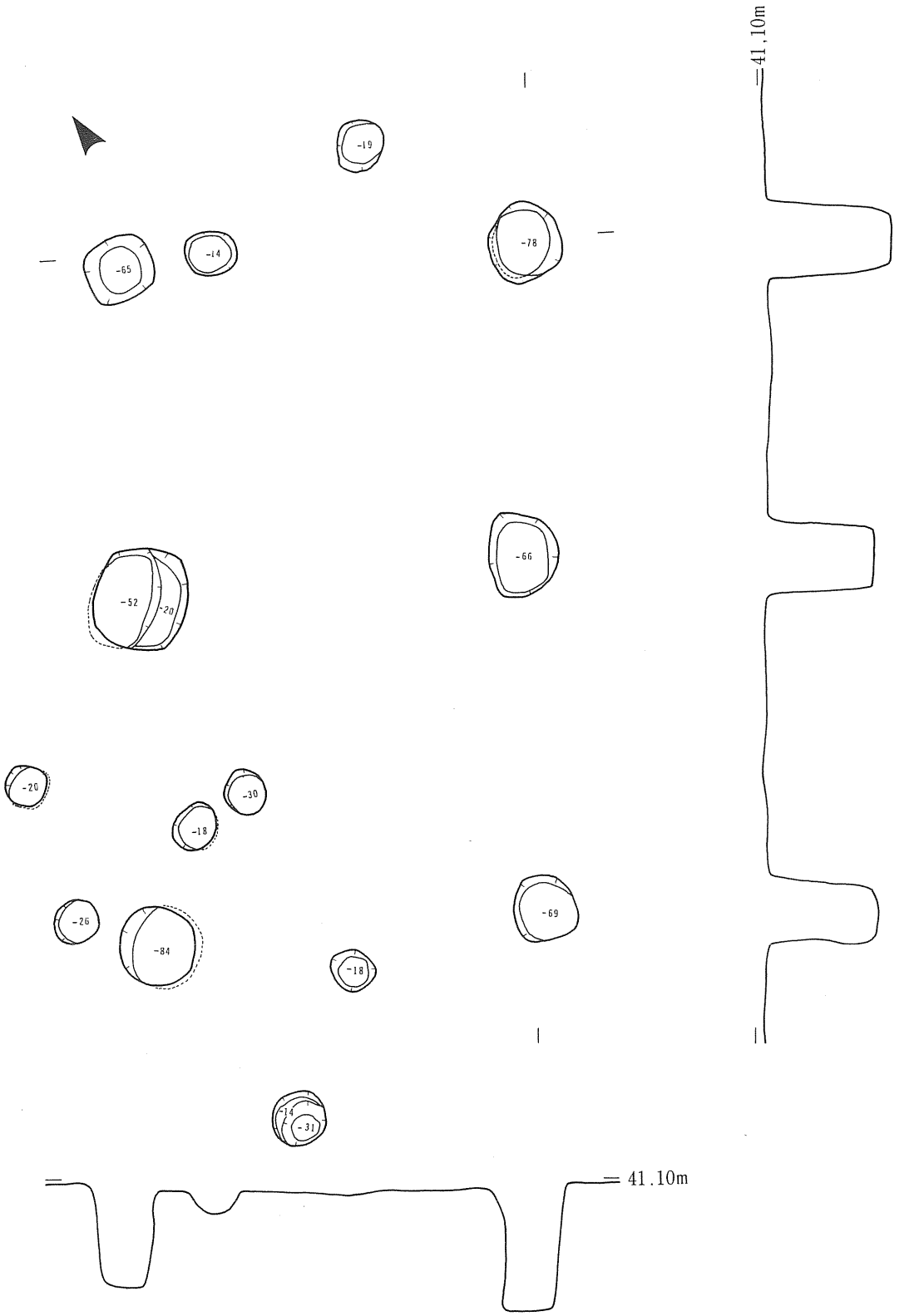
１・２号焼土遺構が調査区南側、３号焼土遺構が北側、４号焼土遺構が中央部で検出された。１・２・４号焼土遺構はローム面で確認され、良く焼け、周辺からは数個のピットが検出され、１号焼土遺構の焼土中より縄文土器片が数点出土した。３号焼土遺構は第２層中程で検出され、良く焼けている。周辺に深鉢形土器（口縁部欠損）が二カ所に埋設されていた。

その他の遺構（第15図）

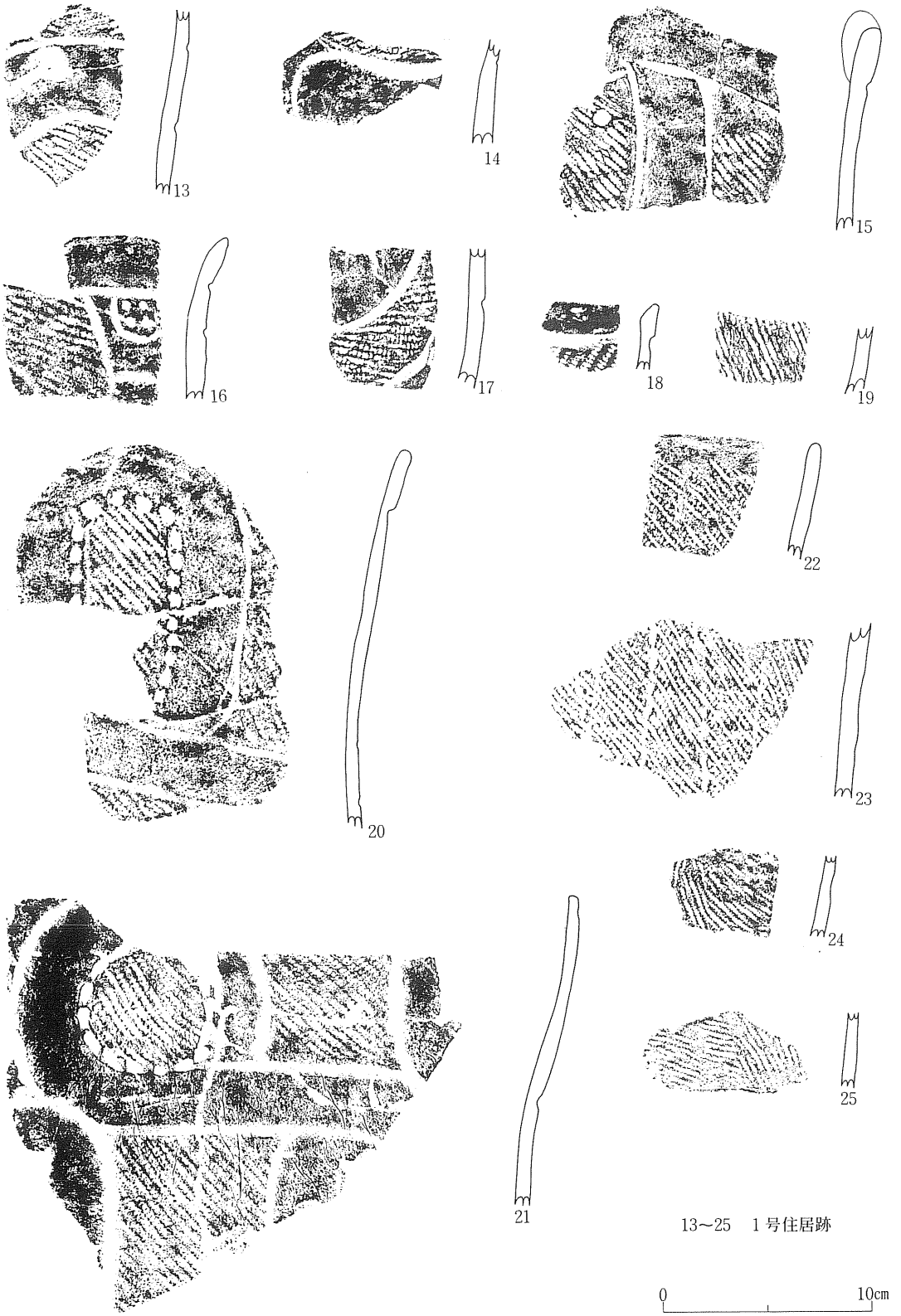
調査区の北側で検出した。径40cm～50cm・深さ70cm～80cmを測り、しっかりした建物が想定される。ローム面での確認であるが、ローム層の堀り込みや炉跡が認められず、居住施設としてではなく他の性格を有する施設としての使用が考えられる。なお、柱穴から縄文土器片２点と石皿状石器（第24図23）が出土している。



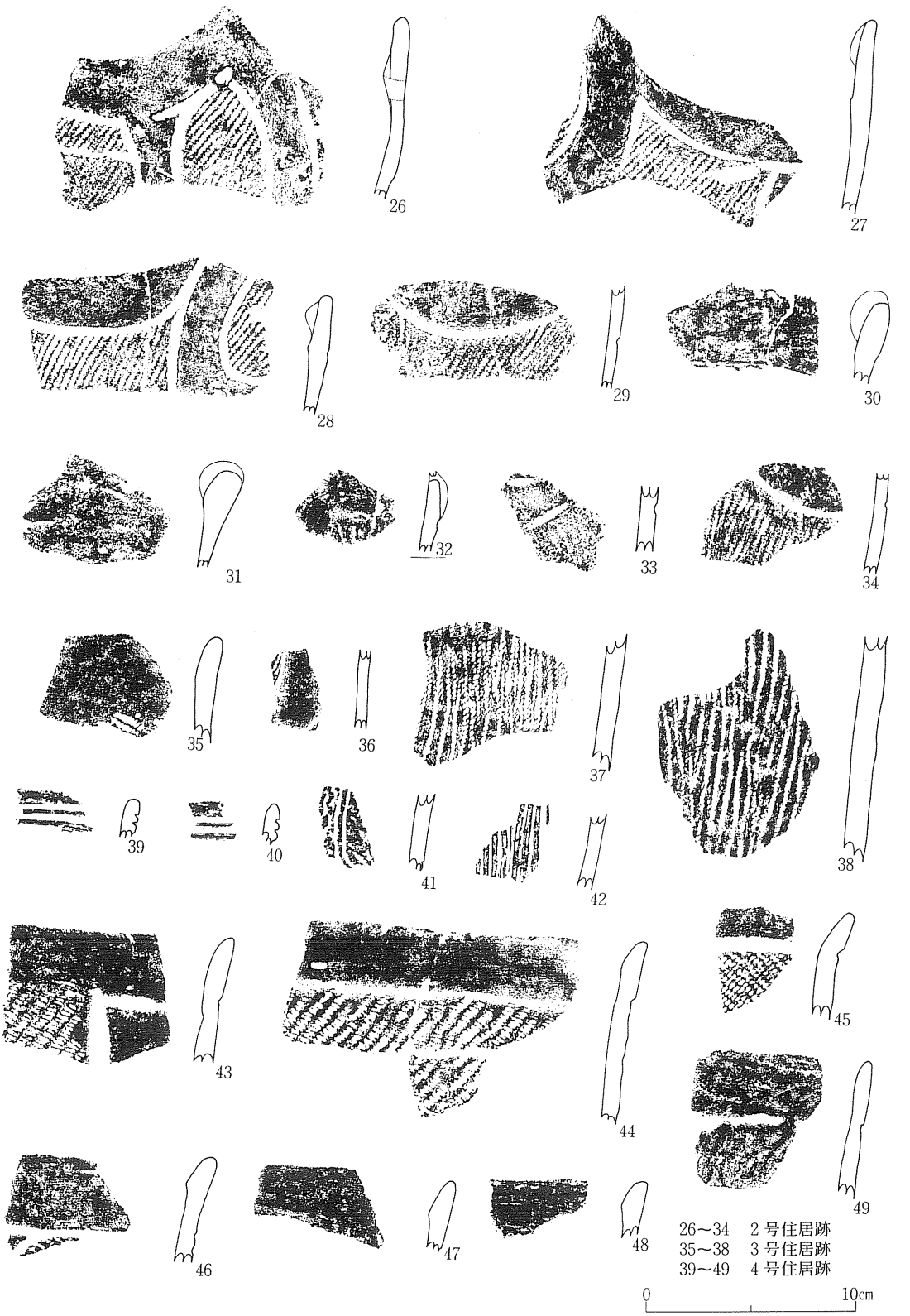
第14図　１・２号焼土遺構



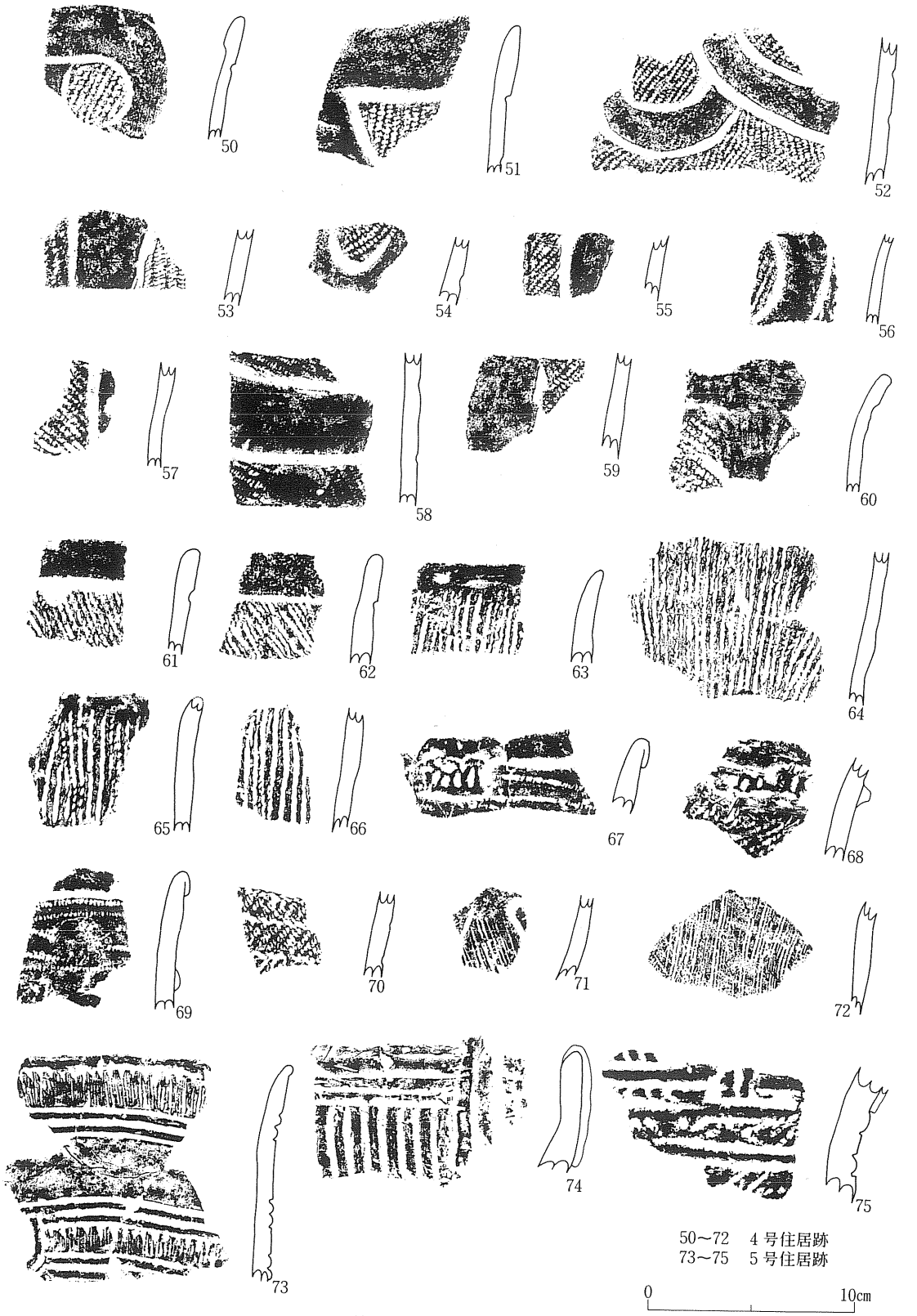
第15図　その他の遺構　0　2 m



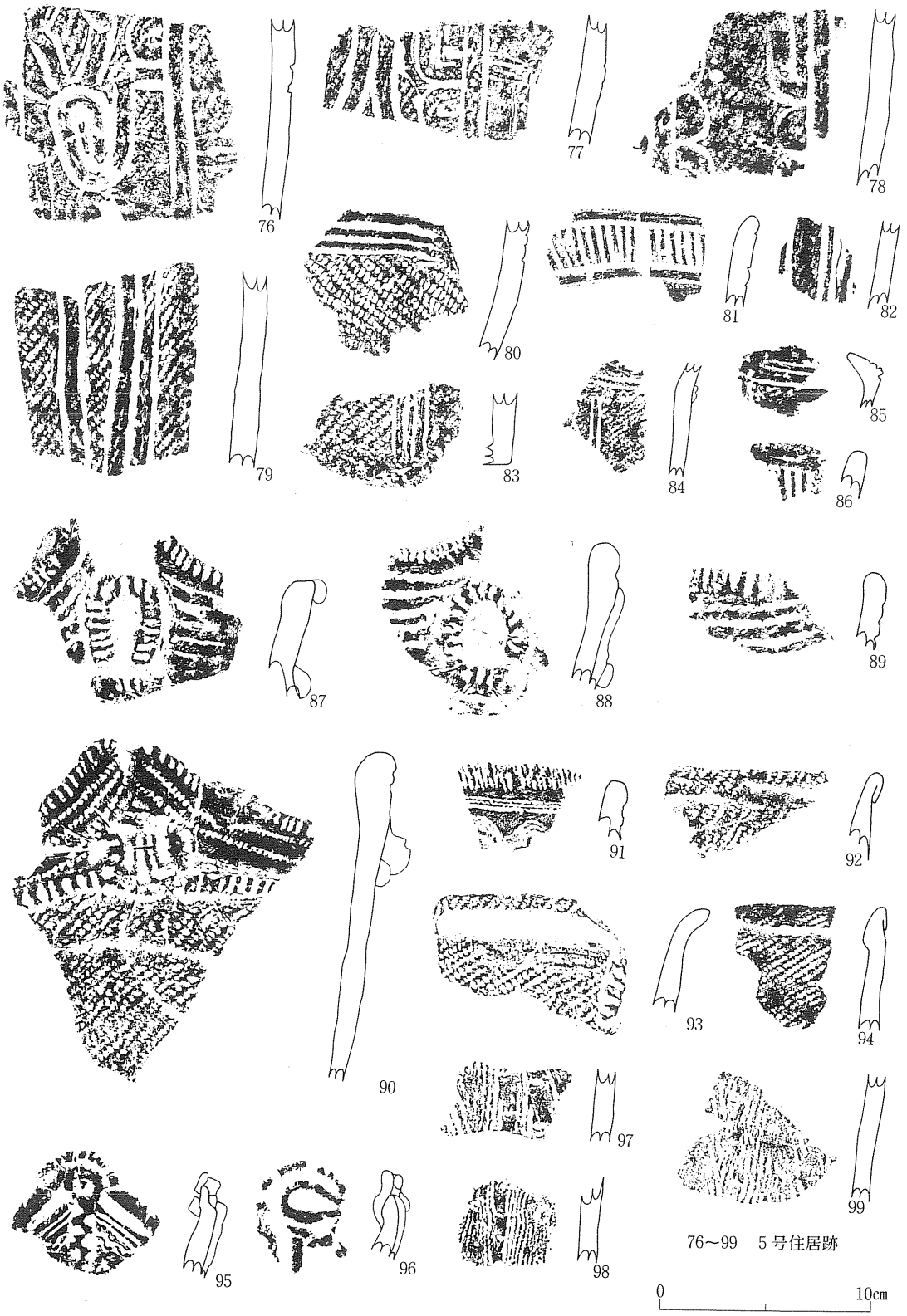
第16図　遺構内出土土器



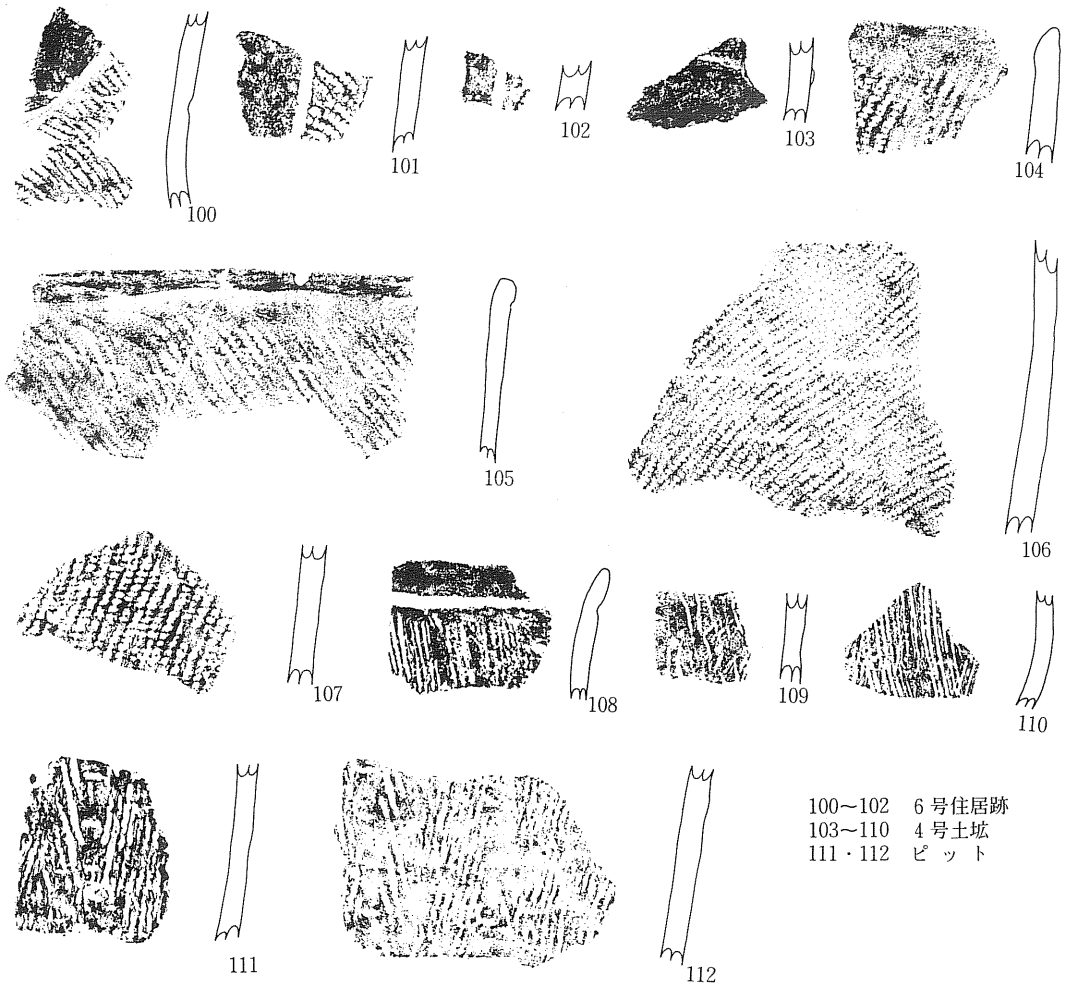
第17図　遺構内出土土器



第18図　遺構内出土土器



第19図　遺構内出土土器



第20図　遺跡内出土土器

土製品（第24図）

全て住居跡からの出土である。1～3は四角形、4は三角形を呈する。1～3は刻線と刺突、2は刺突列点文、4は凸状をなし刻線と刺突で文様を施している。1～3には砂の混入が多い。5は獣面を表現したものと考えられ、縄文を施した後に半截竹管状工具内面により文様を施す。鼻は欠けており4～5つ刺突を行っている。顔部のみの表現で体部がないことから、土器の把手と推測される。

石　器

石鏃（第22図1・2・4・10～12、第23図16～20、第25図24～26）

有茎、無茎のものがある。2はアスファルト状の付着物が認められる。1・10は黒曜石製、他は硬質頁岩製である。

石匙（第22図5・6、第25図27・28）

ツマミ部に対して刃部が平行する縦形の石匙である。29以外は片面加工で、全て硬質頁岩製である。

石錐（第23図21）

錐部が短いが、鋭く尖っている。黒曜石製である。

槍先状石器（第22図７・14、第25図29～31）

両面加工で先端が尖るものである。30は両端が鋭く尖るもので作りが良い。全て硬質頁岩製である。

ヘラ状石器（第25図34～37）

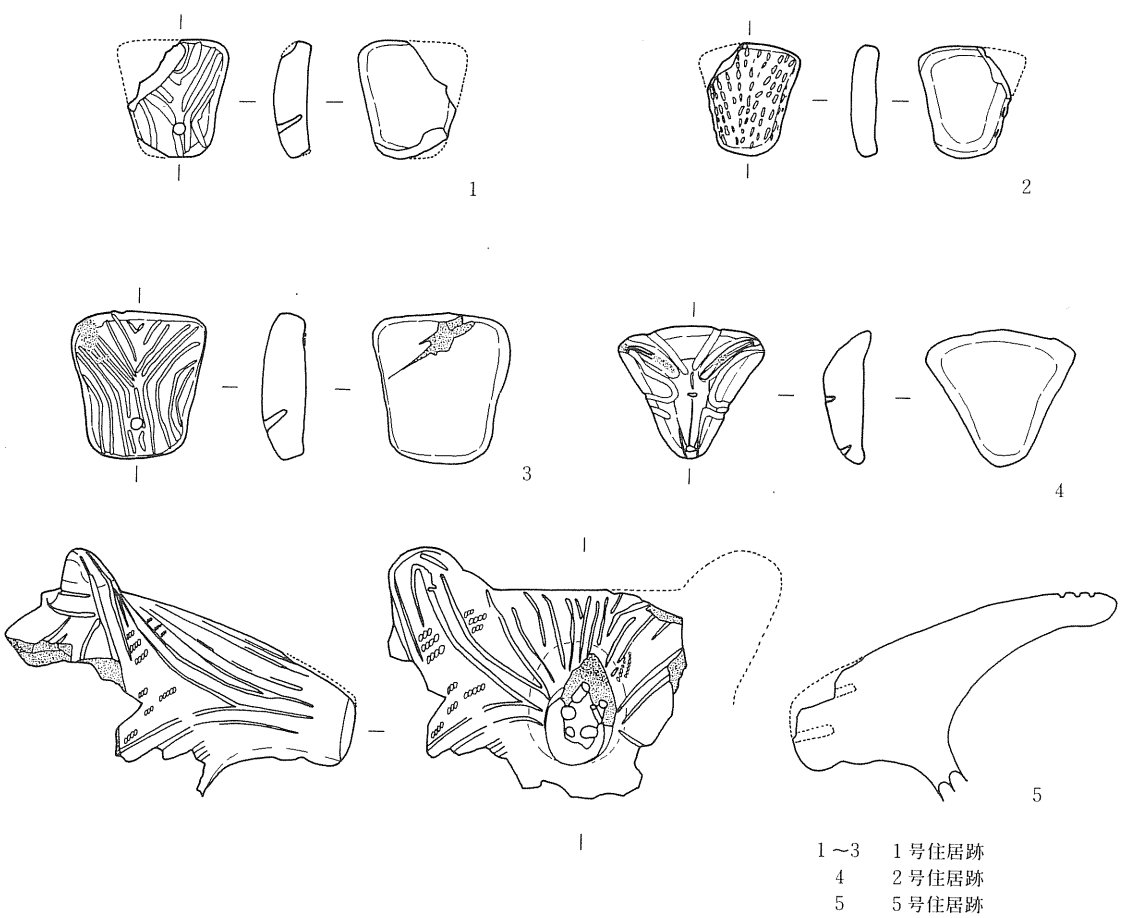
両面加工で刃部を作る。全て硬質頁岩製である。

掻器（第22図13）

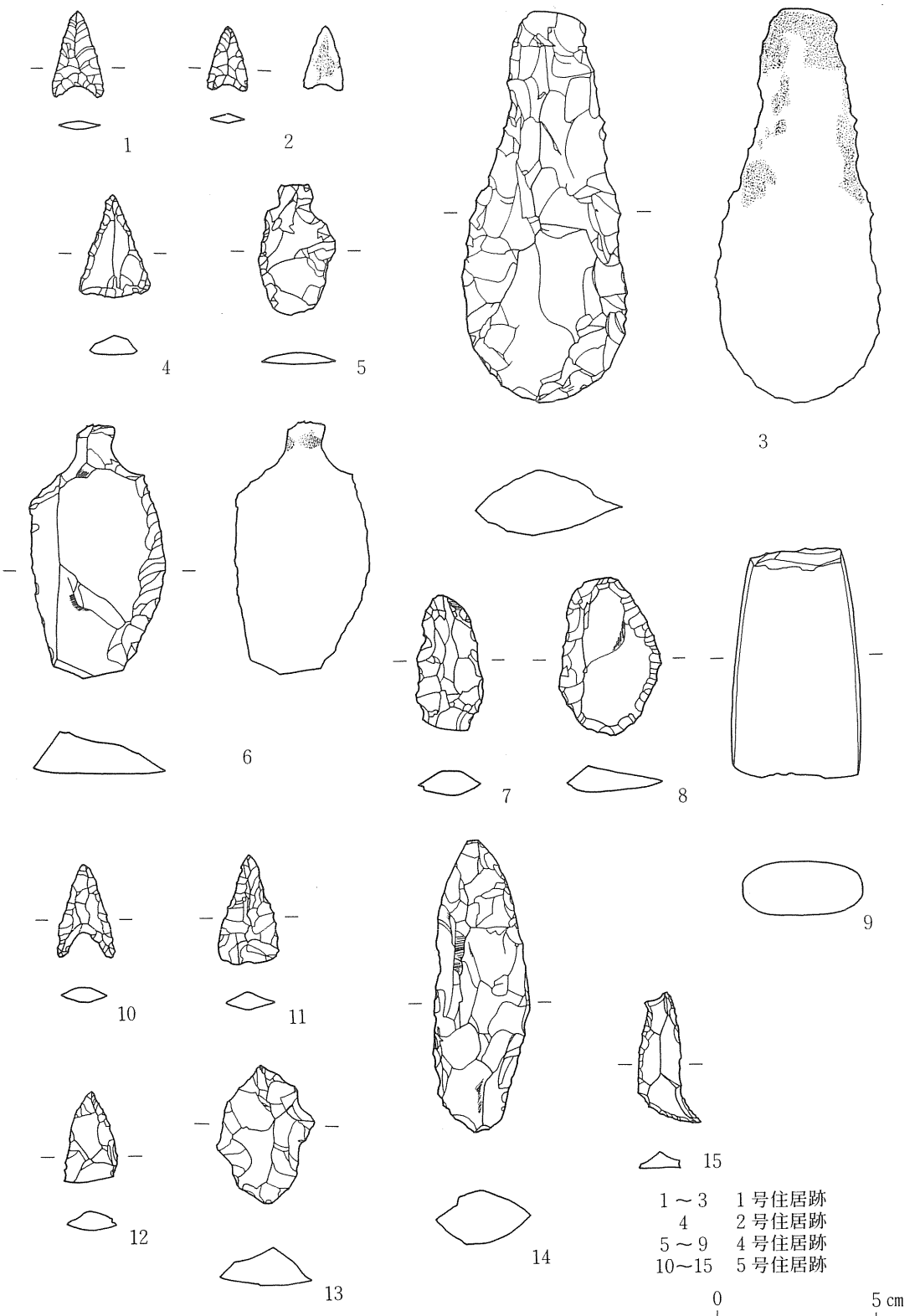
片面加工で、硬質頁岩製である。

打製石斧（第22図３）

両面加工である。柄を装着したと考えられる部分にアスファルト状の付着物が認められる。硬質岩製である。



第21図　遺構内出土土製品



第23図　遺構内出土石器

異形石器（第22図15）

片面加工で釣針形をなす。硬質頁岩製である。

磨製石斧（第22図９）

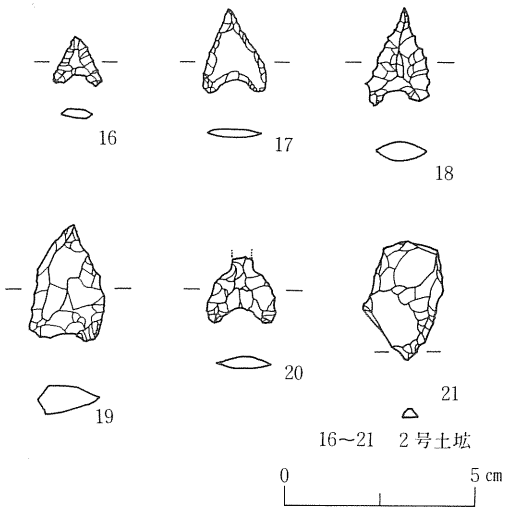
基部及び刃部の一部が欠けている。粘板岩製である。

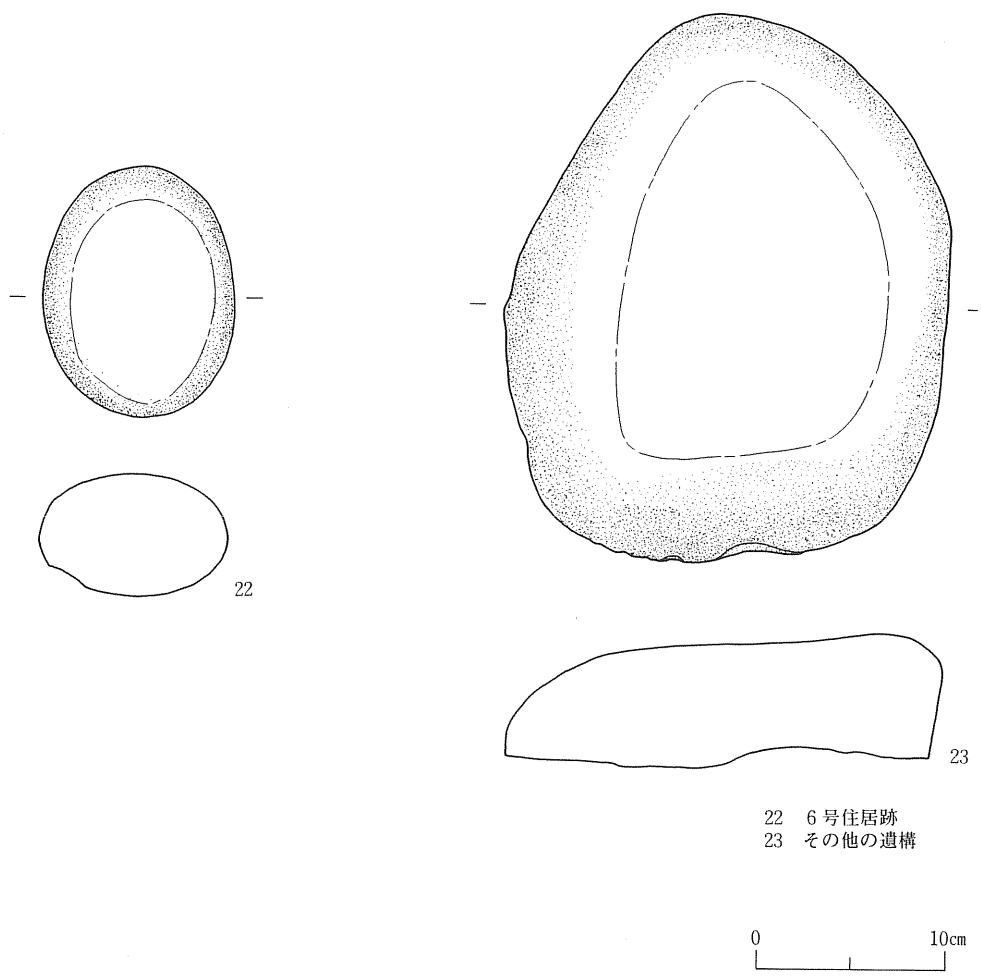
凹石（第26図39・40）

両面に２～３個の凹部をもつものである。40は凝灰岩製。41は閃緑岩製で、磨石・敲石としての使用痕も認められる。

磨石（第24図22）

安山岩製で、磨滅が著しい。





第24図　遺構内出土石器

石皿（第26図41）

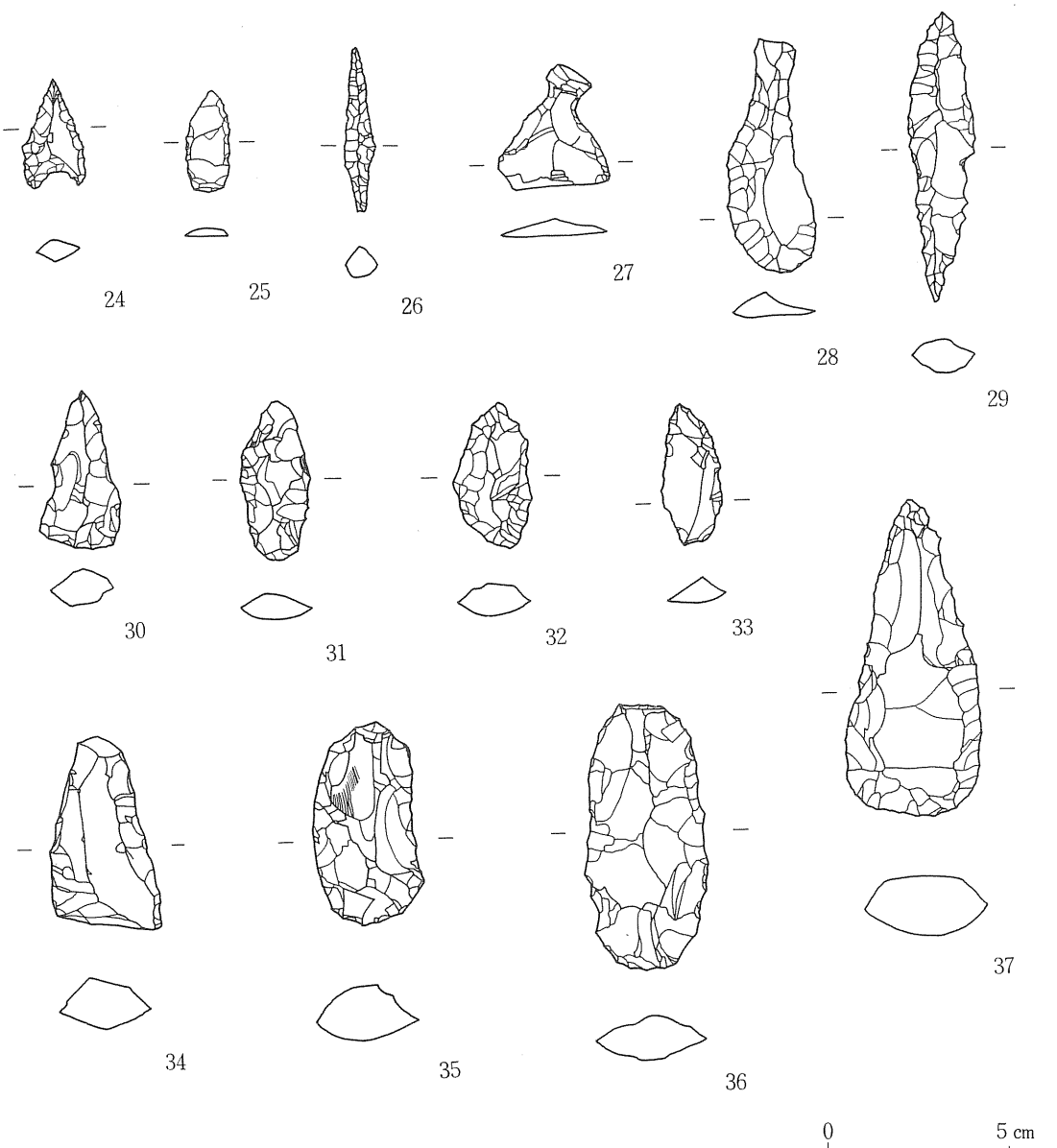
安山岩製で、縁部の一部である。

石皿状石器（第24図23、第26図42・43）

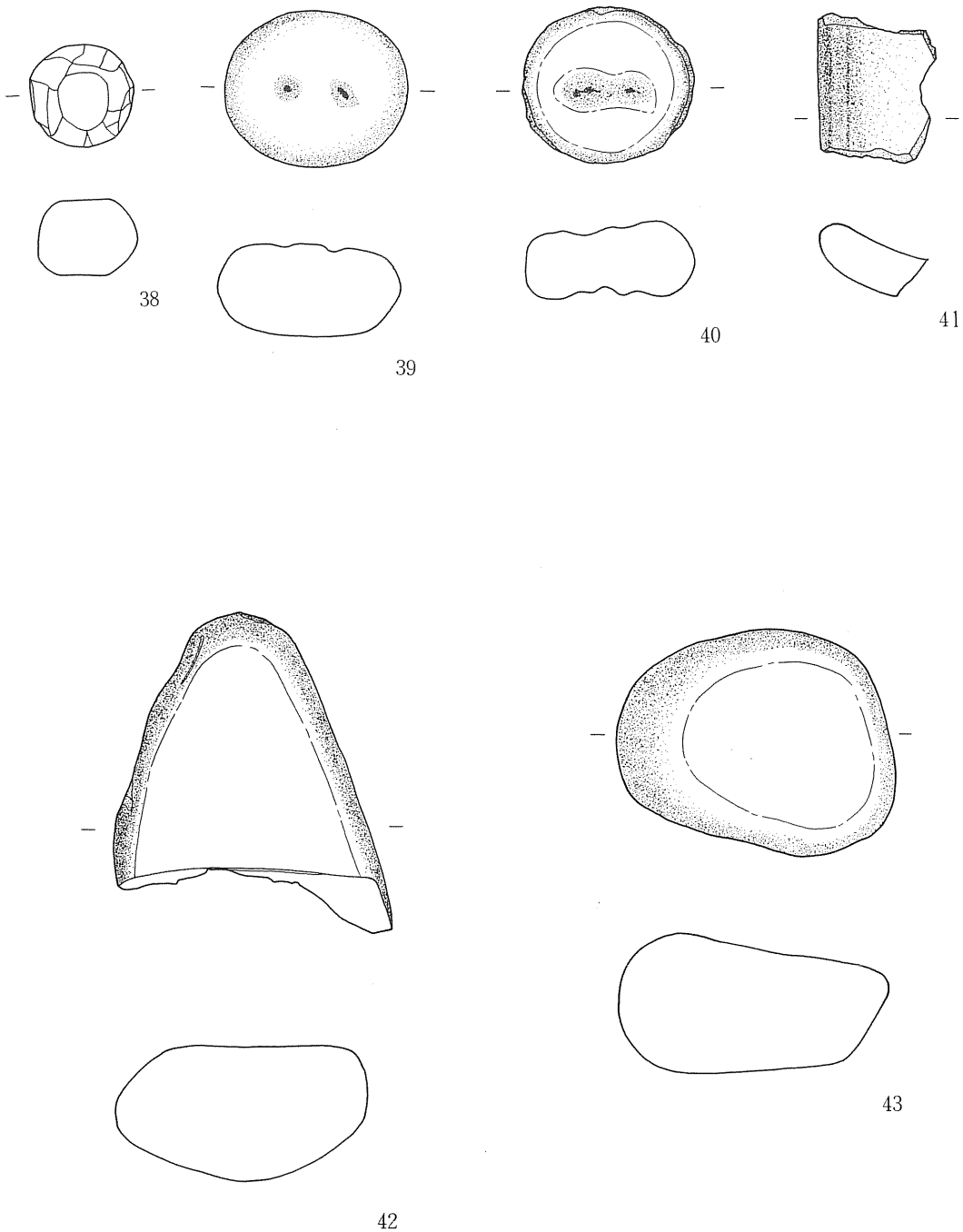
若干くぼんだ自然面を利用したもので、磨滅が著しい。全て安山岩製である。

石製品（第26図38）

上面、下面、側面を磨いて多角面を作っている。花崗岩製である。



第25図　遺構外出土石器



第26図　遺構外出土石器

まとめ

遺構について

下堤G遺跡検出遺構は、住居跡6軒、土坑4基、焼土遺構4カ所、その他の遺構である。

1～4、6号住居は、調査区中央及び南側の台地縁辺部に構築され、円形、楕円形を呈する。規模は4号住居跡が長軸6.5m、短軸5.3mと比較的大形で堀り込みも深い。炉は、土器埋設部、楕円形で鍋底状を呈する堀り込み、浅く溝状を呈する堀り込みがセットとなるものである。複式炉の一形態とも考えられるが、今後類例の増加をまって検討する必要がある。3・4住居跡の土器埋設部は作り替えが認められ、4号住居跡には中央部にも土器埋設炉が確認された。炉の方向は、1・4・6号住居跡が南東方向（沢部）なのに対し、2・3号住居跡は北の方向である。これは入口を考慮した住居間の位置的関係がみられ、入口は1・4・6号住居跡が炉の西側、つまり住居の南側と考えられる。

住居跡の時期は、1～4、6号住居跡が縄文時代中期末葉の大木10式期である。しかし、2号住居跡は出土遺物からしてやや新しい時期と考えられる。5号住居跡は縄文時代前期末葉から中期初頭にかけての時期である。

遺物について

遺構内外出土のものを一括して類別し、さらに群に大別して述べる。

1類（第27図113）

細い粘土紐を貼り付けて幾何学的な文様を作り出し、半截竹管状工具内面により連続爪形文を施すものである。

2類（第27図114）

半隆起線文を施すものである。頸部が内反し、口縁部が立ち上がる器形をなす。

3類（第27図115～129）

口縁部に、粘土紐貼り付け及び半隆起線による直線文、波状文が施され、胴部に半隆起線の波状文及び直線文が並行して縦走するものである。118～122は撚糸文を地文とし、118・119には粘土紐の貼り付けがみられる。129は隆帯文や半隆起線文が複雑に施文されている。

4類（第17図41～44、第18図73～75、第19図76～86、第27図130～140、第28図139～142、第31図202）

半隆起線文を主体とするもので、刻目文・格子目状文及び隆帯文などを施すものである。202は小形の円筒形をなし、胴部二カ所（相対して）に粘土紐を貼り付けている。口縁部は横走する半隆起線文と縦に短い半隆起線文を並べ、胴部はあらかじめ半截竹管状工具の両端を軽くあてて引き格子目状に文様を施し、後に強くあてて引いた半隆起線文を幾何学的に施す。

5類（第18図67～69、第19図87～91、第28図143～148）

口縁部文様帯に隆帯及び撚糸圧痕文などを施すものである。87・88はすき間のある山形口縁90・

143は二又の山形口縁である。

6類（第12図11、第19図92～94、第28図149～160）

複合口縁をもつもの、口縁部に撚糸圧痕や単節縄文を施すものである。11は山形口縁で頂部より隆帯が垂下し撚糸圧痕文（口縁部、口唇部）が施される。149は円筒深鉢形を呈し、口縁部が二段に作られ単軸絡条体圧痕文が施される。155は粘土紐をやや盛り上げアーチ状に貼り付けている。160の口唇部にはＬＲ原体を刻目状に圧痕する。

7類（第19図95・96）

いずれも小突起部であり、かなり複雑な作りである。

8類（第29図161）

頸部が内傾して立ち上がる口縁部で、浅鉢形の器形をなす。口縁部に撚糸圧痕文を施す。

9類（第９図７）

口縁部に撚糸圧痕文を並行及び＞状に施し、頸部に単軸絡条体圧痕文が施される。また８字状に粘土紐が貼り付けられ、胴部地文と同一の縄文が施される。

10類（第４図１、第７図５・６、第９図８、第12図12、第16図13・14・17・18、第17図35・36・43～49、第18図50～63、第20図100～105・108、第29図162～178）

曲線的な磨消帯及び口縁部無文帯のものである。磨消帯は沈線で区画され、Ｊ字状・波状などバラエティーに富む。口縁部は平縁が主で、無文帯と地文帯の境に沈線を巡らすものとそうでないものがある。深鉢形の器形で大形のものが多いが、口縁部がすぼんだり小形の土器もみられる。

11類（第４図３、第９図10、第16図16・20・21）

10類と同様であるが、沈線によって区画された部分に刺突や、長楕円形、円形に列点文を加飾するものである。３・10は下から、20・21は斜めからの刺突で、20は波状口縁をなす。

12類（第７図４、第16図15、第17図26～34）

曲線的な磨消帯を施すが、文様や器形などが11・12類に当てはまらないものである。26～29は同一個体で、山形口縁をもち頂部下に孔を穿ち、口縁部内面には稜線がみられる。30・31は内面に32は外面に貼り付けが施される。

13類（第29図179・180）

沈線で文様を施すものである。179はＳ字状の連鎖文が垂下する。

14類（第29図181～188、第31図203）

口縁部を主に沈線で施文するもので、平行沈線文が多い。器形は深鉢形・浅鉢形・鉢形・壺形土器である。203は作りの良い浅鉢形土器で、変形工字文が施され二個一対の瘤が付く。体下部に縄文が残る。

15類（第19図97～99、第20図111・112、第30図189・190）

木目状撚糸文の施されるものである。

16類（第30図191～193）

口縁部に羽状縄文の施されるものである。

17類（第９図９、第16図19、第17図37・38、第18図64～66、第20図109、第30図194～198）

撚糸文の施されるものである。

18類（第18図71・72、第20図108・110、第30図199～201）

櫛状工具により櫛目文を施すものである。

以下、群別して時期・型式について述べると、

１群は１～８・15類が相当し、縄文時代前期末葉から中期前葉の土器を一括した。１～３は大木６式土器に比定されるもので、半隆起線文や隆帯が施されるものである。４類は半隆起線文が幾何学的に施されるもので、北陸地方の新保・新崎様式の土器と考えられる。５類は口縁部文様帯に隆帯及び撚糸圧痕文が施され山形口縁をもつなど、円筒上層ａ式土器に比定できるものである。また６類もかなり近いものと考えられる。８類は撚糸圧痕文の施される浅鉢形土器で、大木７ｂ式土器に比定できるものである。16類の木目状撚糸文の施される土器も本群に含まれるものである。

２群は10～12・17類が相当し、中期末葉のものを一括した。Ｊ字状・波状などの曲線的な磨消帯及び口縁部が無文帯をなすもので、大木10式土器に比定されるものである。11類は刺突文・列点文が加飾される。12類は器形や文様形態が14・15類と比して特異であり、本型式の中でもやや新しい時期と考えられる。17類の櫛目文を施す土器も本群に含まれるものである。

３群は13類が相当する。沈線で幾何学的な文様を施すもので、縄文時代後期の土器である。

４群は15類が相当する。薄手の精製土器に沈線で文様を施すもので、縄文時代晩期の土器である。

９類の土器については今後の資料増加をまって検討する必要がある。

住居跡出土土器

１号住居跡　10・11・17類

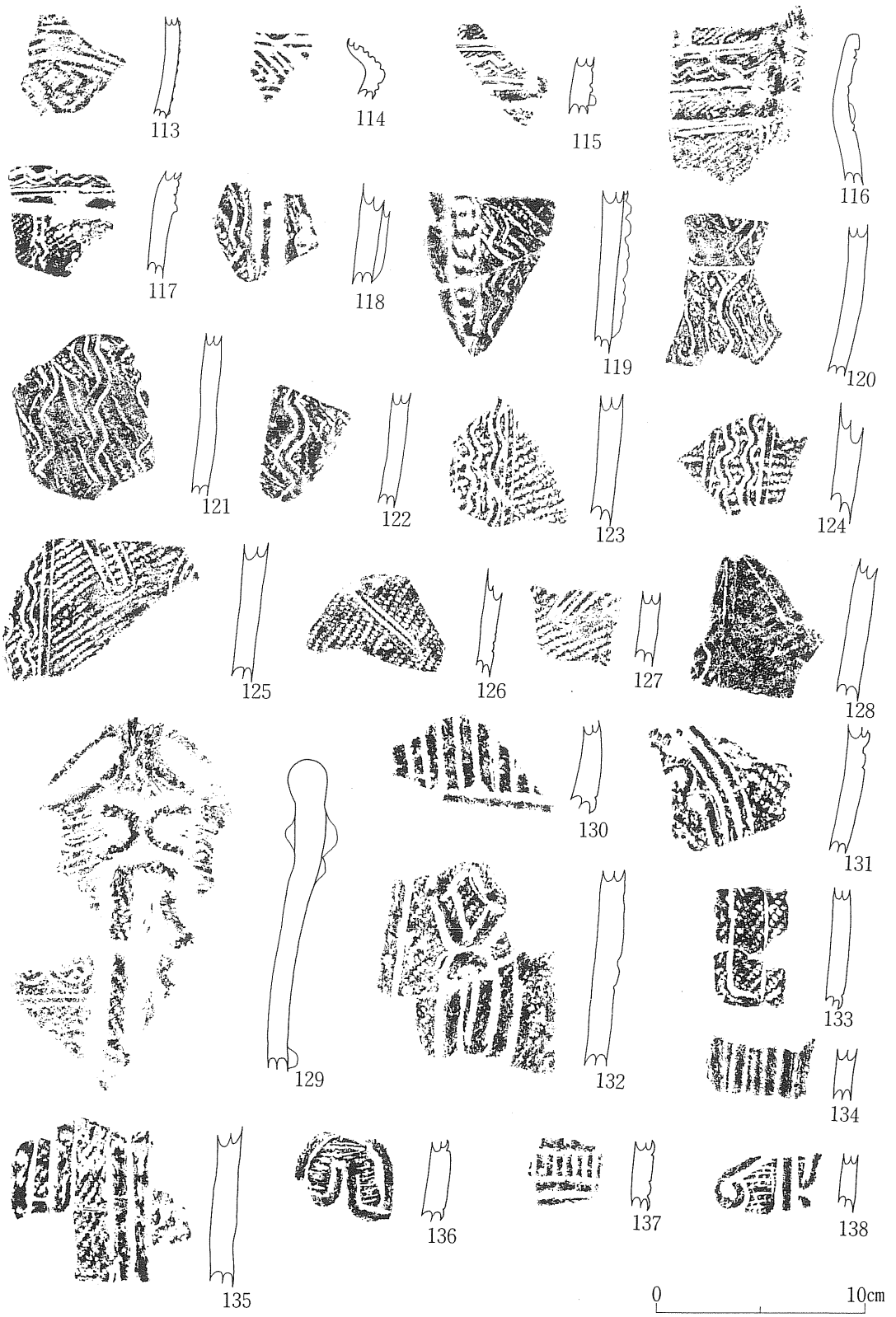
２号住居跡　12類

３号住居跡　10・17類

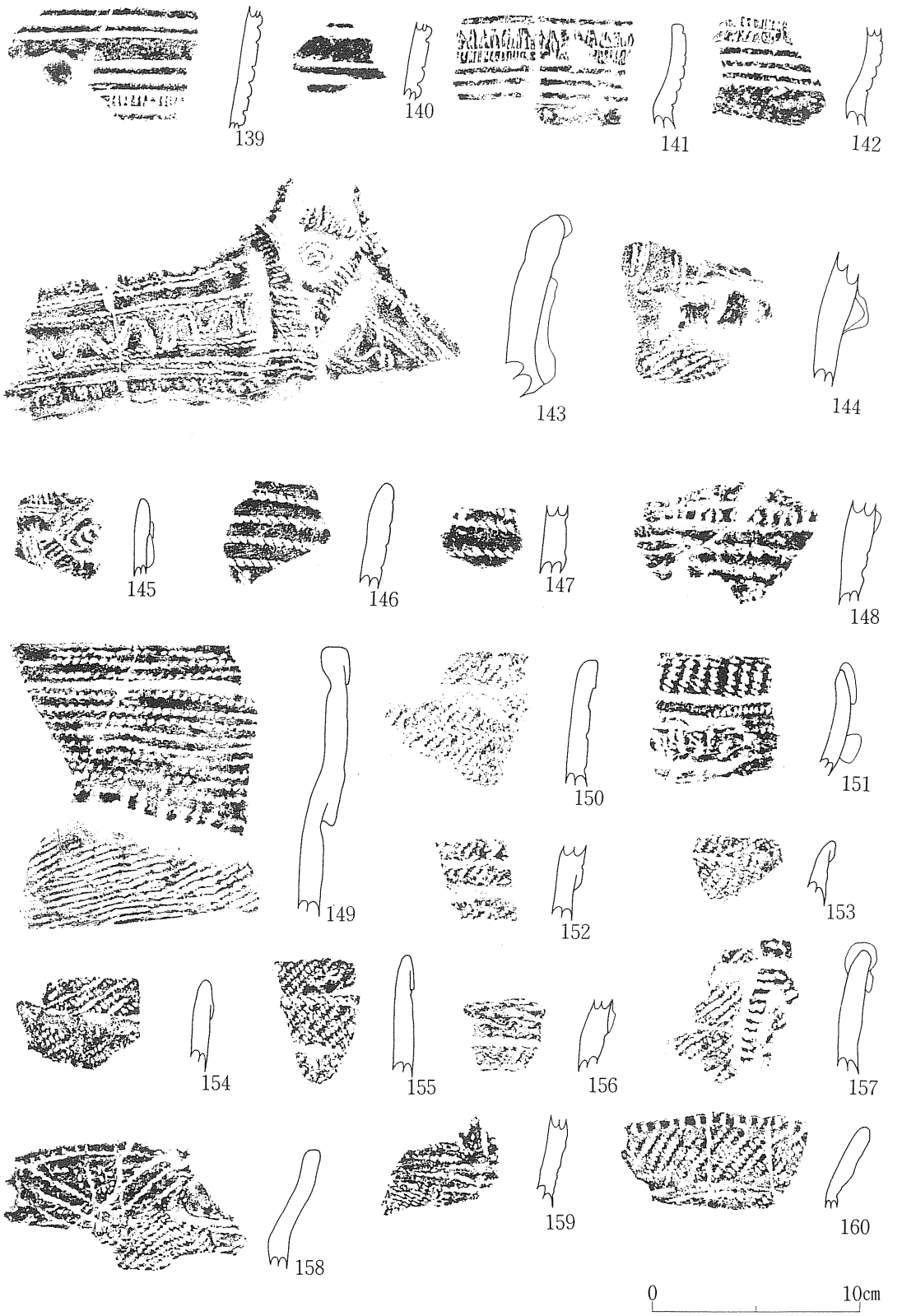
４号住居跡　10・17・18類（４・５類が少量、９類が１個体）

５号住居跡　４・５・６・８・15類

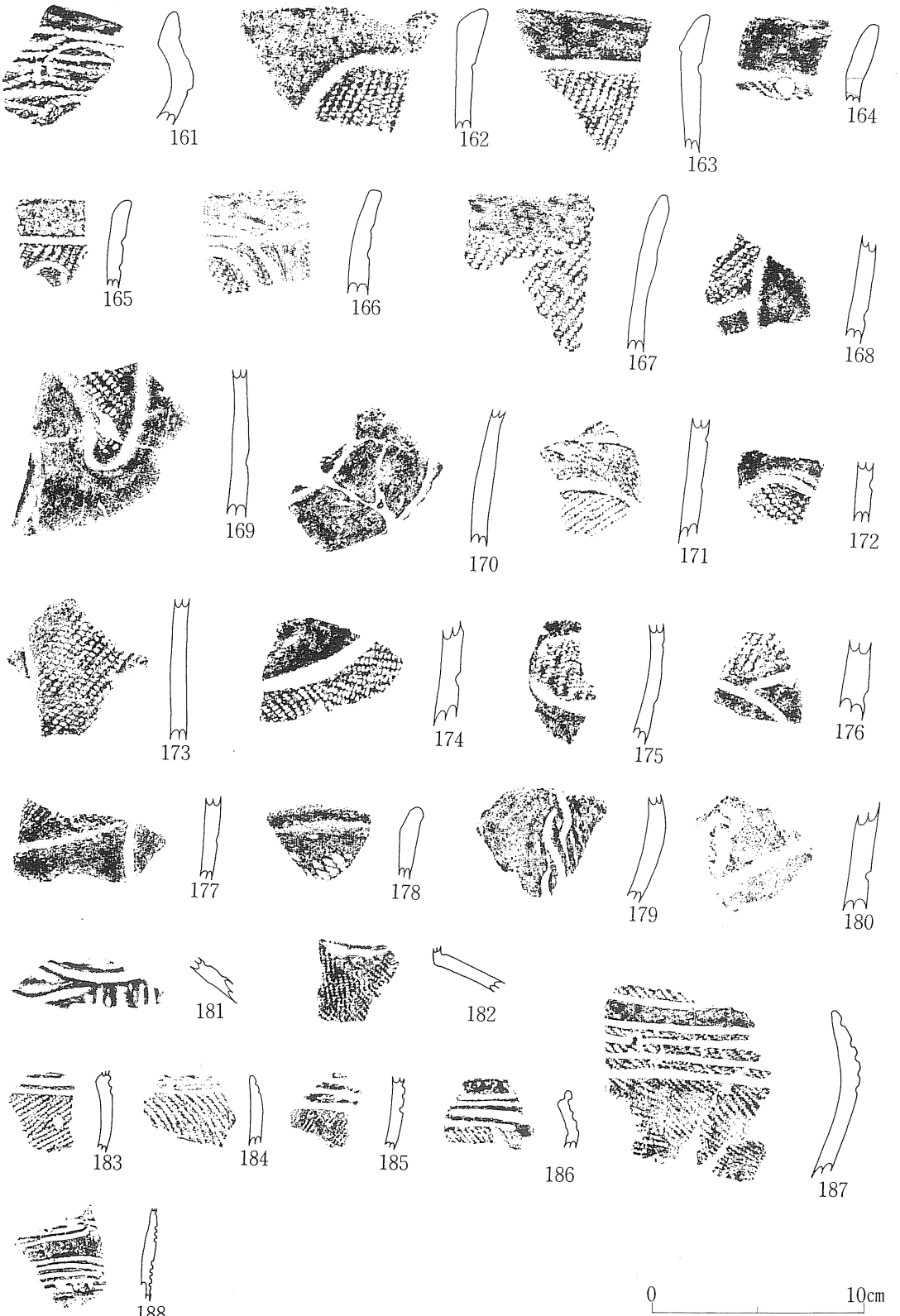
６号住居跡　10類



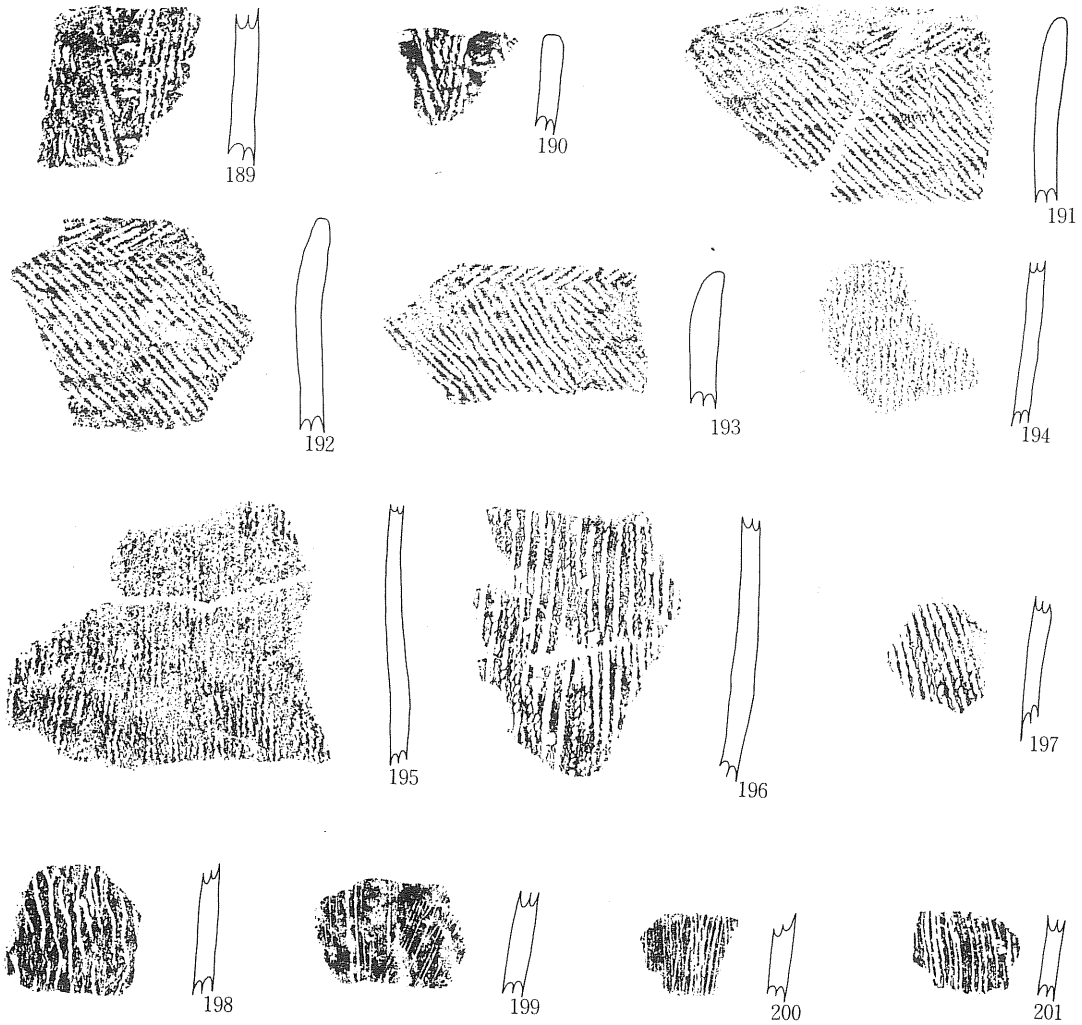
第27図　遺構外出土土器



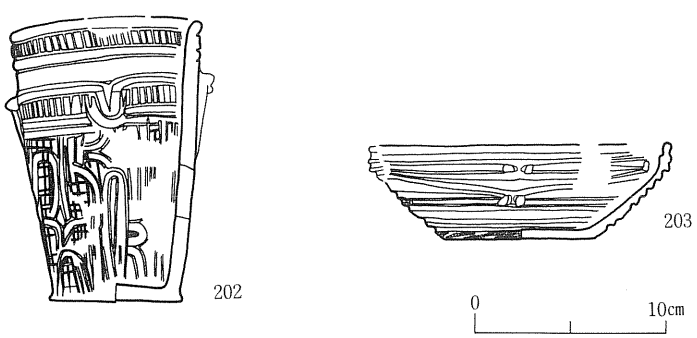
第28図　遺構外出土土器



第29図　遺構外出土土器



第30図　遺構外出土土器　0　10cm



第31図　遺構外出土遺物

参　考　文　献

秋田県教育委員会：「秋田県立中央公園スポーツゾーン地域内遺跡発掘調査報告書　駒坂袋Ⅰ遺跡」　秋田県文化財調査報告書第92集　1982

秋田県教育委員会：「内村遺跡発掘調査報告書」秋田県文化財調査報告書第92集　1981

秋田県教育委員会：「梨ノ木塚遺跡発掘調査報告書」　秋田県文化財調査報告書第63集　1979

秋田市教育委員会：「小阿地下堤遺跡/坂ノ上遺跡発掘調査報告書」　1976

秋田市教育委員会：「下堤Ｄ遺跡発掘調査報告書」　1982

梅宮　茂　　：「複式炉文化論」　福島考古第15号　福島県考古学会　1974

協和町教育委員会：「米ヶ森遺跡発掘調査報告書」　1977

芹沢長介　坪井清足他：「縄文土器大成　第１巻早・前期」　講談社　1982

芹沢長介　坪井清足他：「縄文土器大成　第２巻中期」　講談社　1981

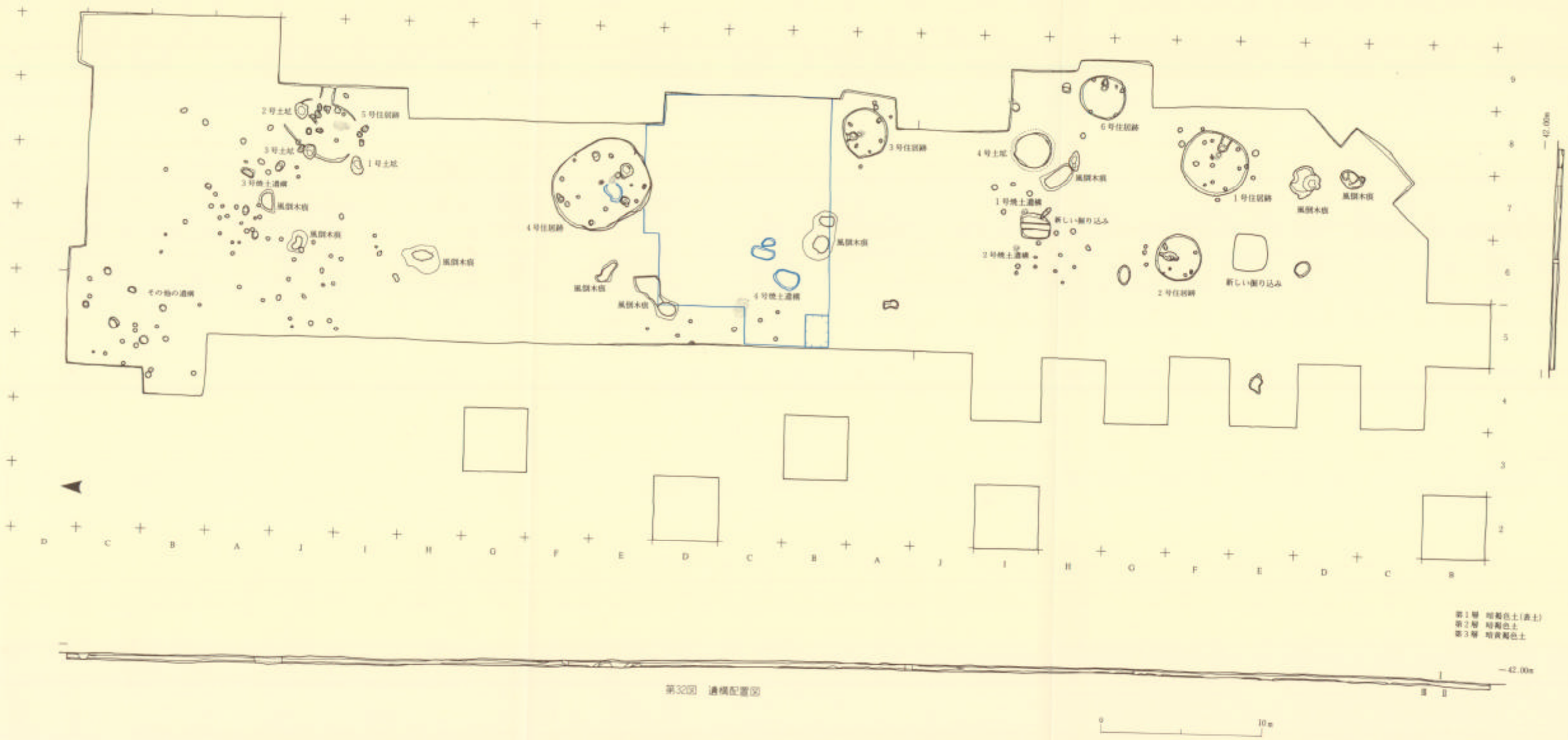
相馬市教育委員会：「馬見塚遺跡」　福島県相馬市文化財調査報告書　1982

丹羽　茂　　：「大木式土器」　縄文文化の研究４縄文土器Ⅱ　雄山閣出版　1981

丹羽　茂　　：「福島県における縄文時代中期の住居・集落跡研究の現状と問題点」　福島考古第15号　福島県考古学協会　1974

中村良幸　　：「『複式炉』について —岩手県を中心として —」考古風土記　第７号　1982

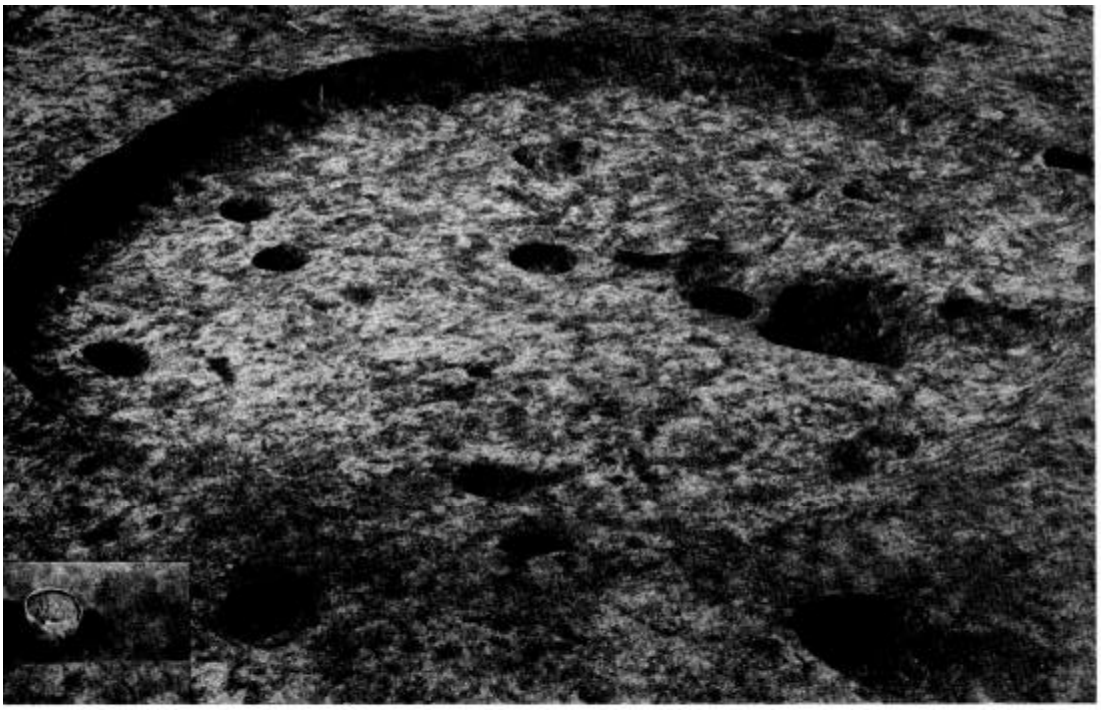
目黒吉明　　：「住居の炉」　縄文文化の研究８社会・文化　雄山閣出版　1982


2号土坑
5号住居跡
3号土坑
1号土坑
3号焼土遺構
風倒木痕
風倒木痕
風倒木痕
その他の遺構
4号住居跡
風倒木痕
風倒木痕
風倒木痕
4号焼土遺構
3号住居跡
4号土坑
風倒木痕
1号焼土遺構
新しい掘り込み
2号焼土遺構
6号住居跡
1号住居跡
風倒木痕
風倒木痕
2号住居跡
新しい掘り込み
42.00m
D C B A J I H G F E D C B A J I H G F E D C B
第1層 暗褐色土(表土)
第2層 暗褐色土
第3層 暗黄褐色土
42.00m
0
10m

第32図 遺構配置図

調査前（北西→）

図版 1　遺跡全景（北→）



1号住居跡（南東→）

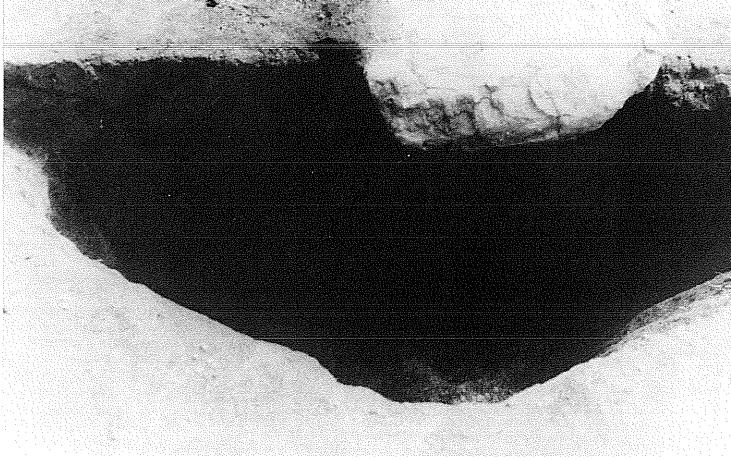
図版2　2号住居跡（西→）

3号住居跡（西→）

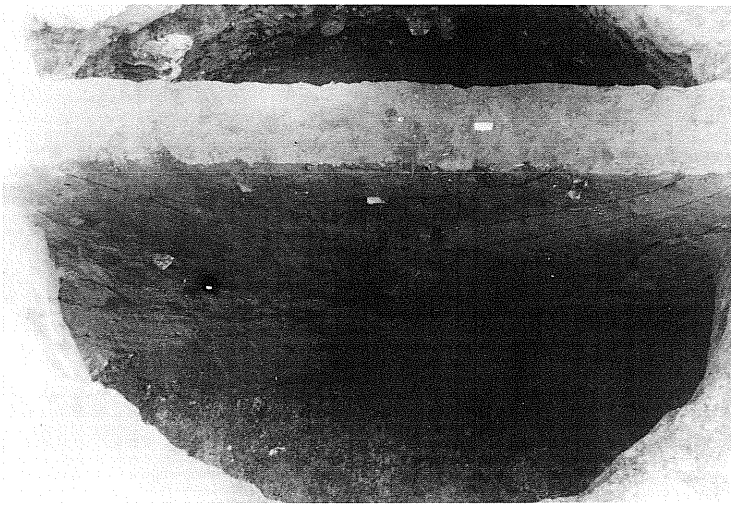
図版 3　4号住居跡（西→）

5号住居跡（西→）

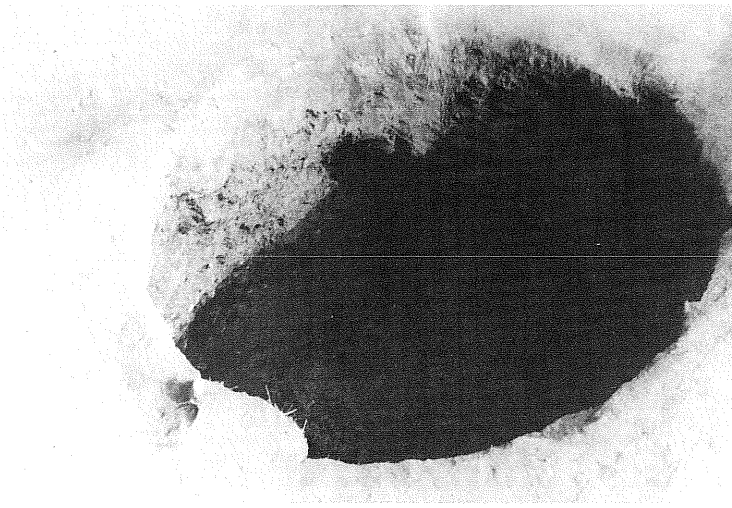
図版 4　6号住居跡（西→）



2号土坑
土層断面
(西→)



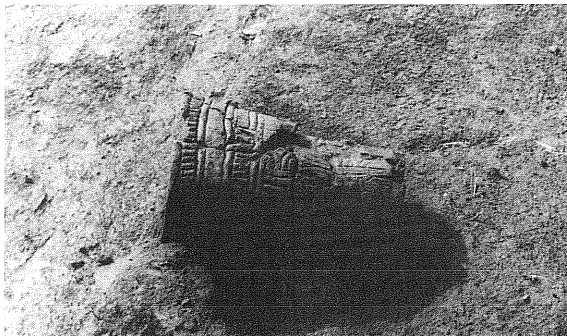
4号土坑
土層断面
(西→)

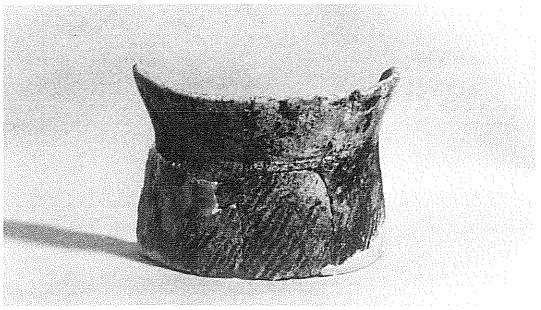


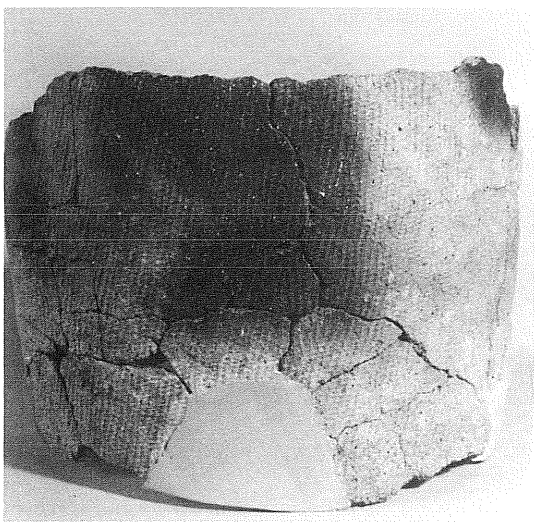
図版 5

4号土坑
(西→)

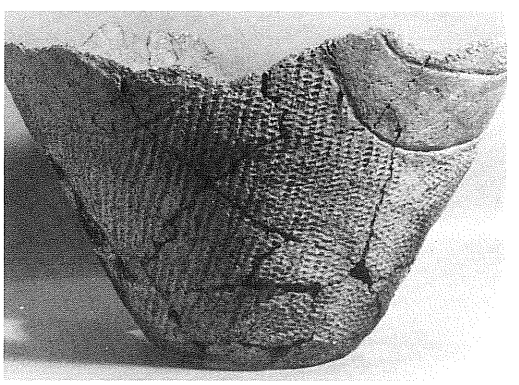
遺物出土状態

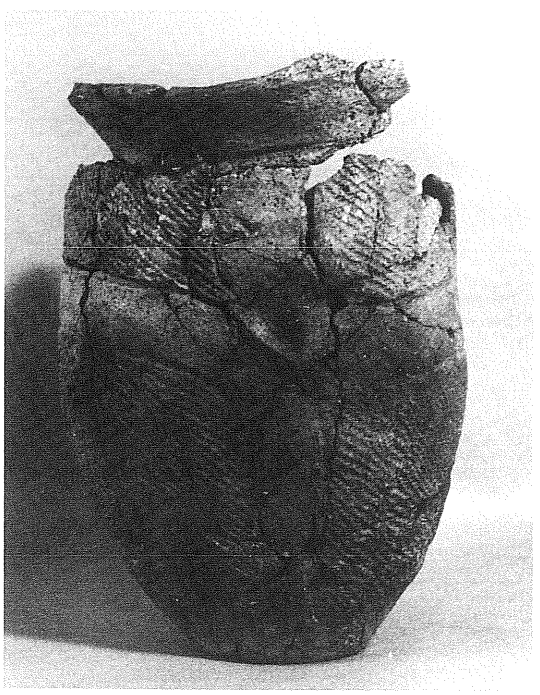




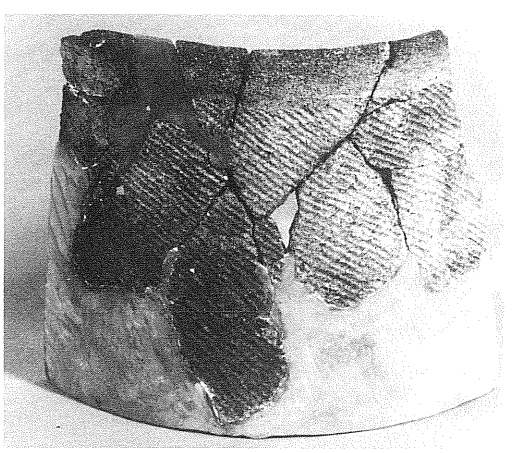


1 号住居跡出土



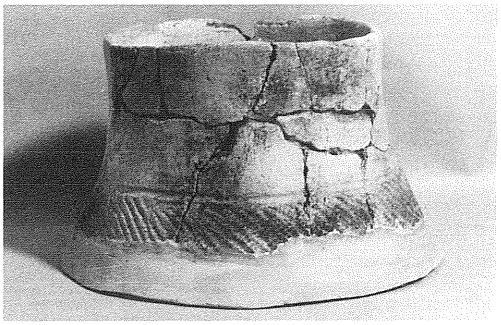


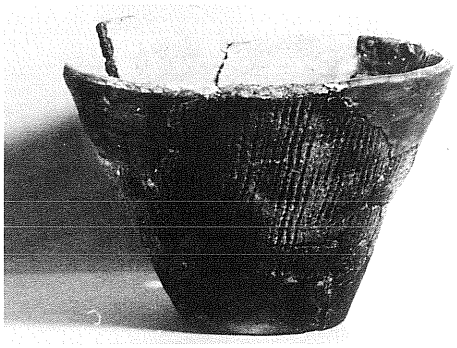
2 号住居跡出土

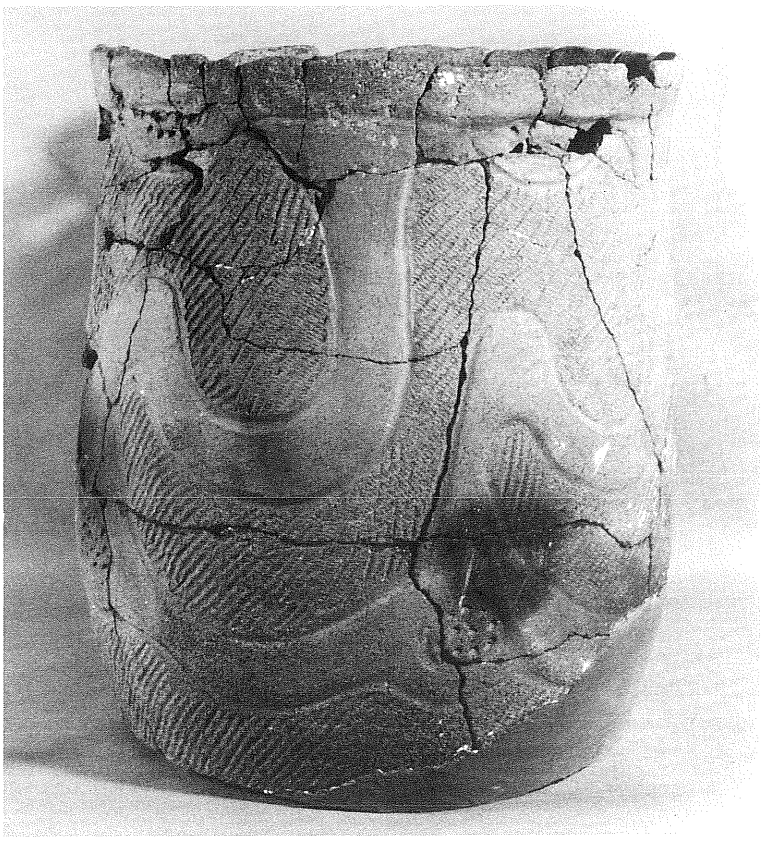


3 号住居跡出土

図版 6

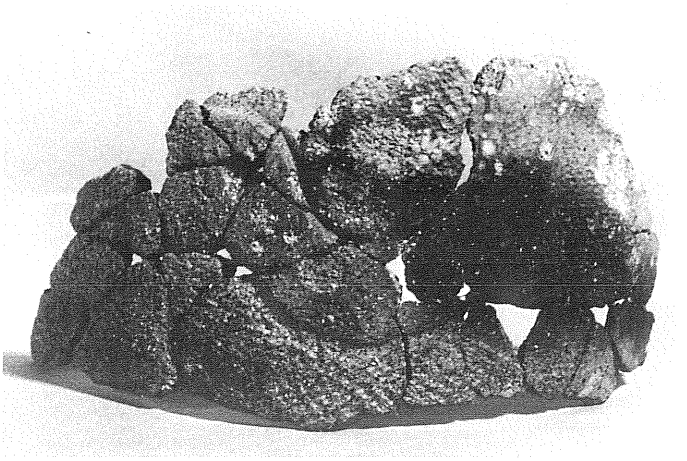




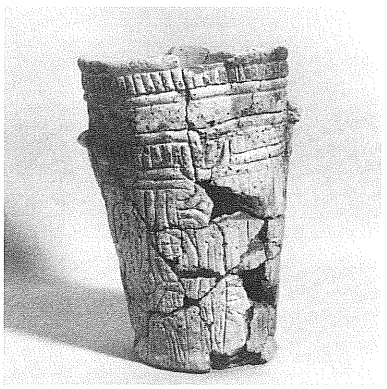


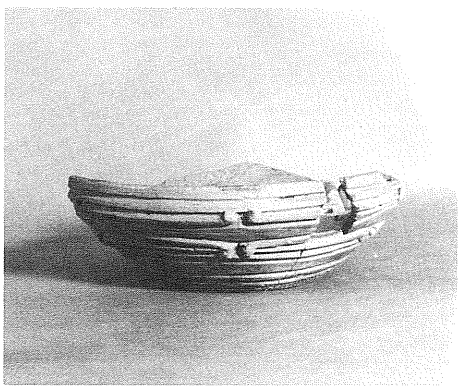
図版 7　4 号住居跡出土

5号住居跡出土

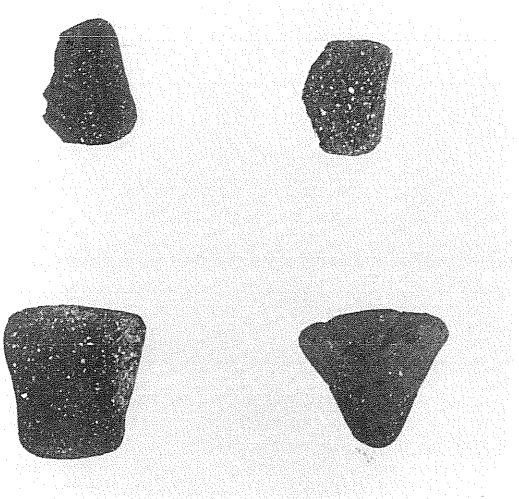


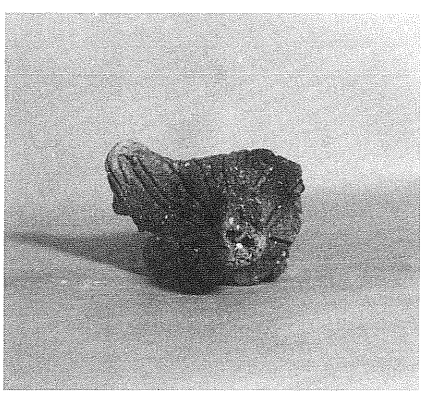
6号住居跡出土





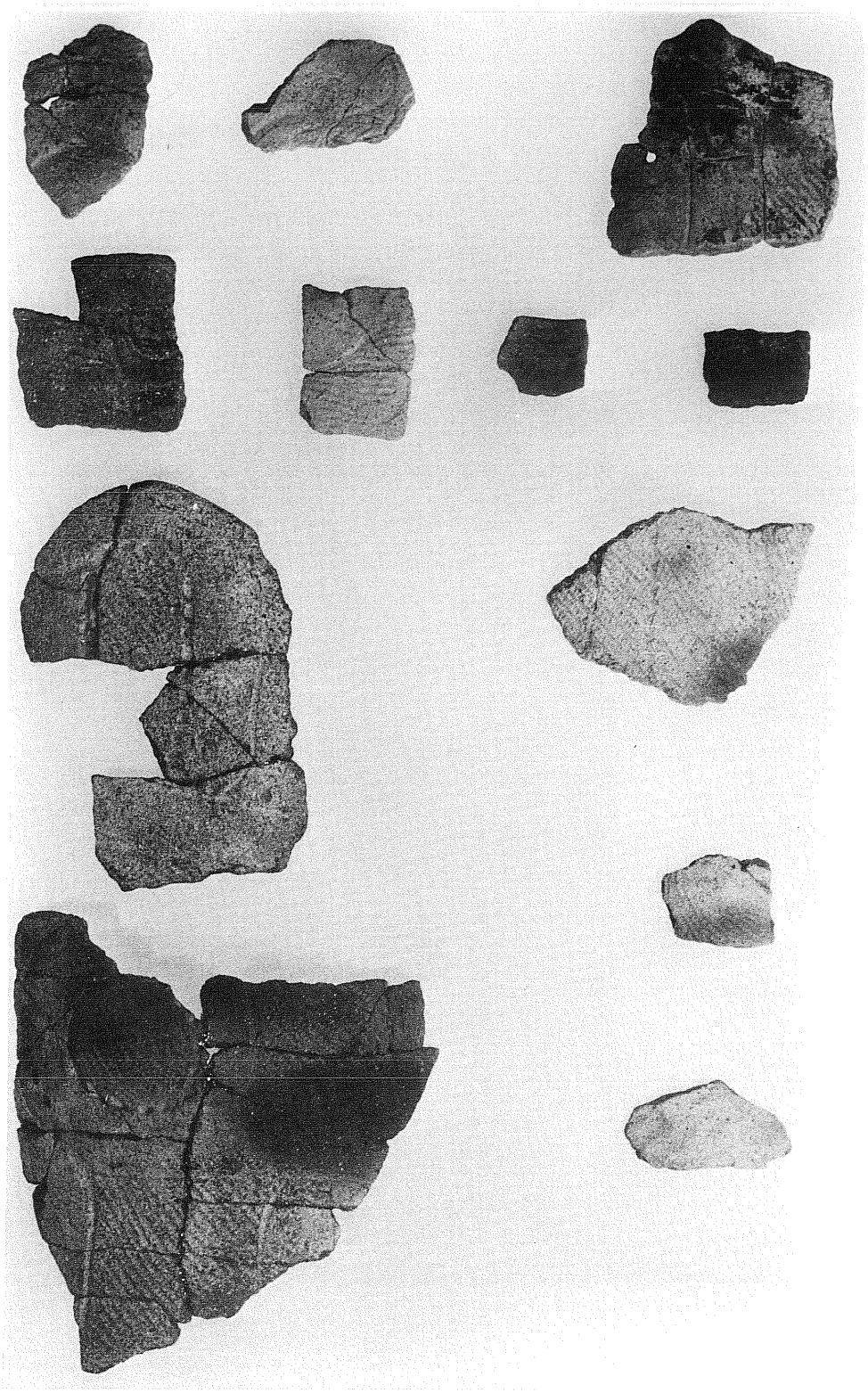
遺構外出土



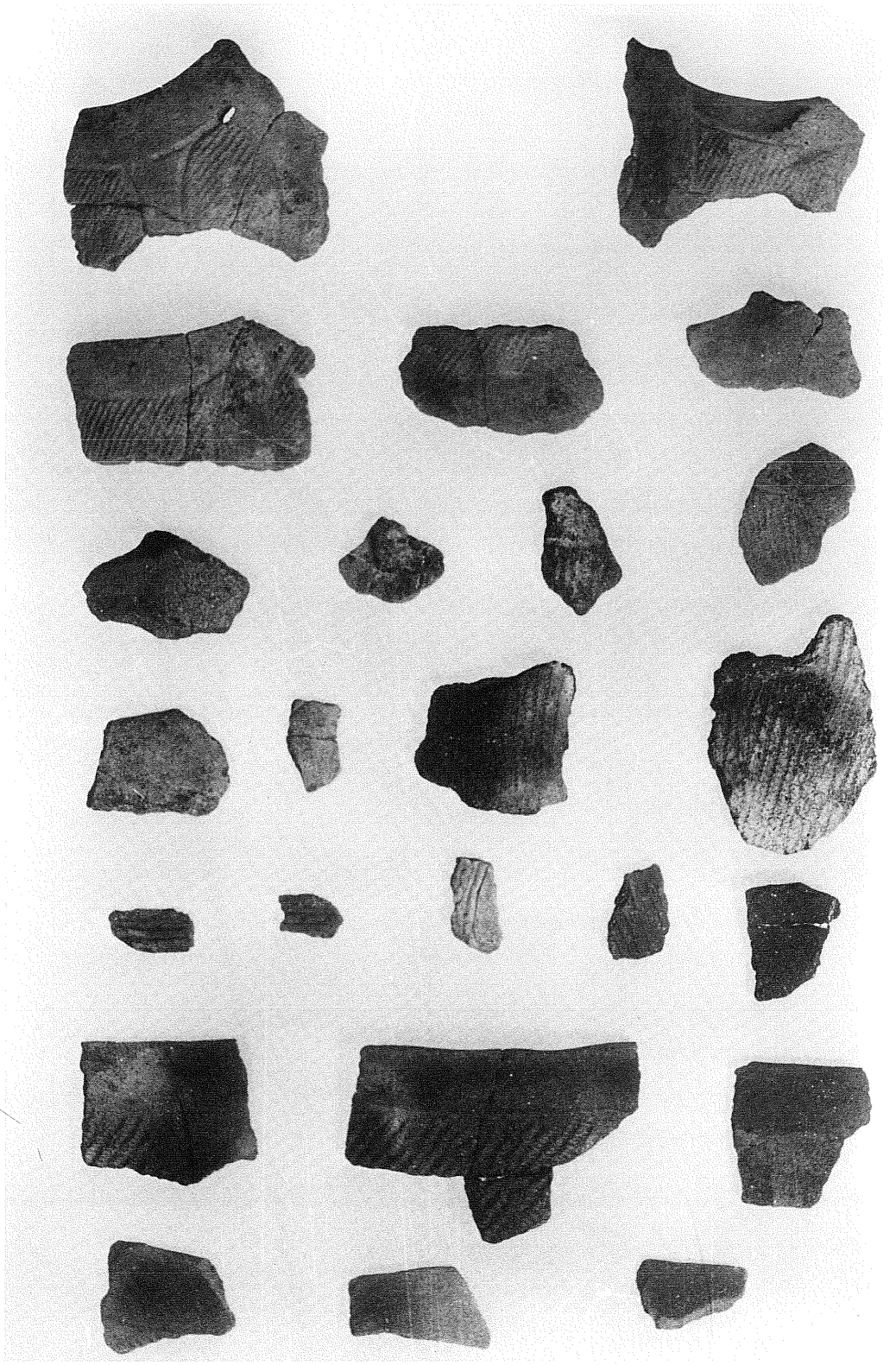


土製品

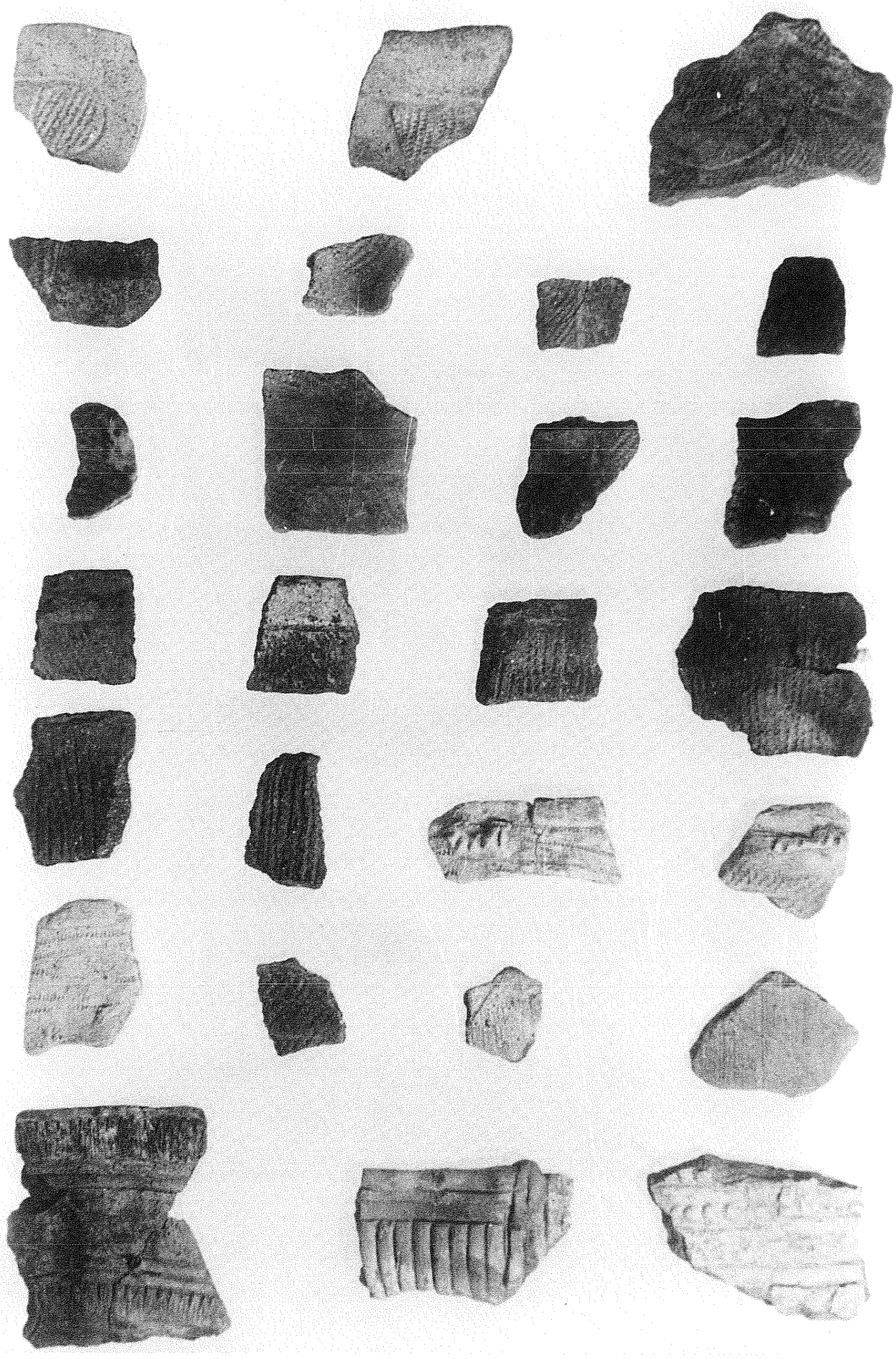
図版 8



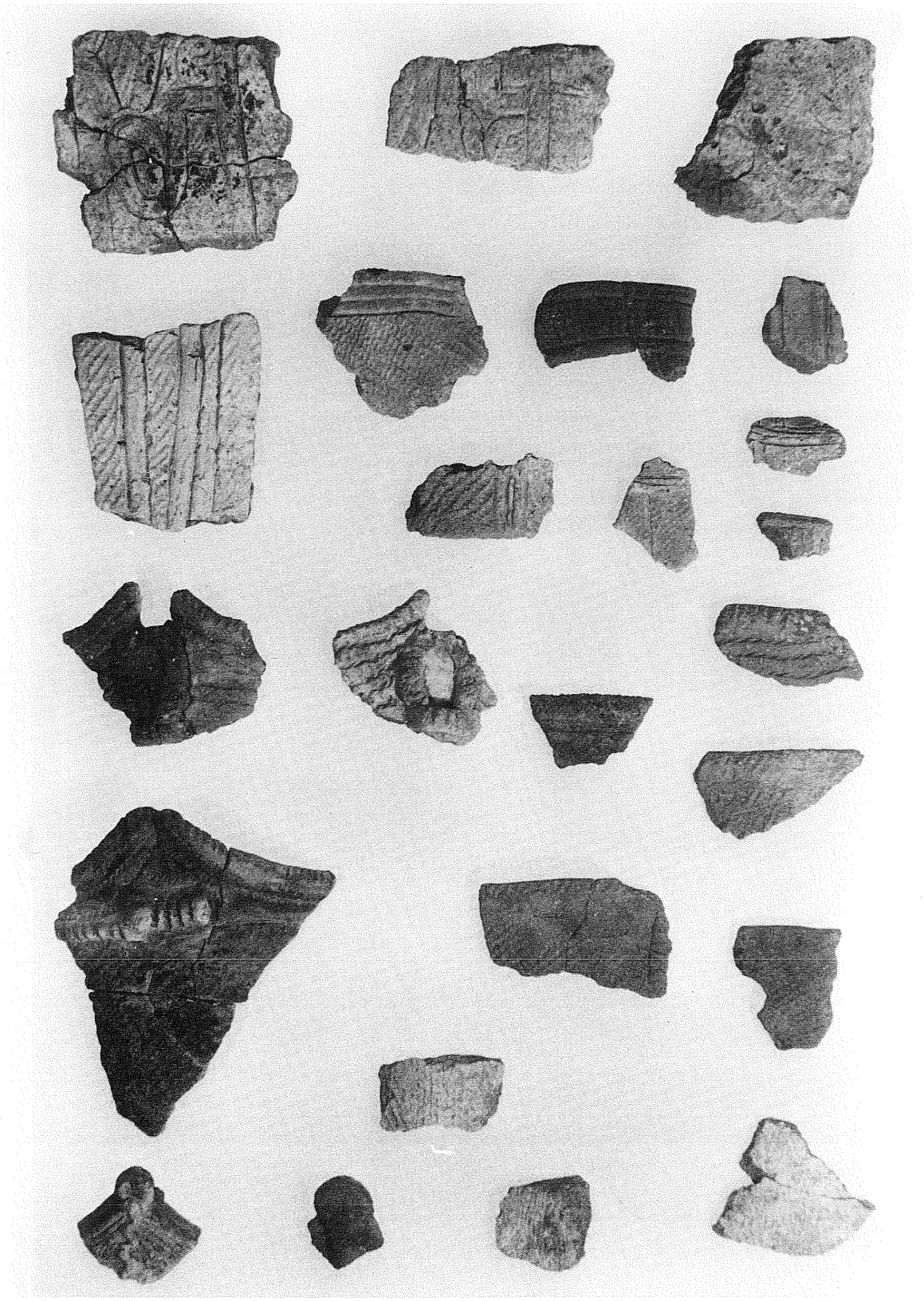
図版 9　遺構内出土土器



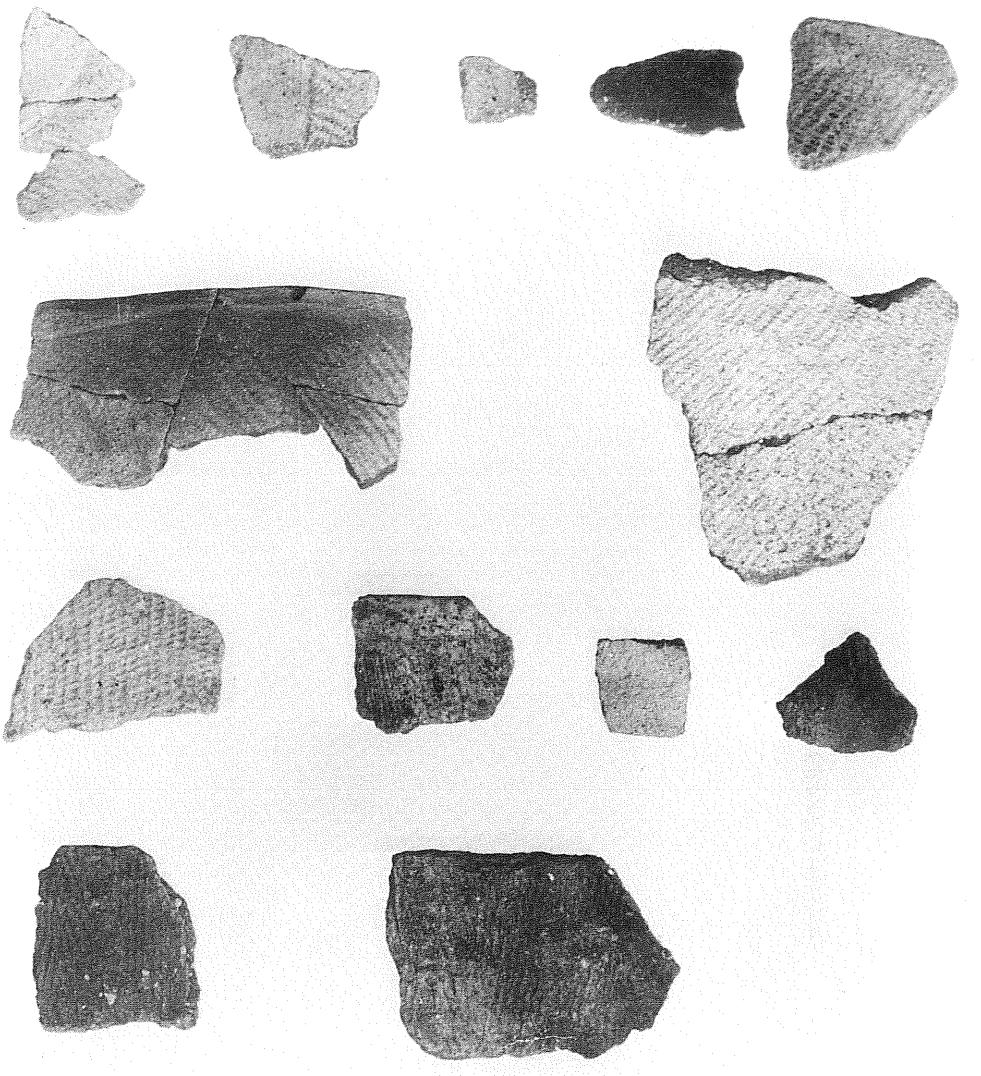
図版10　遺構内出土土器



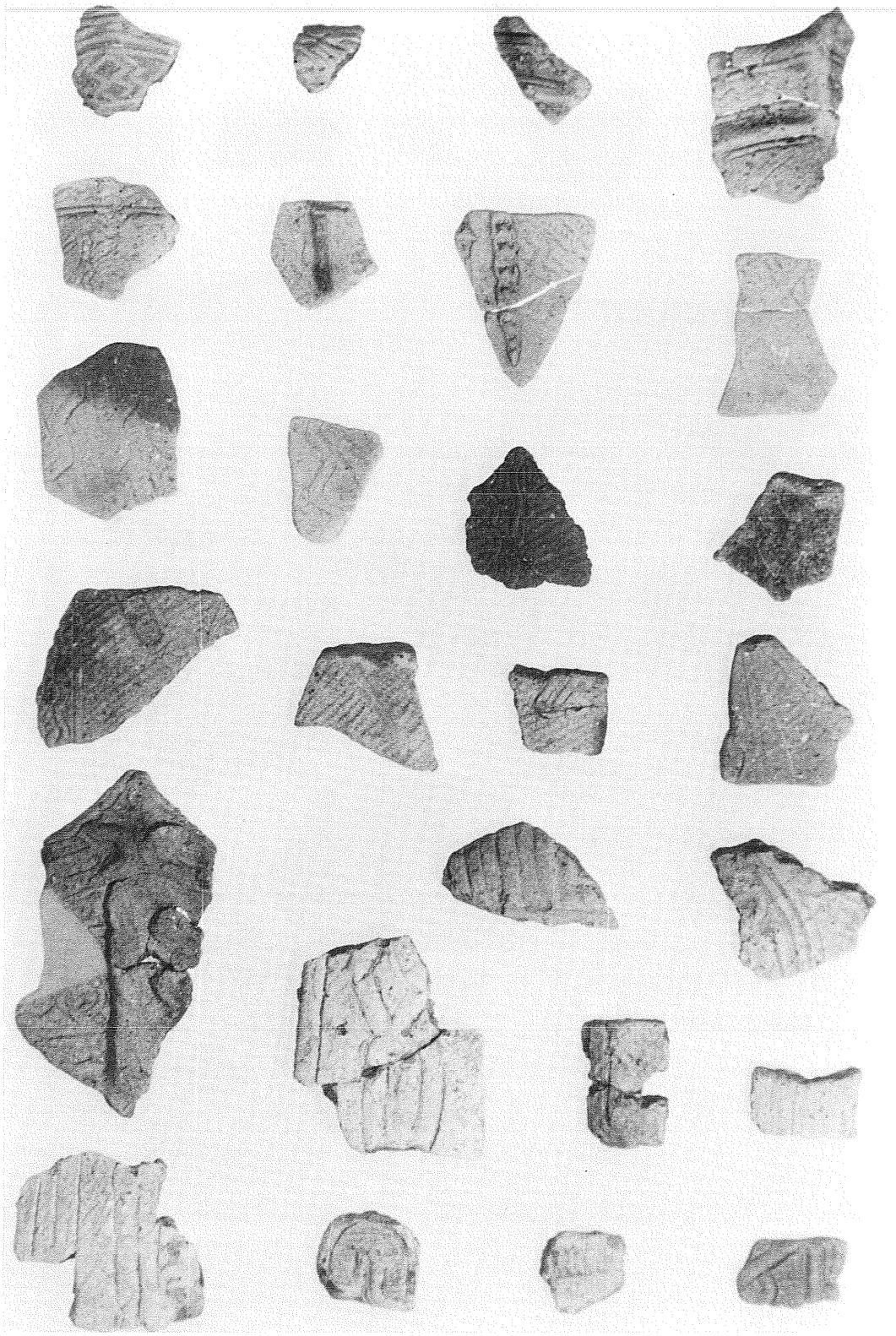
図版11　遺構内出土土器



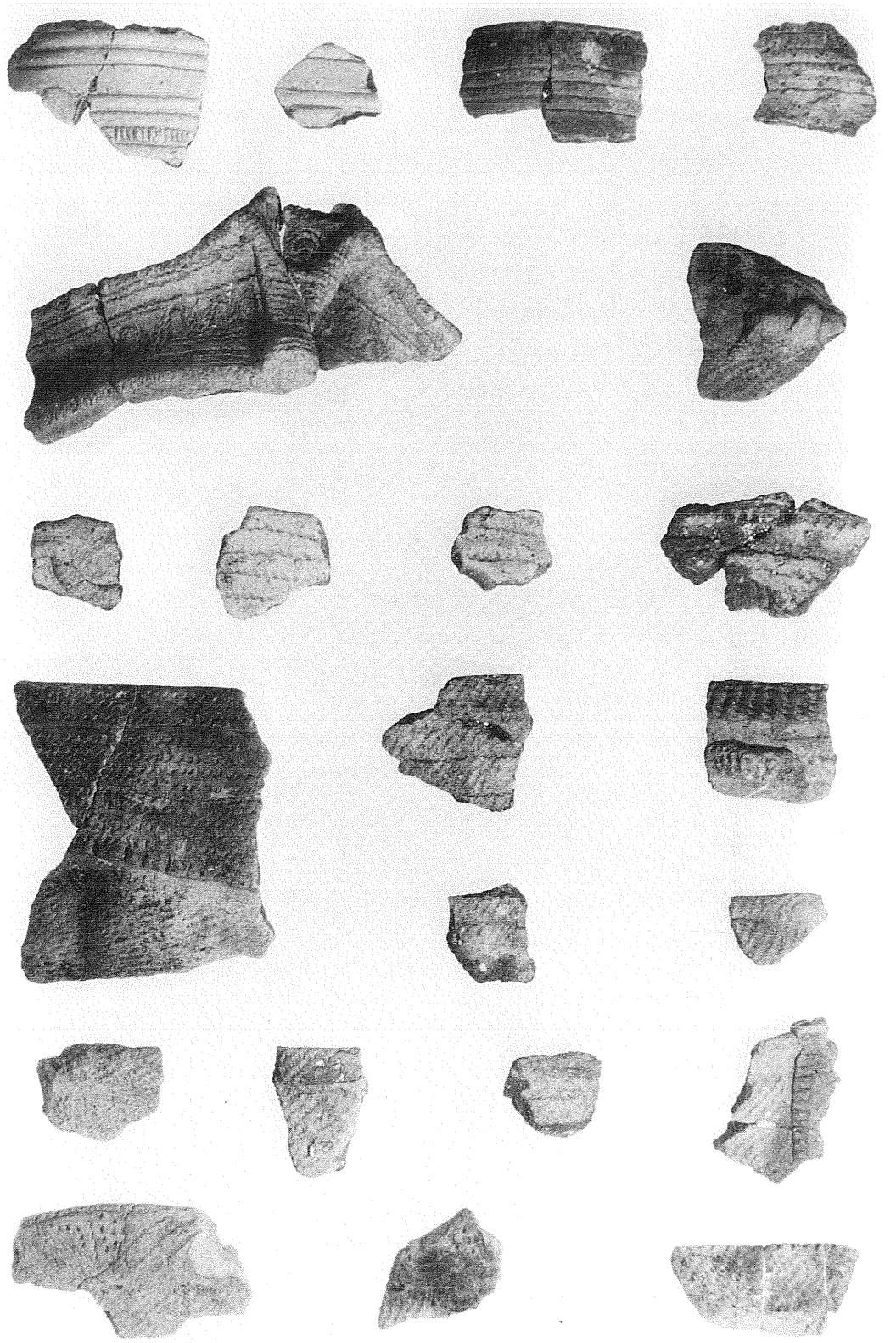
図版12　遺構内出土土器



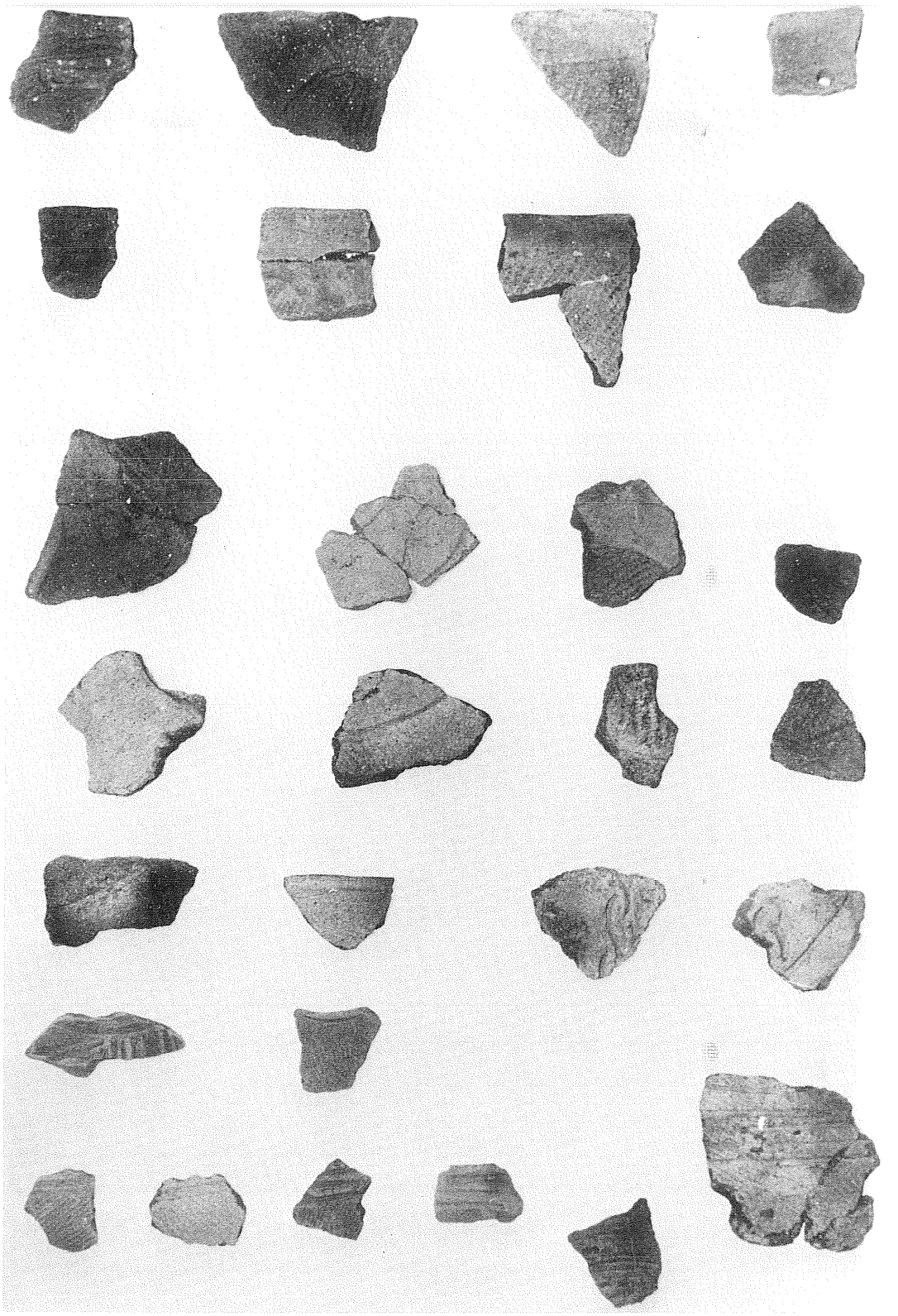
図版13　遺構内出土石器



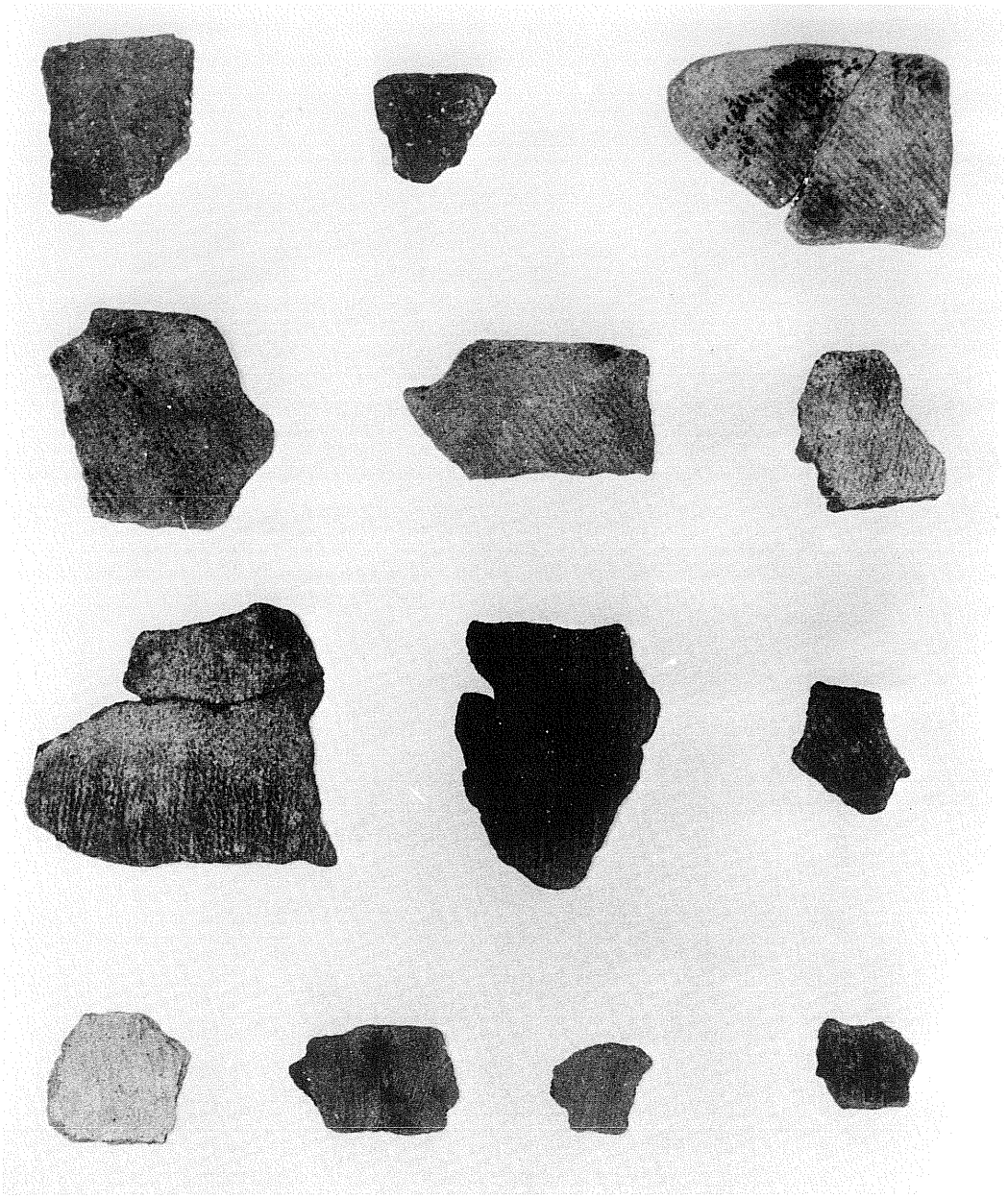
図版14　遺構外出土土器



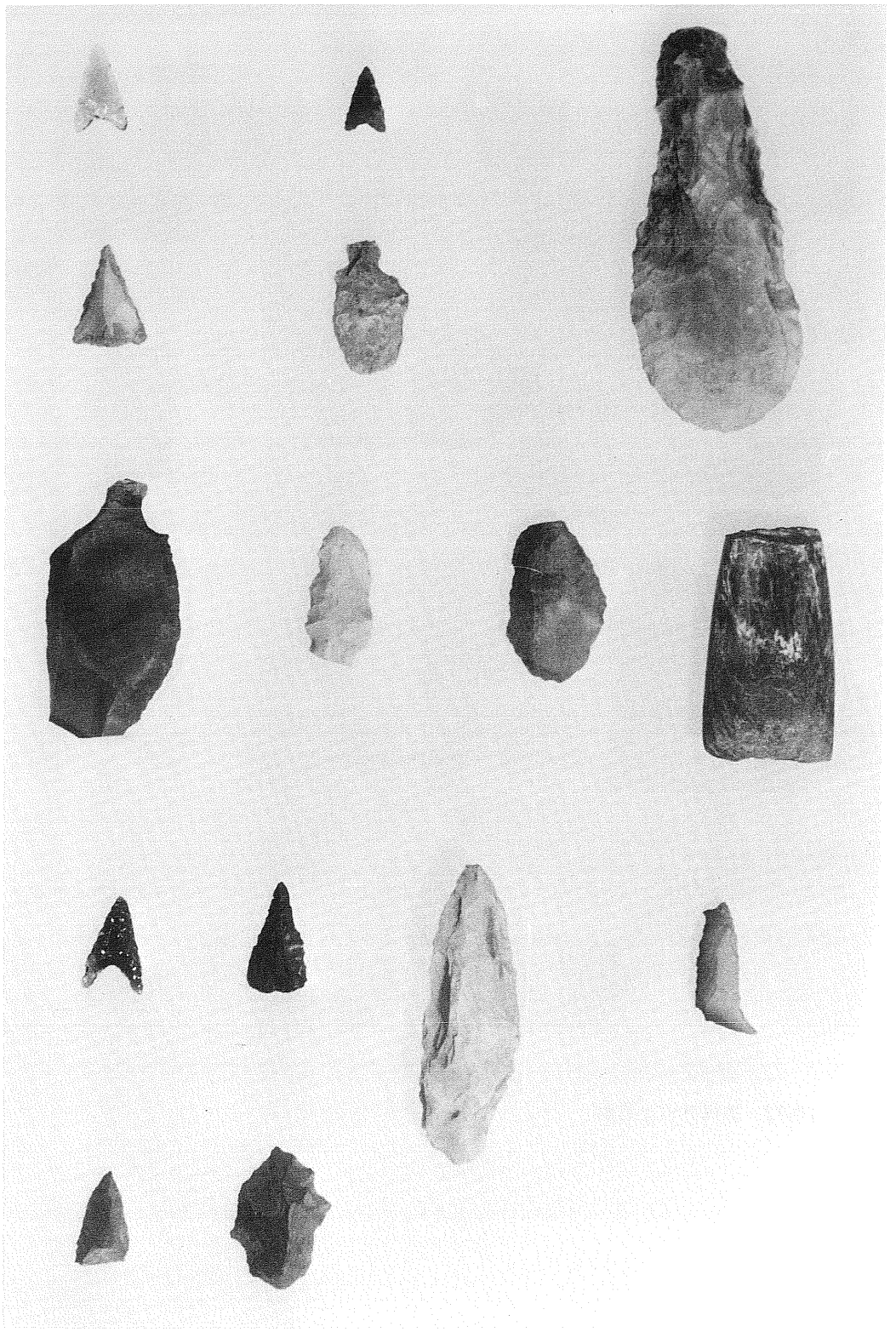
図版15　遺構外出土土器



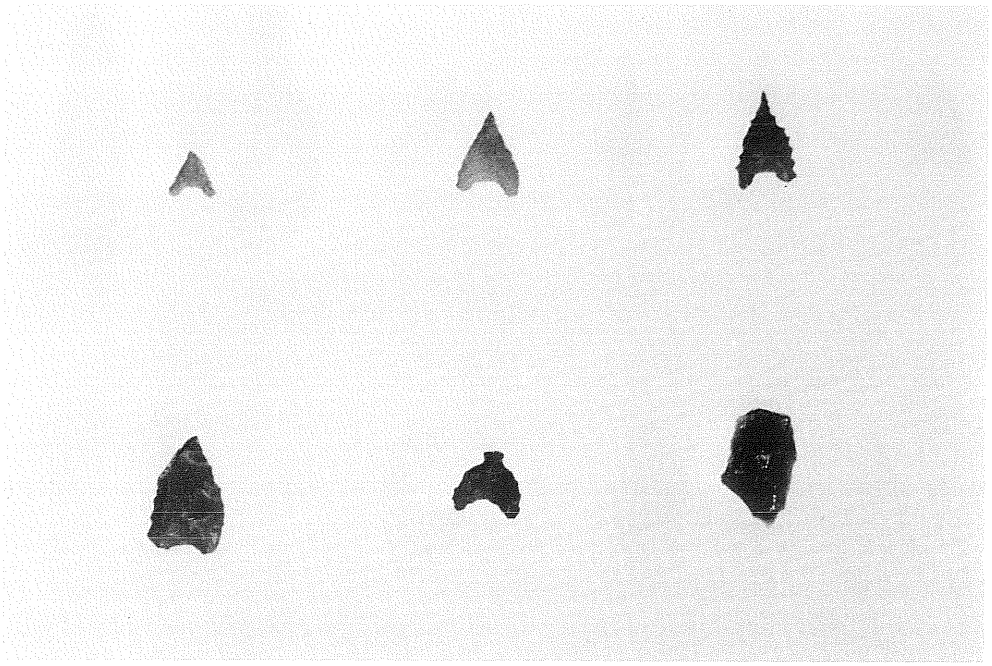
図版16　遺構外出土土器

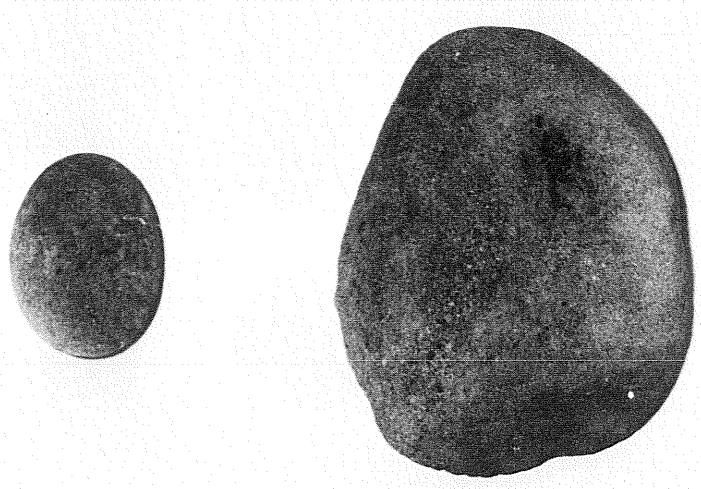


図版17　遺構外出土石器

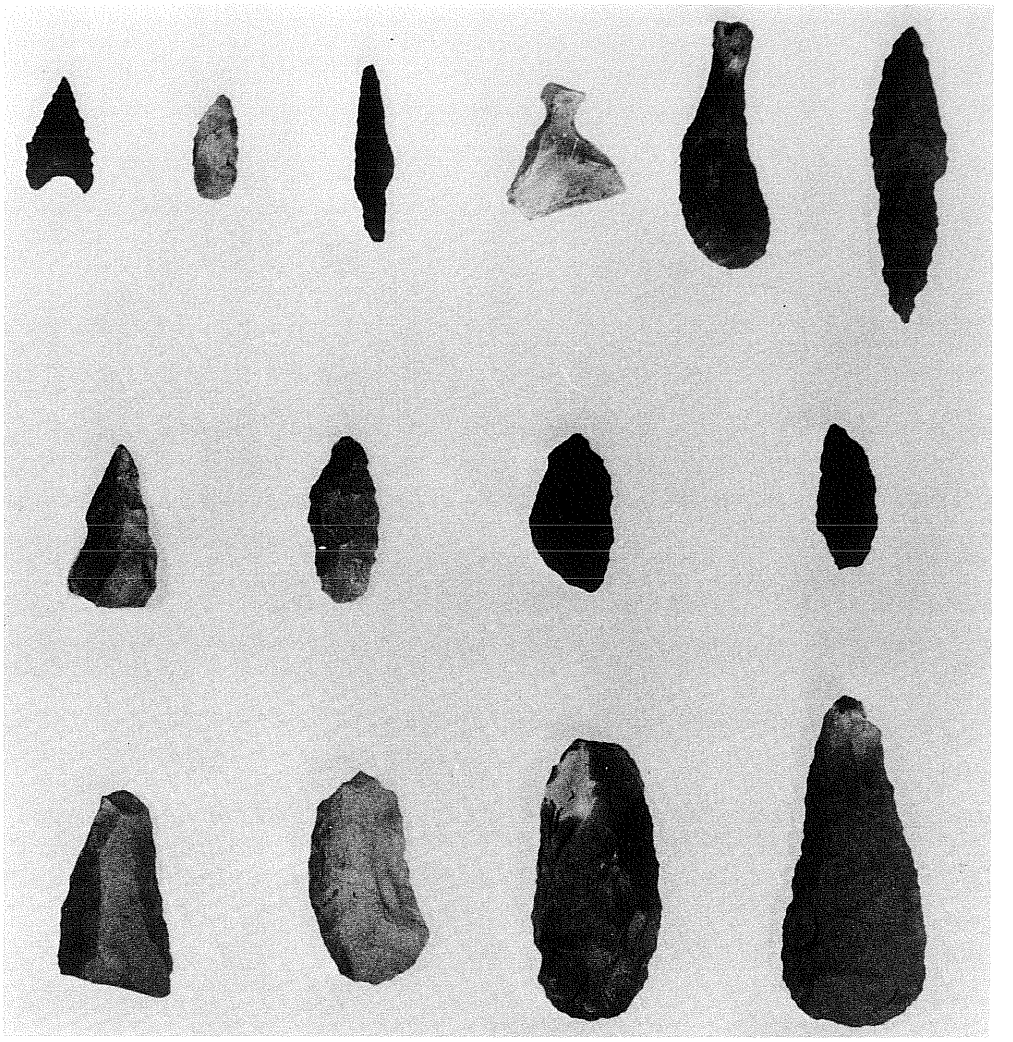


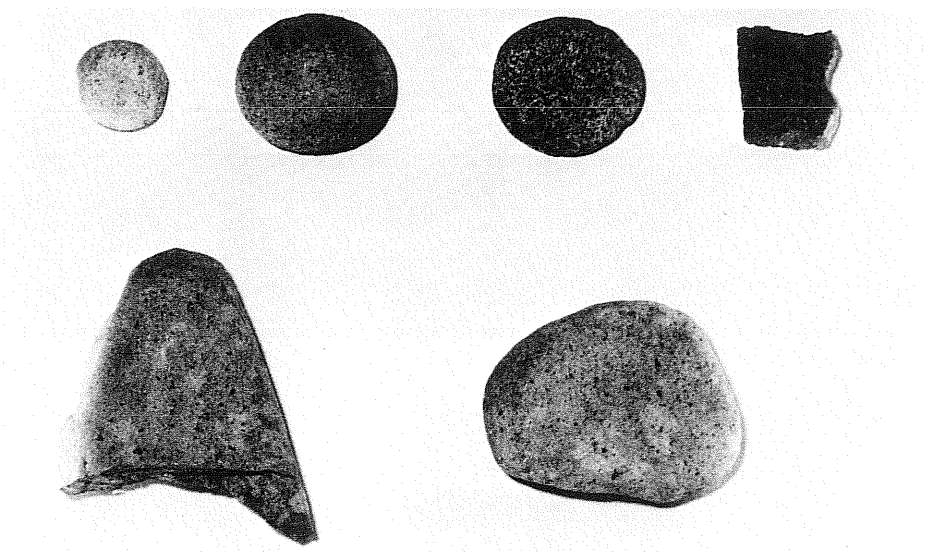
図版18　遺構内出土石器





図版19　遺構内出土石器

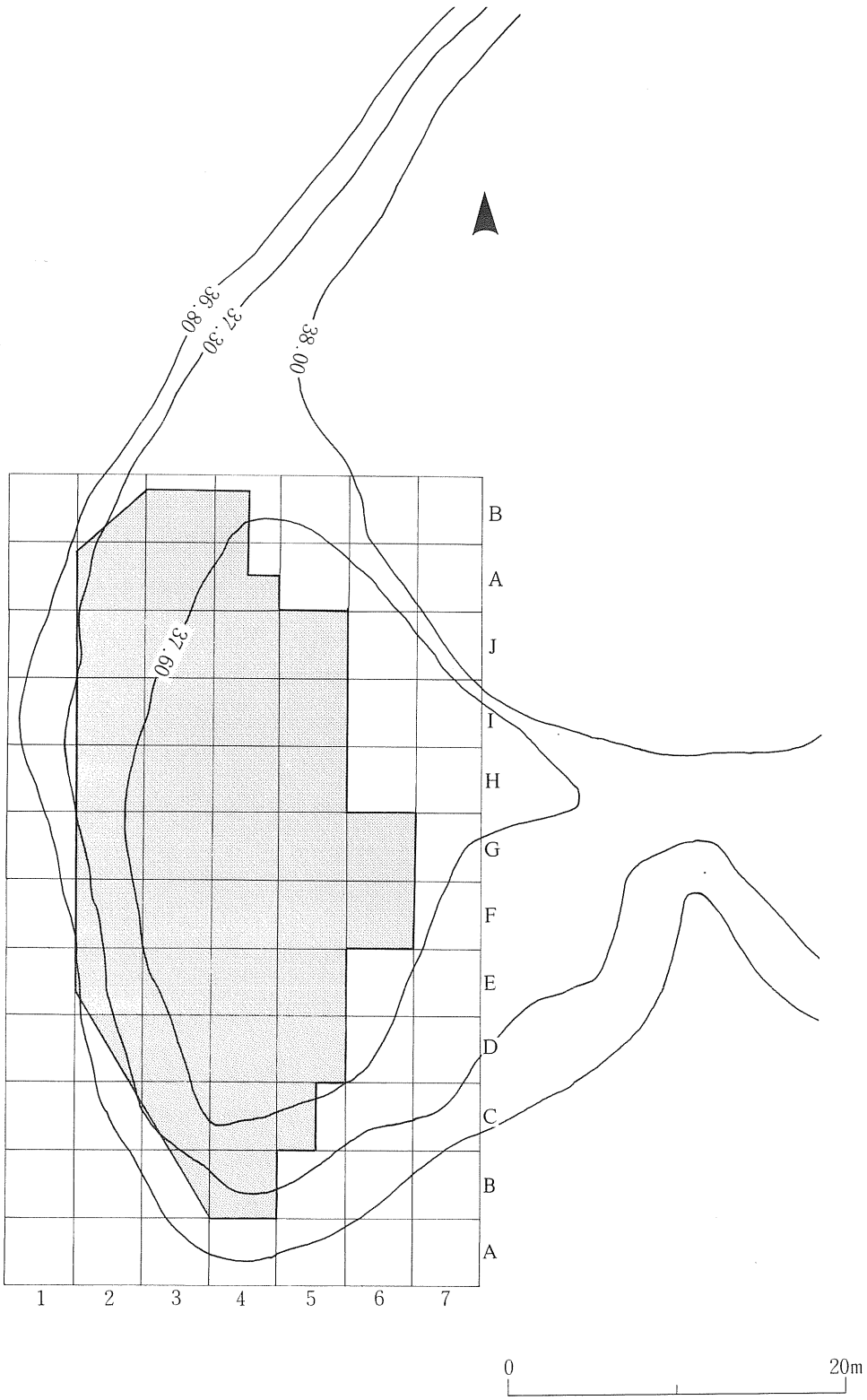




図版20　遺構外出土石器

野畑遺跡

第1図　遺跡周辺の地形



第２図　グリッド配置図

遺跡の概観

野畑遺跡は、標高36m 程の南側に突き出す小さな舌状台地に位置する。南側は、末戸松本から深く沢（湯ノ沢）が入り込み、水田が営まれている。水田と遺跡との比高差は９m である。

調査は、先に実施した範囲確認調査の結果をもとに、特に遺物の集中する範囲にグリッドを設定して行った。基本層序は、第１層表土（黒色土）、第２層褐色土、第３層ロームであり、ローム層までの深さは平均して50cmである。調査の結果、縄文時代中期末葉の竪穴住居８軒、中期末葉～後期初頭の土坑４基を検出した。

遺構と遺物

１号住居跡（第３図）

調査地域のほぼ中央部に位置する。プランは、長軸3.5m 短軸3.2m の隅丸方形を呈する。一部は範囲確認調査のトレンチによって攪乱されているが埋土は大きく３層に分れ、黒褐色土、茶褐色土、黄褐色土が堆積している。壁は、西側がゆるく傾斜するが、他の壁は高さ20cmでほぼ垂直に立ちあがる良好なものである。周溝は認められない。ピットは、大小多数検出されているが東側の壁沿いに深さ20cm以上のしっかりしたものがあり、柱穴と思われる。炉は、住居跡の東側に作られた土器埋設石囲い炉である。20cmくらいの扁平な長い石を円形に並べて埋設土器を囲っている。周辺は焼土が多量にあり堅くしまっている。床面は、平坦で堅く良好である。

出土遺物

土器（第11図５、17図11～13）

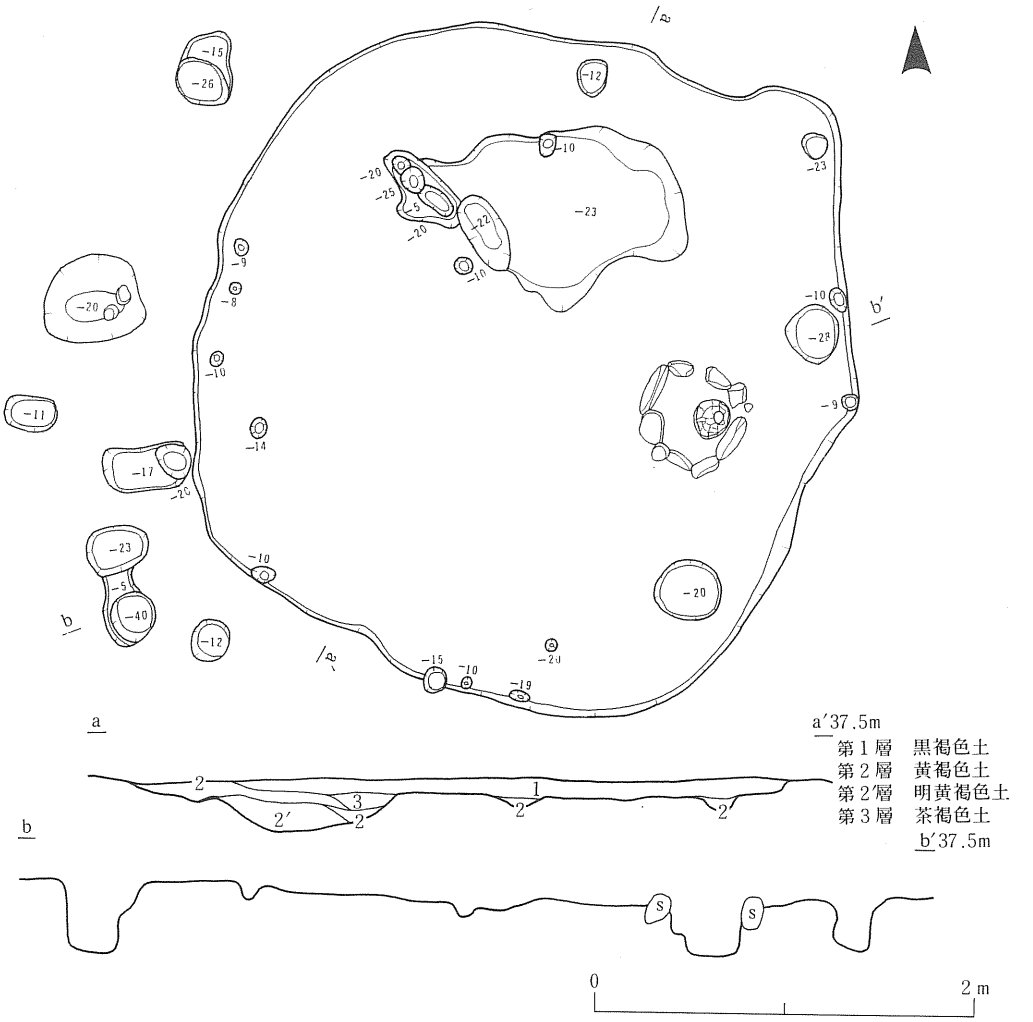
埋土から小破片が出土した。11・13は単節斜縄文、12は撚糸文である。炉埋設土器は胴部上半は欠損するが底部からゆるくふくらみながら胴部に至る深鉢である。地文の縄文はＲＬの縦位回転である。二次加熱を受け全体にもろい。

石器（第18図１）

炉付近のピット内から頁岩製の石鏃１点が出土した。

２号住居跡（第４図）

調査区の中央部に位置し、北東部に位置し、北東部は松の木根によって攪乱されている。また、北側は範囲確認調査時に東南から北西方向に入るトレンチにより床面まで表わされている。プランは、西、南側はピットが検出された部分が丸く張り出すが基本的には、一辺3.2m ～3.5m の隅丸方形を呈する。確認面から床までは10cmと浅いが、ほぼ垂直に立ちあがる良好な壁が検出できた。埋土は、周囲から入り込んだ黄褐色土が主体で、さらに炭化物を含む黒褐色土、ブロック状に茶褐色土が堆積している。ピットは、壁際のコーナー、張り出し部に堀り込みのしっかりした深いものが６個あり主柱穴と思われる。炉は住居中央東側に作られた土器埋設炉である。床面は、良好で、特に焼土が認められ堅い。



第3図　1号住居跡

出土遺物

土器（第11図2、17図14～16）

埋土から出土した土器片と炉埋設土器がある。14～16は埋土出土で15は撚糸文、16は口縁部が無文帯で下部に磨消し手法によって文様が展開される土器片である。2は、炉埋設土器で口縁、底部は欠損している。地文のＬＲ縦位回転の縄文を施文後に沈線によって区画し、磨消し縄文手法を用いて文様帯を展開させている。

3号住居跡（第5図）

調査地域の中央部からやや南に位置し、東側は3号土坑が住居跡を切っている。プランは、長軸4.5m、短軸3.4mの北西に長い楕円形を呈する。壁の高さは12～18mでほぼ垂直に立ちあがり良好である。埋土は主に黒褐色土、褐色土、茶褐色土が堆積している。周溝は認められない。ピットは

径40～50cm、深さ60～70cmのしっかりした堀り込みをもつものが北西寄りに４個検出され主柱穴と思われる。炉は住居跡の中心部に作られている。土器埋設炉であり、南北に並んで埋設土器が２個体認められる。周辺には焼土が多量にあり、床は赤く焼け堅くなっている。床面は全体によくしまり良好である。

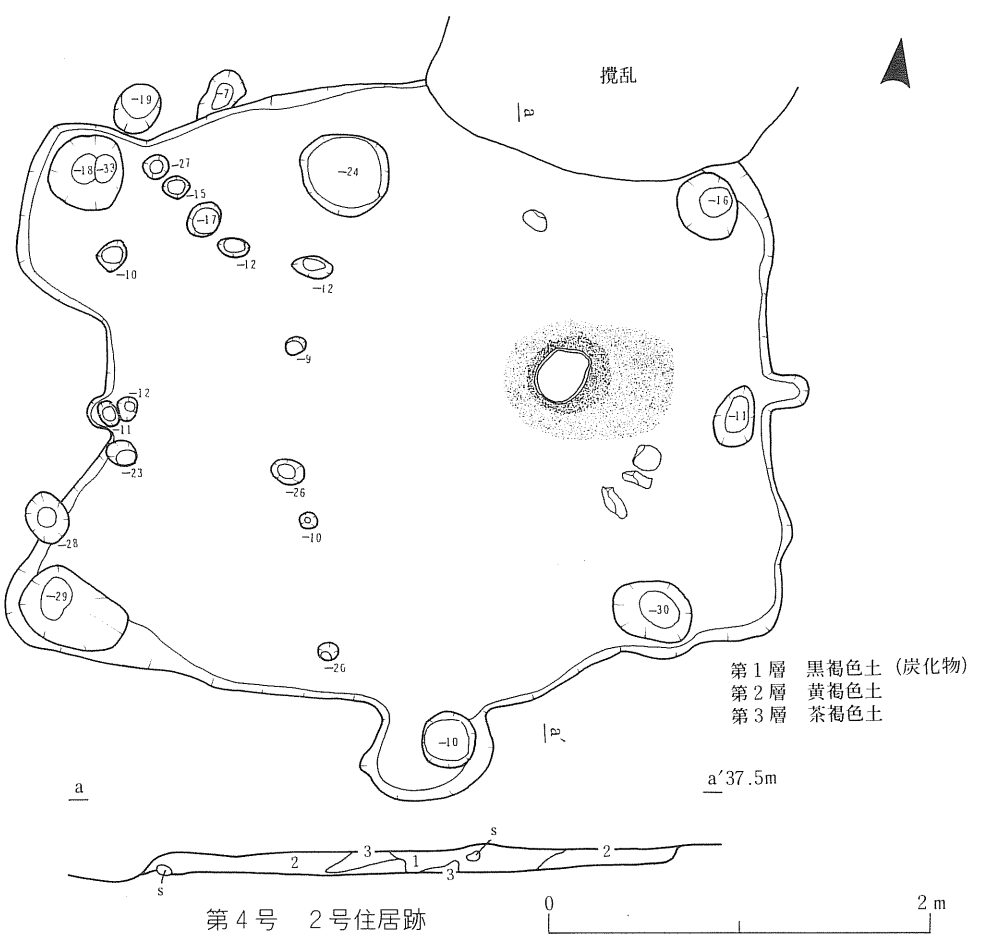
出土遺物

土器（第11図３・４、17図17～20）

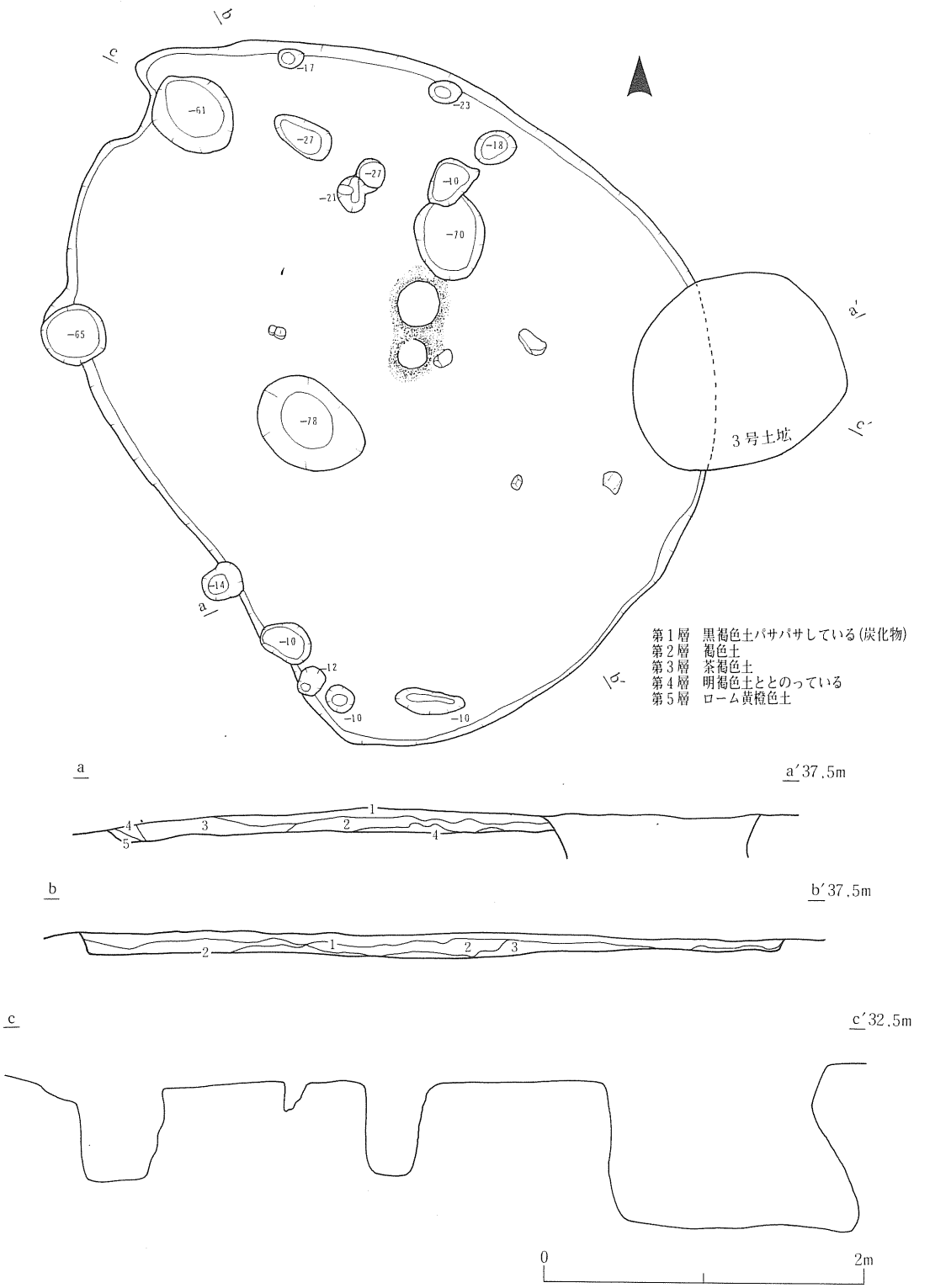
17～20は埋土から出土した土器片である。18以外は、沈線によって区画し、磨り消し手法を施すものである。３は炉北側、４は南側に位置する埋設土器である。３は胴上半部が欠損している。底部が小さく胴部がふくらむ深鉢である。地文の縄文はＲＬの横位回転である。４は胴部以外は欠損する。地文の縄文はＬＲの縦位回転である。３・４とも胎土、焼成は良好であるが３は二次加熱を受けて赤くなっている。

石器（第18図２・３）

２は埋土出土のきれいに磨いた磨製石斧で、石質は緑色凝灰岩である。３は脚付きの石皿である。明瞭に縁を施し、凹面は扁平でよく磨かれている。



第４号　２号住居跡


3号土坑
第1層　黒褐色土パサパサしている(炭化物)
第2層　褐色土
第3層　茶褐色土
第4層　明褐色土ととのっている
第5層　ローム黄橙色土
a
a′37.5m
b
b′37.5m
c
c′32.5m
0
2m

第5図　3号住居跡